



青春アメリエナイ彼女

且進久

write:you illust:ナリ

夜がすぐそこまで迫った藍の空模様。都心から少し離れた文京区白山の街並みは閑静で、大学までのメインストリートは講義を終えて帰宅する大学生たちで占められていた。

学生のほとんどが最寄り駅へと向かうなか、俺の進む方向は正反対だった。学生たちの流れに逆らうよう、大学に向けて駆け抜けていく。

疑問があった。

――なんで俺は会社の制服で大学に向かってんだよ！

マスコットキャラの白ネコがプリントされた緑のブルゾン、下は薄ベージュ色のズボン。宅配業者『大和配送』の作業着、すなわちバイト先の服装だった。

勢いよく両足を前に出しながら腕時計を見て焦燥感が強くなる。まずい、急がないと待ち合わせに遅刻する。

「あ、ヤマトの人だ」すれ違っただれかが言った。「荷物配ってんのかな、足はえー」

違いよっ、と俺は加速しながら心の中で否定する。

よく見ろ、荷物なんて持ってねえだろ。持ってるのは肩にかけたトートバッグだけだ。バッグの中はルーズリーフと筆記用具が入ってるんだ。

会社の制服姿だけど俺は大学生だ。

これから大学なんだよ。

夜間の。二部の。

仕事なんてとうに終わっている。

みんなが帰宅する頃に、俺は登校なんだよ。

今日はわけあって制服のまま大学に向かってんだよ。

制服のまま授業受けるハメになったんだよ。

くそっ、罰ゲームだよなこれ。

どうしてこうなったんだっけ。ええっと……。

待ち合わせに遅刻しそうなのは、バイトのせいだ。

普段なら定時であがれるのに、今日に限って先輩から集荷を頼まれて残業させられたんだ。家に帰って着替えていたら待ち合わせに遅刻すると思って、職場から大学へと直行したんだ。

そもそも、どうして待ち合わせなんてしているのか。

根本的なところまで遡るなら堺教授に頼まれたからだ。

春休み、二年の堺ゼミ受講者一覧が大学の掲示板に張り出されたとき、俺は教授室に呼ばれた。そこで堺教授からゼミ長に任命され、そしてあることを頼まれた。

「今年度のゼミなんだけど、一部から二部に転部してくる学生がうちのゼミに入るんだ。名前は君島智幸（きみしまともゆき）。そこでゼミ長の三浦くんをお願いなんだけど、君島くんの面倒見てほしいんだよね」

「面倒、ですか？」

「具体的には、初回のゼミのとき教室まで案内してほしいんだ」

「案内なんて大学も二年目ですよ。いちいち必要ないと思いますが」

「授業入る前にある程度交流しておくとお互い馴染みやすいじゃないか」

「まあ、そうですかね」

「待ち合わせは創始者の銅像で、時間は午後五時五十分。そう君島くんには伝えてあるから……って、そうだそうだ。三浦くん携帯持ってなかったんだっけ。とりあえずじゃあこれ、君島くんの大学個人用パソコンのメアド。メモってあるからあげる。連絡するならパソコンでやりあって」

「はあ」

「最低限の連絡事項は向こうに伝えてあるし、別に連絡先はいらないと思うけどね。銅像前は新歓時期終わってるから待ち合わせに使ってる学生も少ないと思うし、すぐ君島くん見つけられるよ。それじゃまかせるよ。ボク、これから学生たちと飲み会だからさ。いやあ、人気ある教授は辛いねー。わははは。頼んだよゼミ長、シクヨロ」

「はあ」

と、なんとなく呆けていたが、いや待てよ。

「……って、先生。ちょっと待った先生っ！」呼び止めたがすでに遅かった。堺教授は俺の視界から消えていた。

しまった。君島智幸の外見がまるでわからない。教授はすぐ見つけられると言うが、やはり当日着ていく服装とかカバンの色とか、事前にどうするか連絡を取り合っておいたほうがいい。

家に帰って自宅のパソコンから君島智幸にメールを送ったのだが、エラーで送れなかった。メモを見直してもう一度送るがやはりエラー。

このメモ、メアド間違ってるじゃねえか……。

頼むよ教授。あの人はどこか抜けている節があるからな……。

結局、それからバイトが忙しくて教授に問い直しに行けず、まあなんとかなるだろと楽観も重なって、気づけば待ち合わせ当日。俺は額に汗を浮かべながら走っていた。

急がないと、待たせるわけにはいかないと、そう一心不乱に前に進んでいると――ひらりと、桜の花びらが視界を横切った。

足を止める。顔を上げると東星大学の校門が開いていた。

腕時計を見ると午後五時四十九分。ほっと胸をなで下ろす。よかった、ギリギリ間に合った。もう急ぐ必要はないと、呼吸を整えて校門をくぐった。

校門から待ち合わせ場所の銅像まではゆるやかな勾配になっていた。道の両端には春を象徴する満開の桜が咲き誇っている。春風に揺らされて桃色の花びらがはらはらと舞い落ちるなか進みながら、もうすぐ出会うだろうソイツの名前を口にしていた。

「君島智幸か……」

一部、つまり昼の時間帯に授業受けている場所から夜の二部に転部してきた男子学生。

どんなやつなんだろう。これから一年間仲良くできるだろうか。会社の制服姿の俺を見たら驚く、よな……。あー、笑われるかも。うわ、初対面からそれって最悪だ。第一印象が大事な

のに。ちくしょう、残業さえなければ……。

ため息をつきながら散った桜の絨毯を踏みしめる。そうして勾配を上った先、待ち合わせ場所である東星大学創設者の銅像が現われた。

そして、いた。

学生がひとり、だれかを待つように佇んでいた。

「……あれ？」

けれど、頭上に疑問符を浮かべた。

待っていた学生は男ではなく――女だった。

さらりと夜風になびくショートカット、照明が艶のある亜麻色の髪を照らしている。顔のパーツは端正に整っていて、瞳は黒真珠みたいに綺麗だった。背は低く、線の細い体つき。服装は水玉のシャツに、下はレギンスにショートパンツをはいていた。

舞い散る夜桜に囲まれて佇む様は、桜の精みたいだった。

俺は惚けたように立ちすくむ。視線と意識が彼女に奪われていた。

宵闇に飲まれそうな彼女は儂げで、切なげで、そして綺麗で。周りの夜桜も彼女を映えさせる最高の背景となっている。

フレームにおさめて映像にしたいほどの画。ビデオカメラを手にしていたら、きっと構えていた。

「あ」

一瞬、目が合った。彼女と。

心臓がドクンと跳ね上がった。

亜麻色の髪が夜風になびくと、胸の奥で心が揺れる音がした。

いままで味わったことのない感覚がして、とんでもなくアホみたいなことを考えてしまった。

――一目惚れしたときってこんな感じなのだろうか、と。

「……アホ」

目を覚ますよう軽く頬を叩く。なに考えてんだ俺は。

待ち合わせ、そう、待ち合わせだ。待ってるやつは男子学生で、早く君島智幸を探さないと。

ほかに銅像の周りに人が待っていないか見回す。が、君島智幸と思しき男子学生はどこにも見当たらない。いま待っている学生は彼女ただひとり。

君島智幸はどこにいる？ 遅刻か？ なにか特別な事情で遅れているのか？ それとも単に時間にルーズなだけ？ 待ち合わせを忘れてるってことはないと思うけど……。

ひとまず俺は銅像前に立って待つことにした。横には二人分の空白を置いて亜麻色の髪の彼女が立っている。

君島智幸は、訪れなかった。時間が経ってもそれらしき人物は一向に現れない。

困った。ゼミの講義が六時十分から。いまが六時ジャストだから猶予はあと十分。このままずっと待ちぼうけくらっていたらゼミに遅刻する。初日から遅刻ってのは勘弁してほしい。

ちらっと横に視線を滑らせる。隣にいる彼女も、いまだだれかを待っている様子で何度も携帯で時間を確認している。

時折、彼女が俺にチラチラと視線を送るが……気になるのは当然だろう。ヤマトの制服姿で荷物も配らず待ちぼうけくらってんだから。

「——ん」

待て。

そうだ。俺、いま制服じゃないか。傍目から見たらバリバリ荷物と笑顔を届ける人じゃん。『場所に届けるんじゃない、人に届けるんだ！』の人じゃん。相手から気づけないのは当然だ。

失念していた。俺から君島智幸に声をかけるつもりだったけど、君島智幸だって俺を探しているかもしれない。もしかしたらとっくに君島智幸とすれ違っているんじゃないか。だとしたらまずい。

どうするか。

ふと、トートバッグの中身がちらりと見えて——ある方法が脳裏を駆け巡った。

だけど迷った。

なんて原始的、なんて非文明的。こんな方法、悪目立ちするだけだ。

思考の回転数を上げてほかの方法を考えるが、まるで妙案が思いつかない。携帯電話を持ってないところも面倒なのか……。

マジでこれやるのか。苦肉の策にもほどがある。

迷えば迷うほど時間だけがいたずらに流れていく。この間、君島智幸は俺が待ち合わせ場所にいないと思いこんで、慣れない夜のキャンパスをふらふら彷徨っているかもしれない。ひとり心細い思いをしながら。

「……ああもうっ」

半ば自棄気味に俺はトートバッグから取り出したのは、ルーズリーフと赤ペン。俺はまっさらなルーズリーフに赤でデカデカと文章を書きこみ、そして目立つように高らかと掲げた。

○君島智幸さま 社会学部二部メディア学科はこちらです

恥ずかしさで死ぬかと思った。

いままでキャンパス内をヤマトの服装で歩いていても学生に胡乱げに思われなかったのは、かろうじて仕事だからと勘違いしてくれたのだろう。だが、「この中に君島智幸さんはおられますかー、こっちですよー」と荷物運ぶはずの人間が格安バス旅行のツアーコンダクターみたく集合の旗を振っている。傍から見れば奇妙だ。アンバランスだ。わけがわからない。

ほら見る、行き交う学生たちがチラチラ怪訝な視線を俺に送っている。なかにはクスクス笑っているやつもいる。くそ、見せ物じゃねえぞ。あ、いや、見せ物ではあるけど。

あらゆるメディアが発達した現代社会で、紙に書いて伝えるという原始的な手法。メディア学科に在籍しながらこの程度のメディアの扱い方しかできないのか俺は。自分の機転の利かなさとアイデア不足に嘆く。

もしこのまま君島智幸に声をかけられなかったらとんだお笑い種。……恥ずかしい。めちゃくちゃ恥ずかしい。針のむしろだ。頼む。頼むからさっさと気づいてくれ——

「あの」

と、中耳に響いた声。息に混じったかすかな戸惑い。

横を向く。声の主は、俺の横にいた亜麻色の髪的女子大生だった。

「それ……、そのルーズリーフ、どうして？」

彼女が『君島智幸』の文字を指差しながら、意外そうに目を丸めている。

「君が……三浦、九……？」

「えっ、と」

今度は俺が驚いて目をパチパチと瞬かせた。どうして彼女が俺の名前を知っている？ 彼女とは初対面のはず。なのにこの状況で話しかけてくるということは……。

「あ、そっか。まさかあんた、君島智幸——の友人？」

「……え？」

「いや、君島智幸が来れなくなったから、代わりに俺への言伝を友人に頼んだのかなって」

「私が君島智幸だけど」

たぶん、俺はいま間抜けみたいにはぼかんと口を開けていたと思う。

彼女のセリフがすぐに理解できずフリーズした思考のまま、目の前の美少女を見直す。長い睫毛にうっすらと桜色に塗られた唇。女性特有の胸元の膨らみは……そこそこ、ある。

以上の外見と彼女のセリフから導き出される答えは一つだった。

「え、え——ええええっ！」

仰天した。君島智幸って女かよ！

いや、そうだ。冷静になって考えれば、教授から性別は教えてもらってなかった。あの教授は学生なら男女関係なく君付けで呼ぶ。おまけにトモユキって名前が勘違いに拍車をかけて、俺が勝手に男だと思い込んでいた。

「……君、正直どうかと思う」

「え、ど、どうかって？」

「なんでじっと見てるのかな……人の胸を」

「い、いやっ、こ、これは他意があるわけじゃなくてっ！」

「……………」

智幸のジト目が突き刺さる。痛い。

「違うって！ 君島智幸って、智幸って名前だろ。だからてっきり男の名前だと思って！」

口にした瞬間、智幸は目尻をきつく吊り上げる。むっとした不機嫌面だった。

「最低」

あ、やっべ。これ地雷踏んだ。

「悪かったね、男の名前っぽくて」

「あ、いや、聞け、俺の話聞いてくれ！ 教授からあんたのこと詳しく聞いてなかったんだ。だから勘違いして女だってわからなかったんだ。ほら、トモユキなんて男の名前だと思うだろ。」

フツーはだれが聞いても男だと思うだろ。な、なっ」

まずい。慌てて弁明すればするほど余計なことしゃべってどつぼにはまっている気がする。その証拠にほら、智幸の睥睨は鋭くなっていく。

「……なに、智幸が女の名前だとおかしいって言いたいのかな。変だって言いたいんだ」

「へ、変とか、そういうつもりはなくて……」

「どうせ名前からじゃわからないよね！ ふん、おかげさまで小さい頃からほかの人にも散々そう思われ続けたよ。はいはい、どうせおかしいと君もそう思ってるんでしょ。そうなんですよ。母親が智美で父親が幸雄でそれを組み合わせたしょーもない名前だよ」

「いや、だからそれは」

「でも、君だっておかしいですよ。大学のキャンパスに仕事の服装でいるんだから」

「なっ……！」

「君が私を`わからなかった、ように、私だって君を大学生だとして`わからなかった、よ。ヤマト男子さん」

ふふんと、言い返してやったと口端を持ち上げる智幸。その小生意気な態度に俺はぎりっと歯噛みした。こいつ、可愛くねえぞ。

「ヤマトの服装で登校するハメになったのはこっちだっているいろいろな事情があるんだよ。聞くか上司への愚痴。契約社員の嘆き」

「ふん。事情があるっていうなら違う人に頼めばよかったでしょ」

「俺はゼミ長なんだ。教授に面倒頼まれたんだ」

「ゼミ長って偉そうに言うなら携帯ぐらい持ってほしいよ。教授に聞いたら携帯持ってないって言うし。このご時世に携帯持ってない大学生って始めて見た。現代に生きる原始人だね、君」

「バカにしてんのかお前。好きじゃねえんだよ携帯。いきなり電話かかってきて煩わしいし、ピコピコうるせえし、金もかかるし」

「連絡できたらすれ違わなかったのに。ま、君みたいに人の胸ばかり見るいやらし一人に番号なんて知られたくないけど」

「んだと……っ！」

あまりにも小憎たらしい彼女の態度に感情的になった直後、クスと笑い声が聞こえた。ふと我に返った俺は周りを見て、「なにやってるの、あれ」「さあ」と周りの学生がクスクス笑っていたことに気づいて、途端恥かしくなってしまう。

なにやってんだ。落ち着けよ。こんなところで言い争いしてどうする。

「……ねえ。それ、しまつてよ」

智幸も恥ずかしくなったのか、耳を赤くして周囲の目を気にしながらぼそぼそと言った。

「ルーズリーフ、早くしまつて。ほら早く。君、持ったまま怒鳴ってた。恥ずかしい」

「わ、わかってるよ！」

「あと、ゼミに遅刻しちゃうよ。連れてって」

「それもわかってる。ほら、こつちだ！」

俺はルーズリーフをくしゃくしゃに丸めてトートバッグに放り込み、智幸とともに銅像をあとにした。

東星大学は一号館から八号館まで校舎があって、都心に大学を構えているせいで敷地面積は広くないが、校舎が密集しているせいでどの教室にもすぐにアクセスできるというメリットがあった。だから二部の講義が行われている六号館も待ち合わせ場所から徒歩ですぐだ。

歩きながら、智幸との会話は特になかった。

夜のキャンパスに慣れていないのか彼女の足元はどこか慎重だ。昼の時間帯とくらべて、周りの学生の数も少なく、静かで、印象がずいぶんと違うのだろう。

このまま黙って教室まで智幸をつれていっては教授の目論みを見無視するようなものだ。俺としても春学期は同じグループなんだから、できることならうまくやりたいと思って声をかけた。

「堺教授から俺のこと少しぐらい聞いてると思うけど、一応形式だと思うし、時間がないから歩きながらで悪いけど簡単に自己紹介しておく。社会学部メディア学科堺ゼミ所属、ゼミ長の三浦九な。サッカー選手の三浦知良の三浦に、『上を向いて歩こう』の坂本九の九」

「待っているときは上どころか恥ずかしそうに下向いていたけど」

「余計なお世話だ！ 関心のある分野は映像制作。今年度は実際に映像機材を使って映像作ってシラバス見て、去年と一緒に堺ゼミを希望した。はい、以上。次、あんただ。簡単でいいから自己紹介してくれ」

「私は君島智幸、女。以上だよ」

「簡単すぎるだろ！」

「……………」

智幸はどこまで自己紹介すべきか少し迷っているように見えた。数秒の間を置いて、「はぁ」と深い息を吐いて諦めたように答えた。

「将来的には広告の研究がしたいと考えてるんだよ。映像を使った広告に興味があったから、堺ゼミ。ちなみに、一部にいた去年も堺ゼミだった」

確か堺教授は一部と二部の両方のゼミを担当している。受講する時間帯こそ違うものの、ゼミの内容は同じだったんだろう。

「ゼミのグループ決めだけど、春休み中に張り出された掲示板見たか？」

「ううん。忙しくて見てなかった」

「ほかのゼミはたいてい初回の講義のときにグループを決めるらしいけど、堺教授は春休み中に決めるんだ。講義中にグループ決めるなんて時間ももったいないってことで。で、俺と君島は一緒のグループだから」

嫌な顔されるかと思ったけど特に表情を変えることなく「ほかの人は？」と質問された。

「俺と君島、それからあと二人いて、全部で四人の班な。ほかの二人については教室に着いたときに紹介する」

そうして俺たちは六号館内へと移動した。三年前に新設された比較的新しい校舎の構造は、近代的なガラス張りで透明性が高く開放的な空間が広がっていた。

いま俺たちがいる一階は、教務課、医務室、学生相談室、就職相談室など、学生生活を送る上

で重要な場所が集まっていて、さらに地下には食堂がある。二階から上は教室となっていて、ゼミも二階の教室で行われる。

智幸と一緒に階段を上り、二階のゼミ教室前に到着した。

「ここが堺ゼミの教室な」俺はドアを開けて中に入った。

もうすぐ講義が始まるせいか、教室には堺ゼミの受講生がほとんど揃っていた。数えると現在十一人。あと来てないのは……どうやら海だけか。

「少ないね」

智幸は教室をぱっと見回して口にした。最大収容人数六十人ほどの教室に十一人しかおらず、教室内はがらんとしている。

「一部はもっと多いのか？」

「今年度は知らないけど、去年はいまの二倍ぐらいの数はいたよ。これでほとんど？」

「そうだな。一年のうちに辞めたやつ結構いるからな。仕事が忙しいとか、学費払えなくなったからとか。あ、妊娠したってやつもいたな」

「に、妊娠!？」

「さすがにあればレアケースだったけどな。まあでも、一部より退学者は多いんじゃないか」

俺が智幸にそう説明しながら教室を進んでいくと「おっ、久しぶり九」なんて声をかけられた。「おはよー」「また一緒だね」「バイトから直行? お疲れー」と教室にいた学生たちが次々に挨拶してくれる。受講生の顔ぶれはほとんど昨年度と同じだから新鮮味はあまりない。

一方、智幸は少し驚いている様子だった。大半は俺と同じ年代ぐらい学生なのだが、昼にはいないような学生がいるからだろう。

「……三浦くん」

「どうした？」

「あの人、どこかの教授？」

智幸の視線の先、教室の最前列の席に還暦を過ぎた老女がタブレット端末をいじっている姿があった。

「ああ、京子さんな。教授じゃねえよ。俺たちと同級生。リタイアした人間が大学に通って勉学に励む、そういう人だっけいまじゃそう珍しくないだろ」

「じゃ、じゃあ、あのスーツを着ている人は? ここ二年のゼミだよ。就活は来年のはずなのに」

「ああ、山さんか。会社切り上げて通ってんだよ。高卒で就職したらしんだけど会社がブラックらしくて、大学卒業して就職し直したいんだと。でも本当にブラックだったら大学行かせてくれないと思うんだけどな。冗談なのか本気なのかいまいちわかんねーんだよあの人。まあ山さんと京さんは同じグループではないけど……って、おい、どうしたぼうとして？」

「あ、えっと、なんていうのかな……。いろんな人がいるなって」

……。いろんな人、か。

なるほど。そっか、昼から来ればそういう反応にもなるか。

それならきつと、例えば、五年も日の光の下で授業を受けていない人間も智幸の言う『いろん

な人』に分類されるんだろう。

「普通が、いいよな」

「え、なにか言ったかな？」

「いや、なんでもない」

俺が前を向いたそのときだった。快活とした挨拶が飛んできた。

「九一ちゃん！ こっちこっちー！ へいへい、かっもーん！」

俺のほうにぶんぶんと大げさに両手を振っている人物。女子大生、というよりはローティーン誌のモデルでもやってそうなほどの童顔で、服装はTシャツにデニムとラフな格好。瞳はリスのようくりっと大きく、髪型はセミロングでくるくるとパーマをかけていた。

同じ班のメンバーのひとり、笹野真季（ささのまき）だった。

「うるせえよ真季。いちいち大声出さなくてもわかる」

「おいすーおいすー九ちゃん。今年もまた一緒のゼミだと思ってテンションあがっちゃったのだ！ ていうかどったんその服装？ バイトからそのまま大学に来たの？」

「聞くな。いろいろあったんだよ」

「そっかそっか、いろいろか！ いろいろなら仕方ないね！ それならいろいろ今年も一年間ヨロシクってことで！ グウッ！」

真季は満面の笑顔を浮かべてサムズアップすると、俺の隣にいた智幸に気づいた。だれだろうと疑問符を浮かべているので、俺は紹介した。

「彼女は君島智幸な。君島、こいつが俺たちと同じグループのひとり、笹野真季だ。テンション高ければ世の中なんとかなるって考えてるやつだ。いわゆるバカだ。ハッスルバカだ」

「ひっど！ なにハッスルバカって！ 勝手に変な俗称つけないでよ！ もういいよ九ちゃんはおっちいってて。あたしはユキちゃんと仲良くやっからさー。よろしく頼むぜ、ユキちゃん！」

「ゆ、ユキちゃんって……」

「え、やだ？ じゃあトモチんがいい？ それとも、ちんトモ？ ユキトモ？ ユキリン？ ユッキーナ？ ユキユキ？ ちんトモ？」

「ちんトモって……しかも二回言ってる」

ネーミングセンスにどん引きしている智幸だったが、真季はお構いなしに接近。「よろしくね！」と雪を溶かす小さな太陽みたいな笑顔を浮かべて「ユキちゃんはほかに授業いつあるの？」

なに履修した？」「メディア史とってる？ お、じゃあ一緒じゃん！ いいねいいね！」「なんかわかんないことあったらあたしが教えてあげるよ。えっへん」「あ、でもノートとか取り忘れてたら助けてほしいなー、なんて。えへへ」と、自動小銃みたくひとりで勝手に喋っていた。智幸は話すペースになかなかついていけず目を回しているみたいだった。

「――真季、そんなに一方的に話したら相手が戸惑うよ」

ふわりと、穏やかな声が聞こえて俺は背後に振り向いた。

そこにいたのは同じ班の最後のメンバー、青山海（あおやまかい）が片手を上げてにこやかに微笑んでいた。

「海ちゃん！ 海ちゃんだあー！」

「やあ、真季。きのうの授業ぶり、かな」

唇に微笑みを乗せる海。体の線は細く、服装は桜色のシャツに茶色のジャケットを羽織って、下はベージュのスキニー。まるで海の性格を表すような落ち着いた色の服だった。

「九は一週間ぶり、になるのかな」

「そうだな。カフェにコーヒー飲みに行って以来だ。今日も手伝いか？」

「うん。それで危うく遅刻しちゃいそうだったよ。ていうか九、ヤマトの制服で登校なんてどうしたの？」

「どいつもこいつもツッコミやがる。まあ無理もないか。」

「いろいろあったんだよ」

「いろいろ、ね」

海はなにか察したようにちらっと智幸のほうを見やる。

「同じグループの君島智幸さん、だよな？」

海は智幸を男と勘違いしてなかった。さすがだ。こいつは妙なところで鋭い。

「九から君の名前は聞いていたんだ。僕は青山海。これからのゼミ、仲良くやってくれると嬉しいな」

にこっと柔らかな微笑をたたえる海。

智幸はどこか勝ち誇ったような顔つきを俺に向け「ほら、男だと勘違いしたのは君だけだよ。最低は君だけ」と瞳が告げていた。

「よかったよ。ようやくまともそうな人に会えた」

安堵の息をつく智幸。

迂闊だな、と俺は内心ほくそ笑んでやった。

「そうだ君島さん。お近づきのしるしにコーヒーでもどうかな？ ぜひ飲ませてあげたいんだ」

「え、コーヒー？」

君島は缶コーヒーでもくれるのかと思っていたのだろう。だから、海のリュックからコーヒーメーカーが飛び出してきて度肝を抜かれたように目を丸めていた。

「ネパール原産の美味しいコーヒーがあるんだ。あ、珍しいと思った？ 僕はネパールが好きでさ、時間があるときネパールに行ってコーヒー栽培を手伝ってるんだ」

言いながら、海はリュックからは、魔法瓶、紙コップ、スティックシュガー、ミルク、マドラー、とまるで講義に関係ないアイテムを次々に展開。智幸は困惑で目を回している。

「え、ちょっと、これは……？」

「化学肥料ナシの有機栽培。ネパールの地形を利用して、コーヒー豆を標高の高い場所で育てることによって有機栽培を実現可能にしている。フェアトレードのNPOに所属もしてるんだけど、僕の先輩がネパールのコーヒー豆栽培の土台を作ったんだ。最初はそれはもう大変だったらしい。ネパールの不適合な環境に合わせて、いちからコーヒー豆を研究して、苗から栽培して... ..けどね、苦労が実ったおかげで安全で安心でおいしい豆に仕上がってる。薬品の臭みがなくて、酸味やコクがあるのが特徴的なんだ。まだまだ伸び白があって、これからもっとクオリティの高い豆ができると思うんだ！」

「え、えっと、私が聞いたかったのはコーヒーの説明じゃなくて、どうしてコーヒーメーカーなんて持参しているかなんだけど……」

「バイト先で使っているコーヒーメーカーが壊れちゃってそれで今日は新しいやつを持ってきたんだ。あ、遠慮せずにじゃんじゃん飲んでいいよ！ 一応砂糖は持ってきているけど、できるなら最初は砂糖なしで飲んでほしいな。コーヒー本来の甘みがわかるから」

まともじゃなかった！ と智幸が片眉をぴくぴく痙攣させている。

俺は思わず笑ってしまう。困り果てた智幸の薄目がこちらに向けて、「早く止めてよ。いじわる」と言いたげだ。このまま放置しておくのも面白いが、さすがにここらが潮時だろう。もうすぐ講義がはじまるというのにコーヒーセッケー式広げられたままだ困る。

「海、教室で喫茶店でも開く気か。もうすぐ授業はじまるんだぞ。大学になにしに来てんだ」「海ちゃんだってユキちゃん戸惑わせてるじゃん！ あたしに注意しておきなながら！ アルコールハラスメントならぬコーヒーハラスメントだ！ コヒハラだ！」

「あ……」

指摘されて、コンセントにコーヒーメーカーのプラグを差そうとしていた海が停止する。「あはは。つい押し付けみたいになっちゃったね。ごめんね君島さん。まったく僕の悪いところだ。反省しないと」

ばつが悪そうに頬を掻きながら、海は広げたコーヒー道具をリュックにしまっていく。信じられないことだが、こいつはネパールコーヒーを布教しようとしていて一式持ち歩いているのだ。「君島さん。こんな僕だけこれからよろしく。またゆっくりしたときにでもコーヒー淹れるよ」

「……私、コーヒーって飲んだことないんだ。苦い飲み物ってあまり好きじゃなくて」

それを聞いた途端、海の顔は幽霊でも見たように青ざめた。

「コーヒーを、飲んだことない、だって……？ それは、それは……もったいない。うん、もったいないよ君島さん！ ああ、飲ませてあげたい。いますぐにでも淹れたてのコーヒーを飲ませてあげたいなあ。どうしようかな……。よし、僕が手伝ってるカフェにこれから連れってあげるよ。さあ行こう」

「行くな！ これから授業だアホ！」

海のコーヒー談義がはじまりそうになったのでやつの頭を叩く。真季は腹抱えて笑っていて、海は再び自省して苦笑した。

智幸はといえば授業がはじまってないのにすでに疲れきった様子だった。

こうして、俺、海、真季、そして智幸の班員がすべて揃ったところでチャイムが鳴った。六限目の授業開始の合図。

するとドアが開いて堺教授が姿を現した。年の頃は四十代前半。無精ひげが特徴的で、猫背でのそのそと教室に入ってくると、智幸に一瞥をくれた。無事智幸がグループで固まっているところを見て安心したのか微笑を浮かべている。

特に声をかけられることもなく、教授は教壇に立って指差しで出席を確認した。

「ひー、ふー、みー……おおっ、みんな揃ってるね！ えらいえらい」

受講生が全員席に着くと、教授がこほんとか払いして言った。

「こんばんは、教授の堺です。去年からボクのゼミを受講している人も、今年から新しく受講してくれる人もシクヨローってことで。ボクの自己紹介は……まあいいよね、そんなのみんなネットで見てきてると思うし、なにより時間もったいないからね。初回の講義をくだらない世間話で潰す教授もいるけど、好きじゃないんだよねそういうの。だから春休み中にメンバー割り振ってゼミ長もこっちで指名しました。ゼミ長は、その席に座っている三浦九くんね。困ったら彼を頼ってあげて。はい、拍手」

パチパチと拍手がして俺は形式的に席から立って一度頭を下げた。

「ボクも頼らせてもらっちゃおうかな、なんつって。あはは」

すでに頼られましたよ、と文句のひとつも言いたいところだがいまはぐっと我慢しよう。

「じゃ、講義をはじめよっか」

教授はチョークで、カッ、カッ、と黒板に授業スケジュールを書いていく。

メディア学科はその名の通りこの世のありとあらゆるメディア全般の研究を扱う。広告、テレビ、ラジオ、本、ゲーム、映画、携帯電話、などがざっとあげられる。

一年のうちは学科専門科目の必修は概論的な授業のほかに、映像制作に関する授業も受けてきた。映像構成の仕方、機材の扱い方、編集ソフトの使い方などだ。

二年からのゼミは選択式で、自分の関心事や興味のあるテーマからどの教授のゼミを受けるか選択する。俺が選択した堺ゼミはメディアの中で主に映像を中心に置くゼミだ。

今年度春学期、堺ゼミのシラバスに書かれた講義内容は映像制作。そして今回、映像制作するテーマは――

「PR映像だね。君たちにはうちの大学について紹介するPR映像を制作してもらおう。テーマは大学に関するものなら自由だ。創始者の歴史でもいいし、大学の施設をクローズアップするのもアリ。ただし上映時間は四分以内におさめること。それが条件。完成した映像は東星大学メディア学科の公式サイトにアップするし、夏のオープンキャンパスで上映する。ボクの評価にプラス、オープンキャンパスで高校生たちにどのPR映像がよかったかアンケート取ってそこで一番票もらったグループはいい評価あげちゃうよ。……さて、なにか質問あるかな？」

「先生、質問なんですが」

海が手を挙げた。

「どうぞ」

「出欠は毎回取るんですか？」

「いや、出欠は取らないし、成績に加点することもないよ。評価の判断は映像だけね。毎回教室に顔を出す必要はないから、このゼミの時間に撮影しにいらって構わないよ。ほかに質問は？」

今度は俺が挙手した。

「ほかの班と企画がかぶったらどうするんですか？」

「正直、あまりよしとしたりたくないな。けどまあその場合は仕方ない。ほかの班と合同制作ってことで。ほかに質問……ないみたいだね」

パンと、塚教授が開始の合図のように手を叩いた。

「じゃあ割り振った班でまとまって。企画書ができた班からボクのところに持ってきて。チェックしてアドバイスするから。オーケーしたところから好きにしていよいよ。もし決まらなかったら来週までにね」

俺は受け取った企画書のテンプレートを確認。おおまかに『映像タイトル』、『撮影スタッフ』、『企画意図』、『内容』の四つで区切られている。

さて、どうするか。

周りのグループはさっそく打ち合わせをはじめていた。俺もみんなで話し合おうと隣に座っていた海とともにイスを反転。後ろの席に座っている智幸と真季とボックス席のように向い合う。

で、二人はなにをやっていたかという。

「うほっ、ユキちゃん肌が雪みたいに白くてキレー！ 髪もつやつやじゃん！ あたしが男ならほっとかねーな」

「だからユキちゃんって呼び方は……」

「さわさわさせて！」

「は？ ちょ、ちょっと……っ」

「さわさわ！ さわさわ！」

真季は智幸の二の腕を触って触って触りまくって、そのうち好奇心をくすぐられたのか智幸にこちょこちょをしかけようとしていた。

「真面目に授業受けるバカ」ポカと効果音が出そうな手刀を俺が繰り出すと、「やられたー」真季が叩かれた頭を押さえておどけていた。

「い、いきなりなにをするのかな！ フツー人の体触らないよ。最低だ。もうっ」と、智幸は警戒するように自分自身で体を抱きしめながら、ちょっと照れくさそうにむくれてた。

「バカはほっとけ君島」

きっと真季なりに智幸と仲良くなろうとしたのだが、真季は遠慮がなさすぎるな。

「さて、仕切り直して大学のPR映像だが、まずなにを映すか決めないとな」

ゼミ長の自分が切り出して、話し合いがはじまった。

まず俺の意見としては、創始者の歴史とか大学の授業内容とか、そういうのも悪くないと思うけど、キャンパスの施設のほうが画としてはわかりやすいんじゃないかということ伝えた。それも四分という限られた上映時間のなかで大学の施設を紹介するなら、場所も当然ひとつに絞るべき。

そこで海が提案したのは、PR映像だから東星大学のウリ、ほかの大学と差別化されていて特色が出ている施設を撮ったほうが画面に映えして興味を引けるんじゃないかということ。

ひとまずここが東星大学のオススメって場所をみんなで挙げていくことになって、リストを作ることになった。パソコン教室、就職支援センター、百周年記念館、スカイホール、医務室、キャンパス内コンビニ、生協、屋上、図書館、学生相談室一一とにかく候補をあげていき、その中でどこがPR映像として面白いか話し合う。

話し合いの結果決まったのは、食堂だった。

理由はいくつかある。東星大学の食堂はフードコートのように広々としていて、和食、洋食、中華、さらには本格的なインドカレー店と七店舗が様々なメニューを提供している。さらにランキング形式のバラエティ番組に放送されたとき、大学食堂ランキング一位取ったことで話題になった。

俺はまとめ役として『食堂のPR映像』の企画書を書き上げ、堺教授のもとへ提出しに向かった。

「堺先生」

「お、書き上がったかい。三浦の班が一番だね」

俺が会社の制服を着て講義を受けていても堺教授はとくに珍しがることはなかった。いままで二部の講義を受け持ってきて、働きながら大学に通う学生を見てきたからだろうか。

「企画書提出する前に、ちょっといいですか」

「ん、なんだい？」

智幸に聞こえないように小声で、しかし若干の陰を含んで俺は言う。

「先生がくれた君島のメアド間違っていましたよ。もっとちゃんとしてくださいよ」

「あれ、そうなの？ もしかして三浦、小文字のkを大文字のKで打ってない？ もしくはドット入れ忘れてたとか」

「俺のせいっすか？ 勘弁してくださいよ。こっちは事前に君島と連絡取れなかったせいで、あいつの性別勘違いして大変だったんですよ。女なら女って教えてほしかったです」

「あー、ごめんごめん。まあでもいいじゃないか。無事つれてきてくれたわけだし。せんきゅーということで」

俺は呆れてため息を吐いた。

「……企画書、提出するんでチェックよろしくです」

「オーケイ」

教授は企画書を受け取って読みはじめる。

企画書の書き方は去年習った通りに書いた。ムダな文章は省いてこの映像ならではのポイントをわかりやすくまとめる。問題はないはずーと思っていたのだが、教授は眉根にしわを寄せた。

「食堂、ね……。実はこれと同じ企画書、もう提出されているんだよね」

「え」

意味が分からなかった。

だって、堺ゼミで最初に企画書を提出したのは俺たちのグループじゃないか。ほかのグループはいまだ顔を突き合わせて話し合っているぞ。

「うちのゼミの一部、昼の学生が食堂の映像撮るって企画書出してるんだよ」

虚をつかれた。まったく予想していなかったところからの一撃に俺は唇を歪めた。

「そればかりは……。どうにもなりませんよ」

「まあ、そうだね。ボクからすれば企画かぶりは映像の多様性が減っちゃうしできるなら避けたいけど……」

「俺たちが遠慮しろってことですか」

「いや、ダメというわけじゃないよ。要は考え方次第だよ。例えば、食堂ひとつとっても映像のネタは膨大にある。珍しいメニューをアピールするのもいいし、食堂で働く人間の一日のスケジュールに密着するのもアリだね。ただ、テーマはやはり同じだから一部の学生と協力して合同で映像を仕上げることだね」

一部の学生が先出ししているなら、講義の時間帯が後の俺たちはどうしても後出しになる。

そのための合同制作という教授の措置なんだろうけど、なんだか納得できない部分もあった。

もし俺たちが一部にいたならこの企画は通っていたーそう思ってしまうのはよくないことだろうか？

「……考え直します」

俺が班に戻ると話を聞いていた海が「一部の人と合同制作はなにかと大変そうだし、もう一度考え直そうか」と提案する。真季に関しては「しっかたないよー、九ちゃん。ドンマイ、ドンマイ！ もっといい企画考えればいーだけだって！ 次、いってみよー」能天気になりながら俺の肩をパシパシ叩いている。

「……それじゃあ、改めて企画書を作り直すぞ」

話し合いは、しかし思っていたより難航した。

リストの中で一番面白いと思った候補が食堂で、そこが使えないとなればほかの候補もどれも微妙に見えてくる。だとしたら、新しい候補を提案していくしかないが、脳をフル稼働させるが妙案は閃かず、真季なんか知恵熱でくらくらしたのか「あえてトイレじゃね？ ほらうちのウォシュレットすごいじゃん。トイレトペッパーなんてパイプ100%だよ。ダブルエンボス加工だよ。女の子の肌にも優しいよ。あえてね、あえて」などと迷走しはじめた。

煮詰まってきたなと思ったところで、授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。

「決まんなかったな。仕方ない、これは宿題だな。いったん時間を置いて考えたほうがいいな。大学の施設だけじゃなくて、一度頭をまっさらにしていろんな可能性を探ってみよう」

来週のゼミまでにそれぞれPR映像の企画を考えることが宿題となった。

第一回のゼミはそれで終了となった。

ゼミが終わると、真季がカラフルなボーダーのリュックを「よっ」と背負ってから、智幸に声をかけた。

「ユキちゃん、ユキちゃん」

「だからユキちゃんって呼び方は……はあ、もういいよ。何度言ってもわかってくれないし」

うんざりしたように智幸は肩を落とした。

「それで、なにかな？」

「あたしと携帯のアドレス交換しよーぜっ！ ぜっ！」

「……」

一瞬、黙る智幸。唇をきゅっと結んでつと視線をそらした。

「携帯、いま壊れているんだ」

こいつずっとぼけてんな、と俺は内心で訝しんだ。

そう思う理由はいくつかある。

一つ目、俺自身携帯電話は持ってないけど、職場では携帯を使っている。だから壊れたら代替機を渡されるはずで、代替機でもアドレスの交換ぐらいできるだろう。

二つ目は智幸の目の泳ぎ方。なにかごまかしているときの逡巡だ。

そして三つ目の理由、智幸と出会ったとき、俺が携帯持っておらず連絡できないことを馬鹿にしたくせに、当の本人が壊れているってのはおかしい話じゃないか。

距離、取ってんだろうな。

だけど疑問に思った。距離取るのは最悪な出会い方をした俺に対してだけじゃないのか。智幸が男の名前だと間違えて気分を害させた俺だけでは……。

ひょっとして智幸はだれに対しても一定の距離を取るつもりなのか。自分の両手を伸ばして広げた円の中にだれも入れないつもりなのか。

「ユキちゃん、携帯のバイブ鳴ってるよ？」

「え？」

智幸がつい反射的に自分のカバンをちらりと見た、その瞬間、カバンの中にゆいっと手が伸びた。

智幸はなにが起きたのかわからなくて呆然と口を開けて固まっているが、次の瞬間、真季の手には水玉模様のカバーに入った携帯電話（おそらく智幸の）があった。そしてパッと慣れた手つきで操作していた。

「オッケー！ ユキちゃんのアドレス、ゲットだぜ！」

「あっ！」

ハッとした智幸。自分の携帯電話を返却されてようやく事態に気づく。

「これでいつでも連絡できるねユキちゃん。困ったらいつでも連絡してきなよ。あたしにSOSを出せばいつでもどこでも助けに行ってるぜ！ あたしも困ったことあったら連絡するから！ 主にノート貸してとか！ ノート貸してとか！ ノート貸してとか！ せいぜい覚悟するがいいさユキちゃん！」

「ちょっと！ 勝手に人の……！」

「そうですお嬢さん。やつが盗んだのはアドレスじゃなく、あなたの心なのです！ なんつって！ フハハハハ！ じゃ、あたしは七限目があるからこれでおさらば！」

真季はバカみたいに愛嬌ある笑顔を振りまいて去っていった。「ちょっと！」と智幸が手を伸ばすが真季の姿はもう教室にない——と、見せかけて。

「あ、言い忘れてた！」

「戻ってきた！？」

びくんと両肩を跳ね上げて驚愕する智幸。しかし真季が声をかけた相手は海だった。

「海ちゃん海ちゃん、今日は何時に教務課のバイト終わるんだっけ？」

「二十二時ぐらいかな」

「把握したぜ相棒！　じゃあみんな、今度こそアデュオース！　いい夢見ろよー！」

真季がぴゅーと北風みたいに教室から消えると、智幸は心底疲れたように肩を落とした。

「……笹島さんっていつもあんな感じなの？」

「わりとな。バカは遠慮しないんだよ。ほら、さわさわって触られて身を持って知っただろ」

智幸が思い出したようにぶるっと身震いする。

「……もう、なにがしたいんだよ」

「仲良くなりたいたいんだろ、お前と」

「……………」

智幸は頭痛がするみたいにこめかみを押さえながら自分のカバンを持った。

「……それじゃあ、私も帰るよ」

「うん。バイバイ、君島さん。気が向いたら僕ともアドレス交換してね」

それについて智幸は黙殺したまま教室から出ていく。一方で海は別段気にせず、ひらひらと手を振って見送ってから、爽やかに白い歯を見せて笑った。

「いやー、さすが真季だね。あんなアドレスの交換の仕方があるとは」

「まったくもって褒められるやり方とは思わんけどな。あいつの辞書には遠慮とかパーソナルスペースとかって言葉は存在してねえのか」

「でも、なにもアクションしないよりはよかったと思うんだよね。真季はノート貸してなんておどけてたけどさー」

海はもう存在しない真季に微笑みかけた。

「去年一度も講義を欠席してないんだよね」

そう、だったな。

「僕はね、真季のそういうところも好きなんだ。こないだも真季はねー」

「あーはいはい、お前らのくだらないノロケ話は聞かんぞ。どうしても聞かせたいなら時給を要求する」

俺は手を振って会話を打ち切った。油断すると海は真季とのノロケ話を懇々と話始めるからだ。

そう、海と真季は付き合ってるのだ。

「俺たちもさっさと行こうぜ」

荷物をまとめて海とともに教室を退出する。そして通路に出ると、ちらほらと二部生たちが教室移動していて俺は一度立ち止まった。

「……海、ちょい遠回りだが、こっちの通路から行こう」

「ん、どうして？　九は帰るんでしょ？　あっちの道のほうが近道だと思うけど？」

「できるだけ人気がないところから帰りたい」

海は小首を傾げていたが、俺がヤマトの制服を指差して察したようだ。「そんな気にするほど人はいないと思うけど」

海の意見を無視して、俺は人通りが少ない通路を歩く。

「九。どうして今日に限ってバイト先の服装なの？ 授業前にいろいろあったって言ってたけど」

「別に面白い話じゃねえよ。君島との待ち合わせに遅刻しそうだったから、バイト先から大学に直行したんだ。それで制服着たまま登校ってわけ。おかげでひで一目に遭った」

「ひどい目に遭った？」

「勘違いとすれ違い。……なあ、海。お前、前にどこかで君島と会ったことないよな？」

「会ったこと？ 君島さんとは今日が初対面だよ。九から君島さんを迎えに行くって話は聞いてたから彼女の名前だけは知ってたけど」

「じゃあ、どうして君島が女だってわかったんだよ。智幸って名前だけ聞いたら普通は男の名前だと思わねえ？」

「僕の場合は親戚に『トモユキ』って名前の叔母がいるから先入観がなかったんだよ。漢字は朋友の朋に季節の雪で、朋雪。この漢字だと女性っぽいよね」

「それ、ずりい」

「あ、もしかしてさっき言った『勘違い』って、九は君島さんのこと男だと思っちゃったのかな？」

「ああそうだよ。俺が君島を男だと勘違いしてて、君島は君島で俺がヤマトの服装だから学生だと思ってねえんだよ。だから二人とも待ち合わせ場所に着いているのに気づかないで待ちぼうけ」

「あははは、『すれ違い』ってのはそういうことね」

「笑いごとじゃなかったんだぞ。俺、このままじゃゼミに遅刻すると焦ってさ、会社の服装で、『君島智幸さま二部メディア学科はこちらですー』って書いたメモ広げたんだぜ。学生の胡乱げな視線浴びまくり。アホ丸出しだったよ。恥ずかしさで死ぬかと思った。くそ、ほかにいい方法なにか方法が思いつけば……」

「君島さんも待ち合わせ場所にいたんでしょ？ 男だって先入観があったかもしれないけど、ダメもとで九から声をかけるのもひとつの手だったんじゃない？」

「それは、そうかもしれんが……」

俺は仕事で薄汚れた制服を見て唇を尖らせた。

「だ、だってさ、男ならまだしも、こんなダサイ格好で可愛い女の子に話しかけるの、その、なんつーか、結構、勇気いるっていうかさ……」

それを聞いた海はニヤリと口を横に広げた。

「可愛い女の子……ほう、ほう」

「なにが言いたいんだよお前」

「いや別に。ただ今年のゼミもなかなか面白くなりそうだなって。君島さんとは仲良くやれそう？」

「さあな。わかんね。わかんねえことばかりだ」

「まだ会ったばかりだからわからないのは仕方ないよ。けど、ちょっと気になるな。どうして君島さんはわざわざ一部から二部に転部してきたんだろう？ 珍しいよね。その逆は聞くけどさ

」

どうして智幸は昼から夜へと切り替えたか？ 確かに気になる点ではある。

「どうなんだろうな。そこらへんの事情は聞いてねえよ」

「秘密があるのかもね」

海は意味深に口端を持ち上げた。

「は？ 秘密？」

「――彼女、なにか特別な秘密があったりして」

海はうっすらと笑った。

「なんてね。根拠のないただの勘だよ。なんであれ、君島さんとは仲良くやりたいね。九の口から可愛いなんて言葉を引き出した女の子だもんね」

「可愛いのは顔だけだ。ちょっと名前が男っぽいからって理由だけであいつはへそ曲げて食ってかかってきやがる。性格は可愛げねえぞ」

俺はブルゾンをくしゃりと掴んだ。

「なにが大学生だってわからなかっただ。あいつ、俺の格好見て心のなかで笑ってんだろうな」

「……………」

通路の端まで歩いて一階へと階段を下りたところで、海が立ち止まった。

「九、七限は？」

「ねえよ。これからどっかで飯食おうかなって。海は？」

「僕はこれから教務課のバイト。だからこっち。ここでお別れだね」

「そっか。じゃあまたな。今年もゼミ、よろしくな」

「ねえ、九」

「ん、なんだよ」

「—————」

え？

キーンコーンカーンコーン、と七限開始のチャイムが鳴り響いた。海がなにか言った気がしたけど、チャイム音に掻き消されてよく聞こえなかった。

「……いや、なんでもないよ。じゃあ、今年もよろしく」

なにを言ったのか問いかける前に、海の背中は教室移動する学生たちに遮られて消えた。

海のセリフはハッキリと聞こえなかったけど、かすかに拾えた言葉をつなげると、

――見える世界すべて悪く見たら、そう見えちゃうよ。

聞き間違いだろうか、そんな類のようなことを言っている気がした。

「やっべ、金をおろしてなかった」

外で飯を食おうとして財布を開いたら小銭しか入ってなかった。しめて三百六十八円。

しまった。智幸を迎えに行ったからバイト終わりに金をおろす時間がなかったんだ。

三百円あれば、優秀なコスパを誇るうちの大学食堂で飯を食えるのだが、ヤマトの制服姿を思い出して躊躇した。バイト先の格好で学食食べてるところなんて知り合いに見られたくない。

しかし大学付近の飯屋はどこもそこそこ値が張る、持ち合わせで足りるかどうかわからない。コンビニのATMで金をおろすのは手数料がかかるから避けたい。ケチ臭いと思われるかもしれないけど、少しでも節約できるなら節約しておきたい。

家に帰って自炊するのも手だと思ったが、冷蔵庫に食材がなかったことを思い出す。カップラーメンでも買うか？ いや、この前カップラーメンだったじゃないか……。

だとしたらやはり――

地下一階、食堂に続く階段前で俺は立ち往生していた。行くか、退くのか、ぐるぐると頭の中で葛藤して五分が経っていた。

「……………帰るか」

階段から離れようとしたところで、盛大に腹の虫が鳴った。うまい食いもん寄越せと。

「……………あーあ。食欲には勝てねえな」

最終的には羞恥心より食欲が勝った。

地下一階にある食堂はひとつの巨大なフロアになっていて、座席数1300のランチスペースは伊達じゃなく広々とした空間が目映る。

二部の学生のことも考慮して夜遅くまで営業している食堂の座席は三割ほど埋まっている。彼ら彼女らのすべてが二部生というわけではなく、一部の学生にとって授業後の駄弁りの場にもなっている。

隅っこの席なら目立たない。どこかい席はないだろうか……。

「お」

目立たず、人もいない、ちょうどいい塩梅のテーブル席を発見した。その席に向かう途中、ぴたりと足が硬直した。

背後から声をかけられたからだ。

「あれ、三浦……？」

びくっとなった。

寒気すらした。

しまった、と思ったときにはもう遅い。足を止めたってことは反応したのと同義だ。下手を打った。名前を呼ばれても無視してツカツカ歩けばよかった。いまならまだ間に合うだろうか？ いや、難しい。あとでなにか言われるのも面倒だ。

俺を呼ぶってことは知り合いだろう。声の調子から、ゼミの人間ではないことはわかる。嫌な予感しかしない。

恐る恐る振り向いて、声の主を確認した。その瞬間、後悔で胸が押し潰されそうになった。

「三浦、だよな？」

長机のテーブル席、イスの背もたれに腕をかけてこちらに振り返っていたのは――阿藤だった。一応、知り合いではある。

それも、いま会いたくないほうの。

「お、やっぱ三浦じゃん。服装ですぐに気づかなかったわ。てかそれ、ヤマトの服装？ あれ、お前ヤマトでバイトしてんだっけ？ でもなんで大学で着てんの？」

「……………」

俺は無愛想に黙りこくった。

どうしてこのタイミングで知り合いが見つかるのか。それも同じ中学出身のやつと出会うなんて……自分の不運を恨みたくなる。

「なんだよ黙って。まあいいや。元気してんのかよお前？」

阿藤は立ち上がり、ポンポンを俺の肩を叩くが、ハッキリ言ってそんな気軽に触れあうほど仲のいい関係ではない。中学三年のときクラス行事の関係で少し話した程度だ。

「なんだよなんだよー、なんか元気ねーじゃん。お前、いつもそんなつまねえ顔してるよな。大学生になっても相変わらずっつかさ」

お前は変わったな。見た目だけだけど――なんて内心で毒づく。

阿藤は中学の地味な格好とは打って変わって耳にはピアス、髪は派手な金髪に染めていた。一山いくらで売られている安易な個性付け。変わったように見えて、中身はまるで変わってないのだろう。だからほら、軽薄な口調は相変わらずじゃないか。

「……別に、どうでもいいだろ」

俺と阿藤は同じ中学出身というだけでなく、厳密に言えば高校も一緒だった。

ただ、時間帯が違った。

阿藤が全日制で、俺が定時制。

阿藤が授業を終えて帰宅する頃に、俺は働き終えて登校する。そのすれ違いの際に、時折顔を合わせて阿藤はへらへら笑いながら言った。

「お勤めご苦労さん」

あいつは俺の肩をぽんと叩いて、自転車に乗って部活の仲間たちとバカ騒ぎながら帰っていった。

――ああ、思い出しちゃった。

あのときからだ。自分と世間との間で、少しずつ歯車がかみ合わないようなズレを感じるようになったのは。

俺も高校生、みんなと同じ高校生。昼も夜も関係ない。そう言い聞かせてバランスを保とうとして、しかし足場はすぐに崩れた。

決定的にズレているんだなとわからされた日があった。卒業式だ。それは俺のではなく、阿藤の。

阿藤が卒業する日、俺は卒業するまであと一年学校に通わなければならなかった。

満開の桜の下で同い年が卒業してバカみたいに笑っているのを、俺はバイトで汗かいた額を拭って遠目で眺めていたんだ。

阿藤と再会したのは大学の新歓のとき。偶然、本当にたまたま出会って、あいつが先輩で、俺が後輩で。同い年なのに違って、その違いが妙に息苦しかったのを覚えている。

普通が、遠く感じる。

手の届かない位置にあることを知った。

大学生になったいまだって、正直自分のことがよくわからなくなる。大学で授業を受けている時間より昼間に働いている時間のほうが長い現実。俺は大学生なのか？ 大学生ならどうして会社の制服なんて着ている？ 大学生が噛み締めている普通の学生生活を噛み締めているのか？

時々、そんな疑問が強烈になって肺を圧迫する。

会社の服装のせいで被り物を着ているような違和感があった。自分の立ち位置がひどく曖昧で、人と違ったところに立っているように思われる。

「俺、用事あるから」

俺は阿藤を友達ではなく知り合いと認識している。阿藤だってその認識だろう。別段俺なんてどうでもいいはずだ。なのにどうしていちいちフレンドシップを示すかわからなかった。

その理由は、阿藤の周りを見て大方理解した。隣の席にはスナック菓子を食べている男子学生がひとり、さらに向かいの席にはテーブルの上に広げた旅行雑誌を眺めている女の子が二人。

――ああ、自分は友達多いよってアピールか。

「……じゃあな」

暗くて刺々しい感情が湧き出そうになった。

鬱屈とした感情を押さえこむために、この場からさっさと立ち去ろうとして、しかし阿藤は俺の肩をがっしり掴んでいた。

「こいつ、三浦って言うんだけど、中学のときのツレで、一応高校も一緒なんだよ。それで大学も同じ。すごくね、珍しくね？」

軽躁な態度と言葉を並べながら阿藤は親指で俺を差す。一部に通う友人たちに示すように。自分の持ち物であるかのように。

やめてほしい。本気で。

「けどこいつさあ、むかしからすげえウケが悪いの。なんつーの、愛嬌がないって感じ。背が高く顔は悪くないんだから、愛想よくすりゃモテると思うんだよな。なのになんかつまんなような態度でさ。ほら、いまもそうだよ。大学生生活をムダにしてんだよ。三浦、ひとつ教えておいてやるよ。学生のうちだけだぞ遊べるのは。いま遊ばないと後悔するって」

どこかで聞いたような紙のように薄っぺらな価値観。ありきたりで無個性なセリフ。反吐が出る。

「そこんところ、オレはちゃんとわかってんだよ。だから今度いまここにいるメンツで、ゴールデンウィーク伊豆に旅行に行くわけ。三浦もさあ、堅物キャラやめてそういうところ遊びにいこうぜ。社会人になったら遊べないんだぞ」

くだらなかつた。どっかから一山いくらか買ってきたような言葉を並べているだけ。阿藤が言えるのはせいぜいその程度だと聞き流していた。

そのときまでは。

「でも、こいつは偉いと思うぜ」

呼吸が、止まった。

「三浦は経済学科……あれ、文学部だっけ？ えーと、まあ、とにかく二部なんだよ。二部。それで働きながら大学通ってたんだよ。ほら、いまバイトの服装じゃん」

手が、震えた。

「すげーよな。オレ、働きながらとかぜってー無理。辛くて仕事か大学どっちか辞めるわ。高校のときもこいつ昼働いて夜に学校通ってたんだぜ。こういうやつ見るとすげえなーって思うよな」

へらへらと阿藤の唇が歪んでいた。俺にはそう見えた。

「――マジ、ソンケーするわ」

瞬間。

頭の中が沸騰した。

憤然として目の前が真っ赤に染まった。

一瞬にして感情のメーターは限界まで振り切った。

爆ぜるように俺は阿藤の胸倉を掴んだ。

射殺するような眼光で阿藤を睨む。息でないほどの強さで胸倉を締め上げる。

「……なっ」

阿藤の陽気な態度は一瞬で吹っ飛び、わなわなと唇を震わせ怯えていた。

辺りが水を打ったかのように静まり返り、そこでようやく気づいた。無意識のうちに、右手の拳はぐっと力強く握られていた。

「な、なんだよ……っ！ オレ、すげーって言ってるだけじゃん！ 意味わかんね！ 本気で意味わかんねえ！」

阿藤がワーワーとなにか叫んでいた。涙目だった。周りの人間が恐ろしい獣でも見るかのように目を剥いていた。

……馬鹿にしてんだろ。

お前らどうせ蔑んでんだろ。

「……ッ」

血が出そうなほど下唇を噛んで、俺は阿藤のみぞおちを押し飛ばした。

体が熱い。血が熱を帯びている。呼吸が荒い。このままここにいると息苦しくてたまらなくなりそうで、俺は阿藤たちに背を向けた。

離れないと、ここから離れないと――

「こわい」

ぞくりとした。

女の声が、俺の背中に突き刺さった。

その瞬間、ぽつりと水滴が心を濡らした。

雨だった。

心の中に、ざあざあと音を立てて雨が降ってきた。

「――普通じゃないよね」

だれかが放ったその言葉は、杭みたいに胸のど真ん中に打ちこまれた。

肺が軋んだ。

心の天井から降る雨脚がいつそ強くなる。弾丸のように降りそそいで、俺の熱を、温度を、気持ち、あらゆるものを冷たくしていく。

まずい。

この感覚はまずい。深みにはまると抜け出せなくなる。

「……………」

頭が重くなってうつむく。

一步、鉛みたいに重い足を前に出す。

二歩目はさっきよりも早く。

三歩目で前傾姿勢になっていた。

交互に繰り出されるつま先が徐々に加速して行って早足になっていく。

ストライドが大きくなる。

夜の冷たい空気が割けていく。

目に映る景色が後ろへと流れていく。

「――――ッ」

気づけば走っていた。

疾走なんて爽快な走りではない。行き先も目的地もない、腕だけをはがむしゃらに振った走り方だった。

振り切って、忘れて、すべてを背後に、過去に、前に、ひたすら前だけを。

なにかから逃げるような必死さで脈拍を上げていく。

撃ち抜かれるような激情に身をまかせて突っ走る。そうすればなにも考えられずいられた。呼吸が荒くなって苦しくなるおかげで別の苦痛を遠くに押しやることができた。

気づけば階段を駆け上がっていた。ガンッ、ガンッ、と靴底で叩きつけるように勢いをつける。息が上がった。太ももの筋肉が軋む。身体的な苦痛がより強くなった。

階段。また階段。終わらないループ。それ以外よくわからない。ここがどこの階段なのか、どこに続く階段なのか、いまどこにいるのか、視覚が歪んで、ぼやけて、曖昧になってよくわからない。そのうち色を失ってモノトーンへと変わっていく。

心の中で降り止まない雨に打たれながら、走って、走って、走って、逃げて。

――マジ、ソンケーしてる。

うるせえよ。

上からもの言ってんじゃねえよ。俺と同じ場所に立ってねえヤツが。

偉いね？ 尊敬する？ ふざけんな。なにわかったような口きいてんだよ。なんも知らねえくせしやがって！

こっちだってわかってんだよ！ 普通じゃないことぐらい！ 立派に生きてるやつとは違えんだよ！

俺だって！ 俺だって普通の高校に行きたくないわけじゃなかった！ 選べなかったんだよ！
夜の世界しか俺にはなかったんだ！ 仕方ねえじゃん……どうしようもなかったんだ！

「————ッ！」

なのに、なんでそんなこと……。

じわりと視界が滲む。下を向くと余計なものがこぼれそうだったから顔を上げる。地面が柔らかくなったみたいに足元が覚束なくなる。平衡感覚がなくなって、やじろべえみたいに体がぐらぐら揺れる。

どこでもいい。

だれもいない、夜の闇みtainな場所に行ければいまはどこでもいい。

あいつも、こいつも、どいつも、俺を知らない世界。

俺のことを知らないやつがいる世界へ——

「——三浦、くん？」

突然、鈴の音を転がしたような綺麗な声がした。

夜風に乗って届いたその声音は、俺の視界に色と輪郭を与え、ズキズキと胸に突き刺さる痛みを遠のかせた。

不意打ちみたいに呼び止められて、俺は立ち止まる。

辺りを見回す。走りついた先は、どうやら五号館の屋上だった。

屋上は空中庭園みたいになっていて、ちょっとした花壇やベンチが備え付けられている。周りを見渡せば東京ドームを中心とした大都市の光源があり、黒の絨毯に極彩色のビーズを散りばめた幻想的な世界が広がっている。

そんな壮観なパノラマを背後に背負っている人間が、いた。

この屋上に、たったひとりだけ。

「君、島……」

体が熱い。ハッ、ハッ、と舌を出した犬みたいに呼吸が乱れている。地球の天井から夜の静謐さが下りてきてバクバクうるさい自分の心音が聞こえる。

智幸はベンチに丸まるようにちょこんと体育座りして、イヤホンに耳にはめてなにやら聴いていた。片手に三ツ矢サイダーを持っているその姿は、青春をテーマにした飲料水のCMに起用されてもおかしくないほど画として映えていたが、突然、俺が現われて驚いたのか飲み物をこぼしそうになっている。

俺だってびっくりした。なんで。どうして。帰ったんじゃないのか？

「どうして、君島がここに……？」

智幸は携帯から繋がっていたイヤホンを耳から外して、答えた。

「休憩、だよ」

「休憩？」

「君たちといて疲れたから。一休みしてから家に帰ろうかなって。ホント、みんな騒がしくて疲

れるよ」

やれやれと肩をすくめて、三ツ矢サイダーのキャップをしめる。

「聞きたいのはむしろこっちだよ。どうして三浦くんがここに？ しかもなんかすごい勢いで走ってきて……びっくりしてちょっとサイダーこぼしちゃった。もう」

ドキリとした。やばい、バカみたいに走ってたところ見られてる。俺いま、くしゃくしゃで情けない顔してるんじゃないか。焦って服の袖で顔をごしごしと拭く。

「あ、いや、えっと……と、トレーニング」

「嘘でしょ」

ソッコー看破された。

「嘘つく男の人って最低だと思うけど」

「ほ、ほっとけよ。別に大した理由じゃない。どうでもいいだろ」

「……どうでもいいって、まあ、別に言いたくなかったら言わなくていいよ。確かにどうでもいいし」

「ならいいだろ」

「けど、ここに来たとき君は上を向いていた」

上を向いて――ふいに頭の中に浮かんだのは坂本九の曲だった。

茶化してんのかと思ったが、どこか様子が違う。背後にあるビル群の明かりが智幸の真剣な横顔を照らしている。俺を小馬鹿にした感じは、そこにはない。

「坂本九の『上を向いて歩こう』ってさ、励ましの歌だと思っていたんだよ」

突然、智幸はそう言って続けた。

「けど、たぶん違う。あの歌はなにかを励ましているわけじゃない」

夜空を仰ぐ。都会の夜空に浮かぶ星の瞬きは弱く、黒い闇が無限に広がっていた。真っ暗で、巨大な闇のうねりに飲み込まれそうな、夜。

「そういえばちゃんと歌詞の意味を理解しようとしたことないなって思って、『上を向いて歩こう』の歌詞をさっき見返してたの。携帯で」

「白状したな。携帯壊れてないこと」

「もうバレちゃってるもん」

悪びれもせずよく言う。

「それで歌詞読んでてさ、ああ、これは励ましの歌じゃないなって。あれはたぶん、悲しいことをぐっと耐える歌なんだよ。子どもがつかずいてひざを擦りむいて泣きそうになるのを我慢する、そんなイメージ。悲しいことに耐えようとするから、上を向くんだよ」

俺も歌詞の意味をちゃんと理解しようと思って聴いたことはなかった。ただなんとなくだれかを励ます曲なのかと思っていた。

「もちろん私の勝手な解釈で、自分の考えが正しいって言うつもりはないよ。でも、なんで励ましの歌だと思ったんだろ。震災のときよく流れていたからかな。刷り込み的に励ましの歌なんだって思ったのかな」

「さっき聴いてたのは、坂本九か？」

「そうだよ。ストアでダウンロードして聴いてて、そしたら君はここに走ってきて……上を向いていた」

俺のほうをまっすぐ見つめて、智幸は重ねて言った。

「上、向いてたんだ」

彼女はそれ以上なにも言わず、俺の言葉を待っているのかように佇んでいた。

無自覚だった。上を向いていたなんて。

「……普通じゃないんだ。俺は」

思いがけず、インクみたいに言葉が滲み出た。

「普通がいいんだ、君は」

「……そうだよ。悪いかよ」

「――みじめ、なんだ」

ぞくっとした。

胸の内で抑圧してきたみっともない感情を、智幸はそう言い当てた。

――みじめ、なんだ。

リフレインする。頭のなかでぐるぐると周りはじめ、それを否定しないと本当に自分がみじめなんだと烙印を押されそうだった。

「お前に……っ」

業腹で肩が震えた。刃向うように語気を強めた。

「お前になんでそんなこと！」

今日、それもたった数時間しか一緒に過ごさなかったやつなんかには、わかった風なことと言われるのが気に入らなかった。

「なんだよ、なんなんだよお前は……なんでそんなこと言われなくちゃいけねんだよ。出会ったときからなんかツンケンしてて、こっちは君島のことと思って、いつも以上に仕事早く切り上げようと荷物配って、早く終わったら先輩に仕事押し付けられて、いいように使われて！」

苛立ちがぶりかえす。

作業着で登校したすべての責任を君島智幸に押し付けるつもりはない。バイトでこき使われて遅れたせいでもあり、すれ違いで恥かいたのだから教授の伝達不足が一因だ。

だけど、ずっと好き勝手言われ放題なのは気に食わなかった。だから理由を上乗せして噛み付きたくなった。

「やっと大学で出会えたと思ったら、お前は愛嬌ねえし、みんなとは距離取るし……なんでそんなつまんねえ態度なんだよ！ もっと笑ってくれりゃ俺だって！」

熱を帯びていく自分とは裏腹に、どこか冷静な自分がいて喚きながら気づいた。

おかしい。自分がいま吐いたセリフ、阿藤も同じようなこと言ってなかったか。

違和感を覚えながらも激情は止まらない。津波のように押し寄せてくる。

「君島のことと思って作業着のままバイト先から直行して！ 着いたら着いたで君島のこと全然見つけられなくて、焦って、もうどうすりゃいいか困って、キャンパスのど真ん中で『君島さまこっちはです』なんて紙に書いて！ お前には生意気な口叩かれて！ こっちは君島のことと思って、

君島のこと考えてんのに！」

君島君島って本音を漏らしすぎだ。ストッパーをかけるはずの理性が濁流のような感情に飲まれて役に立たない。

「君島を迎えに行かなかったら私服に着替えられたし！ 金だっておろせたし！」

息つく暇もなく声を大にして荒げる。なにに怒っていたのか、自分のなにを守ろうとしていたのか、俺の頭はくらくらしてきて曖昧になりそうだった。

「みじめだからなんだよ！ お前になにがわかんたよ！ どうせお前だって俺のこと笑ってんだろ！」

破裂した気持ちは止まらず、押さえつけていた感情をすべて吐き出さない気がすまなかった。

「俺がお前にそこまで嫌われるようなことしたかよ！ そんなつまんねえ顔すんなよ！ なんてお前はそんなに可愛げねえんだよ！」

のどが熱い。

全身も熱に浮かされたような心地だった。

もう知らない。この際だ、全部全部思いのたけをぶつけてやる。あるがままを言ってやる！

「こっちは君島のこと、一目惚れするぐらい可愛いと思ってんのにさ！」

言った。思いっきり感情ぶつけてやった。どうだ智幸。ハハハ、ざまあみろ。おかげでこっちは清々したよ。胸に抱えたストレス全部吐き出して――吐き出して？

……あれ？

あれ、あれ、あれ。

ちょっと待て。

俺いまおかしいこと言わなかったか？

なにか、とんでもない、どうしてこうなった、みたいな間違いを犯したような気がした。大学受験で試験終了したと同時にマークシートがひとつずつずれているような、背筋が凍るような間違い。

怒りで燃焼していた脳内はガロン単位で氷嚢をぶち込まれ、一気に頭のなかが真っ白になる。

え、え。なんだよ。マジで俺なんて言った？

――ヒトメボレ。

あれ。俺、そう言った？

だれに向かって？

智幸に？

「……………は？」

はあああああああああああ――――っ！

「あ、お、あっ」

途端、自分でも急激に顔が真っ赤になっていくのがわかった。熱したやかんみたいにカンカンに熱い。体温が急上昇する。心臓が早鐘を打つ。なんだよこれ。一目惚れ、一目惚れって！

「や、あ」

エサを食べる鯉みたいに口がパクパク動くだけで言葉にできない。

智幸はガラス細工みたいに綺麗な瞳を点にして、端正な顔面はコールドスプレーがかけられたみたいに固まっている。長い睫毛が一ミリも動いてない。当たり前だ。急に一目惚れなんて言われて啞然とするに決まってる。

沈黙が下りること、少し。

智幸はショートの前髪を夜風に揺らしながら、くるりと踵を返す。

終わった。

その瞬間、俺の中でガラガラと音を立てて瓦解していくものがあった。

やらかした。俺、やらかしたっ！ 内心で「うあああ」と絶叫して後悔で頭を抱えた。

「――笑ってないよ」

りん、と風鈴みたいに綺麗な声だった。

こちらに背を向けていた智幸だったが、顔だけ振り返った。

嘲笑ではない、その表情。包容力のありそうなつぶらな瞳で、俺の作業着を受け入れるように見つめている。

「むしろ笑われてるのは、私だと思ってたよ」

智幸の声量は大きくないのに、なぜだか俺の胸にやたらと響いた。

「……普通じゃないから」

智幸の声の波紋広がって、混じって、溶けて、同調して。俺の内側にあった音叉が揺れた。智幸が鳴らした音叉の一つに共振するように。

「私も、普通じゃないから」

――同じだ。

俺と同じ。そんな思いが胸中を過ぎった。

でも、困惑もした。

だってありえない。海とも、真季とも、ほかの二部の連中とも一度だって根っこの部分で同じだと思ったことがないのに、それが一部からやってきた智幸とどうして同じだと思う。

たった一言だぞ。

なのに、どうしてこうも智幸の言葉が胸に残る。

どうして俺の内面に足を踏み入れることができる。

「私は君を、笑わないから」

そう言い残し彼女が屋上から去ったあとも、俺はしばらくぼうっと立ち尽くして彼女の言葉を噛み締めていた。

ざあざあ俺の顔に降っていた雨粒が消えた。雨が降り止んだというわけではない。

頭上に傘が差してあった。

それはなんだか、濡れないようにと智幸が傘を差してくれたみたいだった。

chapter.2

下手を打った。間違いなく。

これから一年間同じゼミで過ごさなくちゃいけない相手に、俺はとんでもない失言をぶちまけた。赤っ恥もいいところで、頭を壁に打ちつけて失言部分の記憶だけを消せるなら間違いなくそうしていた。

果たして、智幸との一連の出来事を他人が聞いたらどう思うだろうか。

「ぷははははっ、あははははははははっ！」

結果、海は腹を抱えて笑っていた。大学の通路に爆笑が響いてほかの学生が何事かと訝しんでいた。

「おいっ、笑いすぎだぞ」

「いや、ごめん、馬鹿にしてるとかじゃないんだ。だって、説教しようと思ったら告白してたなんて聞いたのはじめてで、ぷっ、あはははっ！」

「こ、告白じゃない！ 告白みたいなニュアンスのセリフだ！」

「大差ないよそんなの。君島さんに可愛って言うただけならともかく、一目惚れしたって言ったんでしょ。一目惚れって、あはっ、やばっ、お腹痛い、ひいー」

「だから笑いすぎだぞ！」

「あはははっ、ごめんごめん。あ、やめて小突かないで、あははっ」

腹が立って海の横腹に肘鉄をくらわした。この野郎、他人事だからって愉快そうに笑いやがって。

智幸との一件から、ちょうど一週間経った。

あの日から今日まで俺は授業もバイトも手がかず、屋上でのトンデモ発言を思い出しては顔を真っ赤にして「うわああああ！」「うぎゃあああああ！」とのたうちまわる毎日を送っていた。

このままひとりでため込んでいると気が滅入りそうで、ゼミが始まる前に海を捉まえて相談に乗ってもらおうと思ったのだ。

「ごめんごめん。もう笑わないから」

「本当か、本当だな。いまから俺が話すこと一言一句笑わうなよ。絶対に笑うなよ。フリじゃないぞ」

「わかったわかった。それじゃあ襟を正して改めて聞くよ。僕に相談ってなにかな？」

「それは、その……」

いざ正面から聞かれると歯切れが悪くなる。

「なんつーかな……。俺、あんなこと言っちゃって、その、だからつまり、相手からしたらどう思われてんのか気になって」

想像がまるで及ばなかった。

あんなことを口にしたの、はじめての経験だったんだ。

もちろんだれかを好きになったことはある。けれどそれはガキの頃の話だ。歳を重ねるにつれて「学業」と「仕事」に比重が傾いた。手持ちの空きスロットはそれらですべて埋まり、「恋愛」が入る枠はなかった。大事なのは卒業までの単位と毎月どれくらい金が入るかということで頭はいっぱいだった。だから異性の見えない気持ちを推察するとか、そういった能力は欠落している。

端的に言えば、疎いのだ。

「僕はその場にいたわけじゃないから、僕の意見なんてあまり参考にならないと思うけど」

「それでもいい。海の見解を聞かせてくれ」

「そうだね。僕が女の子だったら、限りなく――」

「限りなく？」

「意識はするよね。だって一目惚れしたって言われたんだから」

くらっと目眩がした。

「俺、なんてこと言っちゃったんだよ……。バカだ、大バカだ」

ゼミの教室が近くなっていると思うと足取りが重かった。一步進むたびに心臓が痛くなる。

あの屋上の出来事から今日まで一度も智幸とは会ってない。奇跡的に履修している授業がどれもかぶらなかつたのだ。けれど今日のゼミだけは避けられない。これから俺は一週間ぶりに智幸と顔を突き合わせることになる。

「海、頼みがある。企画書を渡すからみんなに発表してきてくれ。俺は帰る。じゃあな」

逃げようとしたら海にがちり腕をホールドされた。「授業をサボるのは感心できないね」

「ど、どんな顔をして君島に会えばいいかわからねえんだよ！」

「笑えばいいと思うよ」

「やかましい！」

火がついたように顔が熱い。まだ智幸に会っていないのに、自分でも頬が赤くなっているのがわかる。ドクドクと心拍数が上がって、心臓が必要以上に血液を送り出して循環を早めている。本人を目の前にしたらどうすんだよ、これ。

「あの日の屋上のこと、君島にネタにされて馬鹿にされたらしばらく立ち直れねえぞこんちくしょう！」

「なに少女漫画のヒロインみたいに恥ずかしがってるのさ。ほら、さっさと行くよ」

「だって、だってさ！ 俺と会った君島がどんな反応するかわかんねえじゃん。いや、たぶん馬鹿にする。君島はいじわるな魔女みたいにキヒヒって口角つり上げて馬鹿にしてくるに違いねえ」

「相変わらず卑屈だなあ、九は。けどそうだね、君島さんが九を見てどんな反応するのか、気にはなるね。パターンとしてはいくつもありそうだけど……」

「どんなパターンだ？」

例えば、と海はまず右手の人差し指を立てた。

「考えられそうなケースその一は――断るんじゃないかな。告白してくれてありがとう、でも、その気持ちには応えられません、ごめんなさい。みたいな感じで」

「帰る！　いますぐ帰る！」

「待った待った！　まだ話は終わりじゃないから。ちゃんと最後まで聞いて」

暴れ馬みたいにじたばたする俺を落ち着かせ、海は次に中指を立てた。

「別の考え方としては――君島さんは屋上でのことを大して意識してなかったり、とかね。さっき僕は意識するって言ったけど、君島さんの場合は違うかもしれない。案外、何事もなかったように普段通りにしているかもしれないよ。九が告白だと思っていないように、ひょっとしたら君島さんもさほど気にしていない」

気にしてない、というのはあるのだろうか。

屋上での映像は俺のフィルムに刻まれて一週間経ったいまでも克明に思い出せる。君島の場合だって鮮烈に記憶しているんじゃないだろうか。時間とともに薄れて行って、やがてなかったことになって、俺を前にしても普段通りでいるなんてあるのだろうか。

「それで最後のケース、僕が女の子ならきっとこう思うんだけど――」

海は微笑んで三本目に薬指を立てた。

「――純粹に、嬉しい」

「嬉しい？」

予想外の答えに思わず俺は聞き直した。

「だってそうじゃない？　付き合うかどうかはとにかく、一目惚れしたってことは自分のことを気に入ってくれたわけでしょ。女の子として見てくれて、自分のどこかに惹かれてくれた。それって悪い気にならないでしょ。僕が女の子なら嬉しいよ」

海は立てていた三つの指を下ろして結論を下した。

「けど、いま挙げたケースはあくまで僕の想像。君島さんはそうじゃないかもしれない。別の考え方を持ってるかもしれない。だから結果として僕が言えることは、わからないってこと」

「なんだよそれ。俺と変わらないじゃないか」

「そうだよ。僕だってたかだか二十年しか生きてないガキなんだよ。恋愛完璧に理解しましたなんて顔できないよ。わからないから、わかりたくて、相手を知ろうとするもんなんじゃないかな。不思議だね。相手の目も、耳も、口も、体は見ることができるのに、心だけ見えないなんてさ。僕は有神論者ってわけじゃないけどさ、もし神様が人間を造ったっていうならどうしてこんな複雑にしたのか、九は考えたことある？」

「さあな。俺が考えたことあるのは、神様はどうして時給をもっと上げてくれないかってことぐらいだ」

「僕はこう思うんだ。――大切なものは目に見えない、からだって」

「『星の王子様』だったな。大切なものは目に見えないってのは」

「正解。へえ、ちょっと驚いたよ。九がサン＝テグジュペリを知っていたとは」

「ありゃ有名な話だ。ガキの頃にだれでも読むだろ」

覚えていたなんて立派なものじゃない。小学生の頃、国語の授業で『星の王子様』の一節を暗記させられて頭の中に染みついているだけだ。

「『星の王子様』の言葉を借りて考えると、心は大事なものだからあえて神様は見えないよう

に造ったんじゃないかな」

「……見えない」

心。精神。目に見えない世界。手に取ることも視認することもできないくせに、辞書を開けば気刻まれている文字列。ないのに、ある。そう、あるのだ。以前俺は、そういった世界を観たことがある。

「さて、心の話になったところで、僕が気になるのは九の気持ちだよな」

「俺？」

「君島さんの気持ちも大事だけどさ、それ以上に九はどうなの？ 君島さんのことどう思っているの？」

「俺は――」

どう思ってるんだ、俺？

「……………」

あれ、と顔を傾げる。

自分でもよくわからなかった。

「……さあな」

どうと言われても困ってしまう。まだ出会って間もないやつのことなんて、考えたところ出る答えなんて、曖昧で、グレーで、霞がかかったようにあやふやなものにしかならない。

ただ、胸の奥の核の部分に、ひとつだけはっきりしている感情があった。

あいつが俺と同じだと共振した理由。

あいつが普通じゃないと言ったわけ。

それは気になる。

「着いたね、教室」

気づけばゼミ教室前まで来ていた。目の前のドアを開ければ、おそらく智幸がいる。

一度深呼吸して、入室前に自分の身なりを確認する。白いシャツの上にはネイビーのショールカーディガン。下はベージュのカーゴパンツ。靴は黒のブーツ。

……普通の大学生っぽい、よな。

だいじょうぶ、と自分に言い聞かせて心拍数を落ち着かせる。ゆっくりドアを開ける。教室に入っただけの班の連中と挨拶を交わしつつ、意識は別のところを彷徨っていた。

――いた。

智幸の亜麻色のショートは際立っていた。前のほうの席に座っていて、すでに到着している真季とセットだった。真季は相変わらず大げさに身振り手振りしながらテレビドラマの話をしているみたいで、一方で智幸は頬杖をついて興味なさげだった。

「お、海ちゃんと九ちゃん見つけ！ こっちこっち！ バッチこーい！ ピッチャービビってるう、HEYHEYHEY！」

最初に俺たちに気づいたのは真季だった。挨拶というよりどこぞの少年野球の応援で、オーバーアクション気味に腕をぐるぐる回している。

そして――智幸がこちらに振り向いた。

ダックスフンドのような彼女の瞳に俺が映る。緊張が走って自分の顔面の筋肉が強張ったのがわかった。

「あ——」

声を漏らしたのは俺だ。

智幸を前にした瞬間、のどにあった息が凍りつく。

頭の中が空っぽになった。しまった。なんて言えばいいかわからない。いまさら第一声を決めていなかったことを悔やむ。のどがカラカラに渴きはじめた。声を出した瞬間なにを言っても嘔んでしまいそうだ。

ちくしょうなにやってんだと俺が焦りに唇を震わせていると——

「なんだ、今日はヤマト男子じゃないんだ」

一週間ぶりに聞いた智幸の第一声は、流暢さすら感じさせるほどの生意気な口ぶりだった。

……あれ、いつも通りだ、こいつ。

相変わらず小憎たらしい微笑は、気がかりだった。

屋上でのことがあったのに、平然としている？

海が言っていたように大して気にしていないのか？ 俺が変に意識しすぎなだけ？

目の前の智幸は本当に屋上で会った君島智幸なのだろうか、そんな馬鹿げた疑問すら浮かぶ。

彼女は記憶を失くしたのかってぐらいに落ち着いている。さすがに一週間前の出来事を忘れることなんてない、よな……。

あまりに智幸の態度が平然としていて、なんだか木の棒みたい硬直している自分が馬鹿馬鹿しく思えてきた。

「これが俺の普段通りの服装だ」

声が、出る。

自然と口から流れる。

「次はいつヤマト男子になるのかな」

「学校じゃもう着ないからな。ヤマトの制服姿で君島の前に現れることは金輪際ない」

「そうとも言えないんじゃないかな。だって私のところに荷物運ぶこともあるかもしれないでしょ。私が住んでいるところ大学の近くだよ」

「大学付近は俺の配達区域じゃねえよ」

智幸は表情も喋り方も力みはなく、まるで一週間前の夜なんてなかったみたいな接し方だ。

——私も、普通じゃないよ。

じゃあ、あれはなんだったんだろう？

冷たい雨に打たれる俺に傘を差してくれたのも、なかったことになるのだろうか。

二回目のゼミがはじまった。

前回と同じように俺たち四人は座席にまとまって話し合いをはじめた。

「みんな、約束通り企画は考えてきたな。今日はそれぞれ発表してもらうから」

話すべきテーマはPR映像の企画について。メンバーそれぞれ考えた企画を発表して、どの企画を採用するか話し合う。形式的にはプレゼンテーションに近い。

「ずるずる遅れると撮影と編集にしわ寄せがくるから今日で企画を決定するぞ。さて、だれから発表する？」

「はいはい！ あたし！ あたしから発表しちゃうよ！」

真季が元気よくイスから立ち上がってみんなに企画書を配る。こほん、とわざとらしく咳払いして切り出した。

「それでは皆々方、ワタクシが用意したレジュメをご覧ください」

俺は渡された企画書にざっと目を通す。

企画タイトルは『東星大学コレクション』。

概要は、東星大学に通っている女の子を被写体に、ひとりひとりポーズさせてフルショットで撮影していく。ひとり一秒ほどのカットで計六十人分。パティ・オースティンの『Kiss』をBGMに東星大学に在学中の女子大生を紹介する。

眉をひそめた。この企画は――

「アド街の人気コーナーのパクリじゃねえか！」

「てへ、バレた！」

ペロッと舌を出してごまかすな。

「パクリっていうか正確にはオマージュ？ たいていの人知っているコーナーならとっつきやすいと思ってそうしたんさ。それにまるっきりパクリってわけじゃないよ。ちゃんと観てくれる人の心を掴もうとサービス要素も入れる予定なのだ。というわけでトモチん、水着で出演よろしく」

「はあ！？」

水着という単語を過剰に意識したのか、智幸はびくんと体を跳ね上がらせてかあっと顔を朱に染めた。

「ば、バカじゃないかなっ！ 私が水着なんてなに考えてるの！」

「一秒のカットで次から次へと移り変わる女の子たち。その一瞬のカットで突如現れた水着美女。『うお、なんか可愛い子いたけどすぐ流れた！ また見たい！』と、鼻息を荒くした男子どもは何度も映像を見直す。あたしが仕組んだサブリミナル効果によって潜在意識の境界領域を刺激された男子どもはその美少女を探しに大学に入学してくるパーペキな展開。はいPR成功。はいあたし天才。この戦、勝ち申したぞ！」

「可愛い子、美少女……」一瞬、油断したようにまばたきする智幸だったがすぐ首を振る。「意味わかんないよ！ み、水着なんて無理！ ぜったいに無理だから！」

「おおっ、普段素っ気ないトモチんが思いのほか動揺してる！ だいじょーぶ、あたしがおすすめの水着を選んでやっやるけんね！ フヒヒ」

真季は下卑た笑みを浮かべ、指を触手みたいにうごめかせて迫るが、智幸はノートを丸めて武装してコントみたいに切り払っていた。

「バッカじゃないかな！ 大学の公式サイトに載っける映像だよ。水着なんてNGに決まってるんだ。そもそも発想が水着っていつの時代の深夜番組だよ。一週間あったんだからもっとマシな企画考えられなかったの！」

「あたしだって考えるには考えたんさ。けどさー」

真季はふてくされた顔でリュックから企画書を取り出した。俺も智幸もどうせ考えたといっても一、二種類だろうと高をくくっていた。だから、どんっ、とテーブルの上に置かれた分厚い企画書の束を見てぎょっと目を丸めた。

「ざっと百ぐらい企画考えたんだけど、どうもぱっとしないんだよねー」

「ちゃんと真面目に考えてんじゃねーか！ そっち出せよ！」

「えー、なんかなー。だってほかに思いついた企画、『場所』ばかりで『人』じゃないんだもん。前の話し合いでも『場所』ばかり取り上げられてたじゃん。でも考えてみたら、『人』の映像のほうが面白いのかなーって」

「その考え方は嫌いじゃないが、ほかの企画書を俺たちに見せてもいいだろ。真季にはいまいちでも、俺たちにはアリかもしれないだろ」

「うーん、やっぱダメ。ボツだよこれ。自分が面白くないと思ったものが他人の心を動かせるわけないよ。というわけでトモチンGO！」

真季にしては妙に説得力があるセリフだが、無茶振りされた智幸はたまったものじゃないだろう。いまだ真季の触手をノートの剣でポカポカ叩き落している。

「却下だよ！ 却下！ なんで私に水着着させようとするのかな。もうっ」

「トモチンは反対だけど、おやおやー、男子陣はまだ反対してないぞー。ふふふ、やっぱり水着の誘惑には迷っているみたいだなー。テンプテーション！」

キッと音が出そうなほど目尻をつり上げる智幸は、なぜか海はスルーして俺だけを睨みつけた。

「最低だ、君」

「おい、どうして俺だけ目の敵にされなくちゃいけないんだよ。海だって反対してないだろうが」

まあ確かに、真季の言う通り強くは否定してないけど。

その後も智幸の強い反対にあり、俺も智幸にずっと睨まれるのが嫌で反対票に一票入れざるを得ず、企画はボツとなった。するとノートの剣が真季の脳天を直撃させ、「ぐはっ、やられた！

オノーレ！」と企画ともども倒れた。

「じゃあ、次は僕が発表しようかな」いつのまにかひとり優雅に自家製コーヒーを飲んでいた海が立ち上がり、用意していた企画書をみんなに回す。

「タイトルは……『大学がある街、白山の紹介』？ おい、海。大学のPR映像だぞ、街を紹介してどうする」

「あえて発想を変えてみたんだ。前回の話し合いで大学の施設ばかり意識がいきがちだったから、逆に大学付近をピックアップしてみようかなって」

「それで特集するところは……ネパールコーヒーが飲めるお店『カトマンズ・カフェ』。栽培地

域はヒマラヤ山系でハイランドが主流、有機栽培をウリにしたコーヒー豆の魅力を余すことなく紹介、店主であるヤーダブさんにインタビュー……っておい！ これ海が手伝っているカフェだろ！」

「ステルスマーケティングをしかけようと思っていたんだけど、さすが九だね。見抜かれちゃったか」

「いまやるべきこと大学のPRな！ 店のPRしてどうすんだよ！ 却下だ！」

「残念だよ。すごく残念だ……。じゃあ君島さん、いま君のためにコーヒーを淹れるからぜひ飲んでほしい。こないだ飲ませてあげられなかったから今回こそはっ」

「君島にPRすんな！ まったく、真季にしても海にしても好き勝手やりやがって。サブリミナル効果もステルスマーケティングもいらねえんだよ。次だ、次。君島、みんなに企画を発表してくれ」

「わかったよ。二人よりずっとまともだから安心して」

そんな彼女から手渡された企画書は――『東星大学のマスコットキャラ `オットーセイくん、について』。

世間的なゆるキャラブームの影響を受けてか、東星大学も数年前からマスコットを作ったらしい。それがオットーセイくん。

オットセイをデフォルメした二頭身キャラクターで額には `東星、の文字が刻まれ（キン肉マンかよ）、仙人みたいなヒゲがはえている。おまけにオットセイのくせにふかふかな体毛でキャラ崩壊っぷりも半端なく、正直デザインはどうかと思う。

「うちのゆるキャラを題材に持ってきたのはいいね！ この発想はなかったぜトモチん」好感触の真季に海も首肯して、「僕も悪くないと思う。ゆるキャラならだれが見てもとっつきやすいし、ウケるかもね。でもどうして君島さんはうちの大学のマスコットに目をつけたのかな？」

特に深い意図がない、好奇心からくる何気ない質問だったと思う。それでも智幸はなぜだか照れくさそうに指で前髪をいじっていた。

「前から気になってたんだ、オットーセイくん。……その、可愛いから、さ」

ほう、と俺は納得すると、智幸はなぜだかむっとした。

「三浦くん、いまちょっと笑ってなかった？」

「え？ 別に笑ってないけど」

「こんな私が可愛いとか言うのは変だって心の声が聞こえたよ。ひどい、最低だね、君」

「だから笑ってねえって。さっきからお前妙に因縁つけてくん。ただマスコットキャラに目をつけるってのは、女っぽい発想だなと思っただけだ」

「……ホント？」

「ホント。けど、俺はあのキャラがまったく可愛いとは思わん」

「君、あの愛くるしさがわからないの!？」

バンッと両手を叩いて抗議してくる智幸。うおっ、と俺は驚いてイスごと後ろに倒れそうになった。

「あのもふもふなボディ、くるくるなおひげ、クリクリな瞳を見て君はきゅんきゅんしないの！

？ もふもふでくるくるでクリクリなんだ！　なのに可愛くないって、信じられないよ君！」

熱弁をふるう智幸に賛同したのは真季だった。「わかる！　わかるよトモチん！　あたし、大学生協に売ってるオットーセイくんボールペン買ったもん」

さっきまでいがみあっていた二人がいきなり意気投合しはじめる。

女子心をくすぐる魅力があのかのキャラクターにはあるのか。男の俺にはオットセイまがいのバケモノにしか見えないのだが。

企画書を読み返す。

映像の構成はオットーセイくんの紹介を中心に、なぜオットーセイくんは生まれたのか、オットーセイくんに入れられたデザイナーの願い、オットーセイくんの活動、その三点。

押さえるべきポイントは押さえている。構成はいいだろう。ポイントを三つにまとめてくれればわかりやすいし、上映時間的にも悪くない。

だが、この企画には致命的な問題があった。

「君島、これは映像にできない」

俺はハッキリ首を横に振った。

「実はな、オットーセイくんを紹介する映像ってすでに存在してるんだよ。かぶってるんだ」

え、と智幸は目を瞬かせた。

「大学側がすでに制作してるんだ。大学の公式サイトにはアップされてないからお前も気づかなかったんだろうけど、オープンキャンパスで直接公開するんだよ。去年、俺がオープンキャンパスに来たとき映像観たから間違いない。しかも企画の内容とほぼ同じ。キャラクターを紹介する映像なんて個性は出にくいからな。もし俺たちがオットーセイくんのPR映像を公開したら、大学側と俺たちの紹介映像まるかぶりだ。さして代わり映えのない二つの映像を観客に観せることになるのは避けたいな」

「それは、そうだね……」智幸は明らかにしょげた声を出していた。「残念。せっかくオットーセイくんの映像作れると思ったのに。ボツかあ……」

気の毒だが、こればかりは安易に賛成できない。

これで、企画を出した三人中三人ともボツか。

「マズイね。今日中に決めないといけないのにな」海は大根役者みたいに棒読みだった。「それじゃあ、最後の九の企画に賭けようか」

やや前傾姿勢になってテーブルの上で手を組み、うっすらと微笑んでいる。こいつ、はじめから俺の企画目当てだったな。

「賭けられても困る」

企画に自信があるなら最初に発表している。

真季ほどではないが、俺もこの一週間思いつく限りの企画を考えた。数ある中から厳選して、ひとつの企画を選んだ——というより、この企画以外やりたくなかったのだろう。思いついたときからほかの企画案はすべてくすんで見えた。そういう点で俺は真季と一緒に生まれた。

でもそれは裏を返せば自己満足的な部分が強い。だからそこまで自信があるというわけでは

ない。

かすかな不安を抱えながら俺は企画書を真季と海に配って、智幸と向き合った。

——私も、普通じゃないから。

あの屋上で智幸は土砂降りの俺に傘を差してくれた。けど、それだけだ。

どう普通じゃないというのだ？

あいつは胸の奥になにを持っている？

「なに、かな？ 私をじっと見て」

「いや、なんでもない。これ、読んでくれ」

俺は智幸に企画書を手渡した。

タイトルは『夜に学ぶメディア学科の学生たち』。

内容としては、二部メディア学科堺ゼミに通う学生たちをひとりずつ映して、自己PRしてもらう。PR内容はそこまで厳格なルールがあるわけじゃない。メディア学科で学んでいる理由、メディア学科のお気に入り授業、将来の夢など、要するに自分たちを撮るのだ。

「へえ、意外だね。九から自分たちをウリにした企画を持ちこんでくるなんて」企画を読み終えた海がなぜか嬉しげに口元を緩める。「九はあまり自分のことを好きに思えてなかったからさ」

「PR映像ってことを意識したら、そういう発想になったんだよ。観てくれる人はうちの学部にどんな人がいるのか大半が知らないだろうと思ってさ。だったら、俺たちを撮ってみればいいんじゃないのって思ったんだ」

半分は本心。

残り半分はごまかした。

まぶたの裏には、屋上で夜の闇を背負った彼女が焼きついている。

たぶん、アイデアの根源は知りたいと思ったのだ。あいつをフィルムに刻んで。

「いいじゃん！ あたしは好きだよこの企画！ 大学の『場所』じゃなくて、『人』に着目したところがあたしと同じだ」真季が賛同してくれると、海は目を通しながら企画内容を口にした。

「ひとり辺り二十秒ほどのカットを作って、カットとカットを繋げてテンポのいい映像を作る。出演者の予定は堺ゼミの学生たち、ね」

「まだ出演交渉してないんだよね？ みんな出演してくれるの、これ？」

「きっと出演してくれるだろうね」

智幸の疑問に、微笑んで返したのは海だ。

「みんなの都合もあるし全員参加してくれるかわからないけど、映像にできるぐらいには出演してくれるよ」

「どうしてそう言い切れるのかな？」

「みんな九に借りがあるからだよ。去年ノート貸してもらったり、病院に付き添ってもらったり、引っ越しの荷物運びを手伝ってあげたり。君島さんも二部に来たとき案内してもらったでしょ。文句言うけどなんだかんだで面倒見がいいんだよ、九は。そういうわけだからゼミ長を任されているわけだし。みんなに作った借りに付け込んで頼めば問題ないよ」

「人聞きが悪いことを言うな。いままでのことはゼミ長だからやっただけだ」

「僕を助けてくれたむちゃくちゃさもそれで説明できるかな？」

智幸が小首を傾げてる。海のやつ、智幸の前で余計なことを……。

俺自身、海のように考えているわけではなかった。ノリのいい連中が多いので、ぼんやりと参加してくれるだろうって程度の意識だ。

「九ちゃん九ちゃん、質問質問」

真季が挙手した。

「出演者は堺ゼミってことは、あたしたち撮影班も出演するの？」

「そうだ。俺はカメラマンやるから映らないけど、真季、海、そして君島はちゃんと撮るよ。だからお前たちはカメラになに話すか考えておいてくれ」

「了解したであります、隊長！」と真季がおどけたように敬礼して、「ねえ海ちゃん、なに話せばいいかな？ もうここはいつそあたしが水着着ちゃう？ あたしの水着で再生回数バリバリ稼いじゃう」「真季の水着動画なら僕が一日千回は再生カウンター回すかな。あ、でも水着は僕だけに見せてほしいな」「そういう素直なところ、イエスだね海ちゃん！」なんてバカ話で盛り上がっていた。

二人は撮影に乗り気だった。二人は。

「――え。映りたくないよ、私」

だから、あっさり智幸に反対されて少し虚をつかれた。

「え……えっ!？」

目論みが簡単にかわされて、自分でもびっくりするほど驚き声を上げていた。

「なにそんなに驚いているのかな、君」

「いや、ちょっと待て。待ってくれよ。君島が映らないとそれは……」

焦った。俺にとっての企画の中心がこのままじゃぼっかり空きそうで、焦燥感がじりじりと足元から這い上がってくる。

「どうして嫌なんだよ君島？」

「フツー嫌でしょ、カメラなんて。恥ずかしくて映りたくないよ」

「で、でもさっ」

「ていうか、別に私ひとり映らなくても問題ないんじゃないかな。堺ゼミの人たち出演者してくれるんでしょ。笹野さんと青山くんも出演するし、尺的には十分足りるはずだ」

「それは」

正しい論のように聞こえた。堺ゼミの受講生は十二人。俺と智幸を除いて全員参加してくれるなら十人。十分に映像に仕上げられる人数だ。

「け、けど、もし病欠や特別な事情で出られない出演者がいた場合困るだろ。予備として撮っておいても……」

「へえー、予備なんだ。撮影班の映像は」

「い、いやっ、別に軽く見ているとかじゃなくてだな」

「私にこだわる理由はないでしょ。ちゃんとした理由がないなら出演なんてしなくていいはずだよ」

智幸がガチガチに固める理論武装に、どうにも俺は反論を組み立てて崩すことができない。どうする。どう説得すればいい。

「それとも君にはあるのかな、私を撮らなくちゃいけない理由？」

値踏みするような智幸の視線。水晶のような透明な瞳がこちらに向いて、内面を見透かされそうな気分になった。だからごまかした。ありきたりな言葉で取り繕った。

「それは、みんな撮る予定なんだから君島も参加するもんだと」

言って、すぐに後悔した。

口から出たのは中身のない空っぽな言葉で自分でも嫌気が差した。

フォローしようと言葉を継ぎ足そうとして、神に見放されたように授業終了のチャイムが鳴った。

「企画は私もこれでいいと思うよ」智幸は俺の企画書をファイルケースにしまって席から立ち上がる。「でも、私は撮影に従事するよ」

綺麗な亜麻色のショートを手で弾いてスタスタと教室から去っていく智幸。俺はその背中を見送ることしかできなかった。

「あーあ、フラれちゃった。バカだねー、九ちゃんは」

バーカ、バーカ、と真季が俺の脇腹を小突いた。

割と、堪えた。

ゼミが終わって俺たちの班は教室で解散した。

思い返せば、智幸は屋上での一件を一言も話さなかった。あの日を思わせるセリフすら微塵もなかった。ゼロ。本当になにもなかったみたいだ。

だから俺もなにも言わなかったし、言えなかった。

というか、あんな別れ方をしたらなんて声をかければいいのかわからない。

「なにやってんだ、俺……」

カメラを通して智幸をフィルムの一コマに焼きつければ、なにかが見えてくるかもしれないと期待した企画書。けれど当てが外れちまった。

「腹、減ったな……」

落ち込んでも腹の虫はぐうぐう鳴るので、俺は食堂に向けてひとりとぼとぼと大学の通路を歩いていた。その途中に掲示板があって、授業変更や大学行事の案内などの張り紙がピンで留められていた。

「あ——」

思わず、足が止まった。

ずらりと並ぶ張り紙のなかで、ある張り紙がやけに目に留まったのだ。

社会学部 転部転科説明会

説明会の時期は六月下旬。転部転科を希望する生徒は必ず出席すること。出席できない場合、特別な事情でない限り、転部転科の希望は受け付けない——そんな内容が書かれている。

転部転科する学生はちらほらいる。学生生活を過ごしていく上で研究したいテーマが変わって学科を変更したい。経済的な事情で一部の授業料が払えないから二部に転部する。理由は様々だ

。

実際に智幸も一部から二部に転部してきた。

無論、二部から一部に転部も可能だ。

「……………」

——普通じゃないよね。

なぜだかそんな呪いがかったようなセリフが脳裏に蘇った。

「……知ってんよ」

張り紙の内容を頭の片隅に置いて、俺はその場を離れた。

食堂に足を運んだのは実は一週間ぶりだった。阿藤と一悶着を起こして以来だ。

苦々しい記憶こそあったものの、洋食屋の前を通るとトマトソースの甘さと酸味がほどよく混じった匂いが鼻腔をくすぐって忘れさせてくれた。いまさらどうでもいいことだ。仮に鉢合わせしても無視すればいい。

俺は食券を買って洋食屋の店員に渡した。店員がトレイの上に乗せたのは、アイスティー、サラダ、パンナコッタ、そしてめんたい生クリームと完熟トマトのハーフ&ハーフ大盛り。茹でたての湯気立つパスタにふんだんにかけてられたソースを見ると、パブロフの犬よろしく口の中は唾液で濡れそうだった。

トレイを運びながらどこに座ろうか席を探し歩いていると声をかけられた。

「――あ、三浦くん」

まさかの聞き慣れた声に仰天した。危うくトレイから食器を落としそうになった。

声がしたほうを見ると、智幸はナンカレーを食べていた。

「うわっ、君島!？」

「うわって、なにその反応……。女の子を前にうわっ、はないよ、フツー。なんだか化物見たかのような狼狽っぷりだ。ひどいね、君」

智幸のジト目が突き刺さってやけに痛い。

「あ、いや、違う! そうじゃなくて、いきなりでちょっと驚いただけだ」

「ふーん」

まさか食堂で智幸と出くわすとは。

どうしよう。気持ち的にはひとりで飯を食う予定だったけど、このまま「じゃあまた今度」と去っていくのは同じゼミの仲間なのにおかしいだろう。かといって馴れ馴れしく同席していいものだろうか。さっきのゼミでの気まずさも多少ある。「一緒に飯を食おうぜ」なんてキャラでもないしな、俺。

どっちつかずの感情のままトレイを持って逡巡していると、智幸が小首を傾げた。

「どうしたの? 立ってないでそこ座ったら」

「あ……ああ。じゃあ」

俺はトレイをテーブルの上に置いて、智幸の対面に腰を下ろした。どこかぎこちない俺とは対照的に、智幸の顔つきは平然としていた。こいつ、本当に屋上の記憶を失くしてるわけじゃないよな?

テーブルを挟んで向かい合う俺と智幸。距離感はゼミのときと変わらないが、いまは二人きり。

――普通じゃないって、どういうこと?

そう、問いたただすチャンスだった。

「……………」

無理だ。そう簡単に聞けたら苦労しない。

仮にいま勇気を振り絞って聞いたとしても、智幸はちゃんと答えてはくれない気がする。

だって、あの屋上は間違いなく `特別な時間、だった。

夢のような。映画のような。

けれど、 `特別な時間、は中途半端に途切れた。俺の告白紛いのカットが終わって、次は智幸のカットに移るのだろうが、そこでぷつりと終わってしまった。

いつカットの続きがあるかわからない。下手したら未完の自主制作映画みたいにもう二度と訪

れないかもしれない。でも、もし続きがあるなら、その特別な時間、で智幸はちゃんと答えてくれる気がした。

「そこのパンナコッタ、おいしいんだよね」

会話の切り出しは智幸からだ。俺のトレイに乗った乳白色のパンナコッタを羨ましげに見つめている。

「パスタも美味しいけど、セットでついてくるパンナコッタがほっぺ落ちちゃうほど絶品でさ、カレーにしようかパスタにしようか最後まで迷ったよ」

何気ない、大学食堂のどこにでもありそうな普通の話。その普通がなんだか心地よくて、俺の口調も自然となめらかになった。

「二部での学生生活は慣れたか？」

「まだ、ちょっと落ち着かないかな」

智幸は桜色の唇でマンゴーラッシーのストローを咥え、ちゅるると飲んだ。

「授業が夜になったからバイトの時間増えたのはいいけど、仕事して大学通って、七限まである日は帰ったら二十二時前ぐらいでしょ。ご飯食べてお風呂入って、なんだかんだやってたら、もう寝る時間で、また起きて仕事して……なんだか目まぐるしいよ」

仕事と学業に追われて毎日忙しいのは、わかる。

去年の四月、ほかの二部生もそういう状態のやつが結構いて、五月の長期連休になると体調を崩すやつが多かった。休みが続いて張り詰めていた気が一気に抜けたのだろう。

「帰ったら夜も遅いから自炊する体力も気力もなくなっちゃって、だから食堂にはお世話になってる。君は自炊とかする？　　というかできる？」

「できるに決まってんだろ。学食は安いとはいえ、毎日頼ってばかりだと節約できないしな」

「へえー、料理する姿とか想像できないな。包丁で自分の指切って出血してるイメージは湧くけど」

「馬鹿にすんな。中学のときからやってんよ」

母親が家にいないことがほとんどだったからなーとは口にしなかった。

「そういう君島こそ、料理とかすんのかよ」

「近所のお菓子教室に通ってる」

すげえ。本格的だった。

「郊外の閑静な住宅街にある、ジブリの映画に出てきそうな個人でやっている小さな教室。ステラおばさんみたいな先生に教えてもらって、甘々で熱々でさくさくなアップルパイを焼いてる。予定だった」

「予定かよ！　全部お前の妄想かよ！」

「う、うるさいな。予定は未定でしょ。二部にきてからバイトと勉強でそんな暇はなくなっちゃったんだ」

ちえ、と智幸は不景気面でナンをむしゃむしゃ食べながら「エプロンしてお菓子作るとか、素敵だなんて思ったのにさ」とぼやいていた。

「君島ってひとり暮らしなのか？」

いつもより会話が活発な気がした。だから、ちょっと彼女の内側部分に足を伸ばした。

「そうだよ。千石駅の近く。大学から歩いて帰れるところ」

「大学から距離が近いっていいよな。歩いて帰れば定期代もかからないし」

「そう、なんだけどさ。夜にひとりで帰るのは真っ暗だからちょっと不気味。一部にいたときは、明るい時間に帰れたから」

智幸の声のトーンは若干下がっていたように聞こえたけど、一瞬ですぐに調子を取り戻して「そのうち慣れるよね」と片頬に笑みを張り付けていた。

そっか。男の俺は意識したことなかったけど、女の子が深夜ひとりで歩くのは怖いと思うよな。海も時間があるときは真季を送っていくって言ってたっけ。

でも、それならなおさら思ってしまう。

どうして智幸は二部に來たんだ？

そんな疑問を聞こうとしたそのとき、妙な賑やかさが耳に伝わってきた。食堂でよくある談笑とは違う、ちょっとした騒がしさが孕んでいた。

声ができるほうに視線を向けると撮影機材を担いだ学生の集団がいた。数にして四人。派手な金髪に染めた女子学生がリーダーなのか、中心となって仕切っていた。

俺は目を細めた。あのカメラ、メディア実習室にある業務用ビデオカメラだ。テレビ局が撮影などで使うプロ仕様。利用許可が下りるのはメディア学科の学生だけだ。二部では見たことない顔だから……たぶん一部メディア学科の学生たちだろうな。

何年生だろうか？ もし俺たちと同学年なら、この時期の撮影は堺ゼミぐらいなものだと思うけど。そういえば教授が一部の学生たちが食堂のPR映像を制作すると言っていたっけ。もしかしたらその人たちか。もう撮影に入ってるのか？ だとしたら一部は早いな。

三脚を立て、カメラをセットして、時折笑い声が響いて。わいわいと明るい雰囲気ですべて準備をしている彼ら彼女らの姿がキラキラして眩しく映った。

太陽が上っている時間に授業を受けて、授業後にはゼミの活動を楽しんで、きっとサークルとかにも所属してて――なんてことはない。よくある、青い春に包まれた普通の大学生像だ。

――普通。

……楽しそうだ。

俺がぼんやりと遠目で眺めていると金髪の女子学生がこちらに振り向いた。撮影の輪から抜け出して、カツ、カツ、とヒールの踵を鳴らしながらこっちに向かって歩いてくる。

「あの一、ちょっと頼みがあるんですけどお」

「え、俺ですか？」

ちょっとびっくりした。まさか声をかけられるとは思ってなかった。

「二年のメディア学科に所属してる鈴木果歩って者ですけど一、果歩たちはPR映像撮らなくちゃいけなくて食堂を撮るんですよー」

「はあ」

鈴木果歩と名乗った金髪はどこかほわほわした口調で、おとぎの国からやって来たような不思議さがあった。服装は白のキャミソールにミニスカートと露出度が高い服装で、スカートから伸

びた脚線美がスタイルの良さを物語っていた。一言で言えばかなりの美人。ただ、一人称が自分の名前ってのはいかにも自分で自分のこと可愛って思ってそうな印象があって、ちょっと敬遠した。

「それでえ、洋食屋を背景に食事ができるその席を使いたいので、ちょっと退いてもらえると――」

鈴木果歩は言いながら横を振り向いて「あ」と驚いたように細い眉をぴくんとつり上げた。

「智幸……？ 智幸じゃん！」

一瞬で俺の存在が鈴木果歩の眼中から消える。「わあっ、智幸ー！」と甲高い声を上げながらウサギみたいにぴよぴよ跳ねて智幸のほうに近づいた。

「久しぶり！ ホント久しぶりだあ！ やーまさかこんなところで会えるなんて思ってなかったあー！ 最近見ないと思ったら夜に転部したって噂で聞いたけど本当？ こんな遅くにご飯食べてるってことはそうなんだよね。元気してた？ ねえ元気してた？」

鈴木果歩の表情は明るく、旧友に接しているような態度だった。

なんだ友達か。そう思って智幸のほうを見た瞬間、違和感を覚えた。

智幸の顔面が冷凍庫に放りこまれたみたいに凍りついている。無表情で、唇がきゅっと一文字に結ばれている。

「……久しぶり」

絞り出すように、智幸が挨拶する。しかし覇気がまるでない。瞳が揺らいでいる。

智幸？ どうしたんだ？

「二人はどういう関係？」

置いてきぼりが嫌で俺が二人の関係を聞くと、答えたのは鈴木果歩だった。

「あ、果歩たちのことですかあ？ 果歩はね、智幸と昨年度一緒のゼミだったんですよー」

一部のときの友達。鈴木果歩の明け透けな表情に嘘をついている様子はない。ないのに、智幸はやけに身構えてどこか態度がよそよそしい。なんだか一步引いている感じだ。

「そこのあなたは智幸とどういう関係ですかあ？ 智幸と一緒にご飯食べてたけど……えっと、この場合は――」鈴木果歩はなにか確かめるように智幸のほうを一瞥して「もしかして彼氏？」

「げほっ！」

飲みかけていたアイスティーを盛大に吹き出しそうになった。

「か、かかか、彼氏とかじゃなくて！」

「あははっ、動揺しすぎですよおー。いいですいいですごまかさなくてもー」

とんでもなく誤解されている。

「俺と君島は一緒のゼミ！ 同じ堺ゼミなだけ！」

「あ、堺ゼミなんだ。果歩も堺ゼミだよおー」

同い年とわかるといきなりタメ口となった。別に文句があるわけじゃないけど、この手のタイプはどうにも会話のペースを握られて苦手だ。

「でもそっか、なるほどねー」

鈴木果歩は向い合って飯を食っている俺と智幸を見て、ニコリと微笑みかけた。

「そうであっても、私はいいと思うけどな」

「……………」

急に智幸は食べかけのナンカレーが乗ったトレイを持って「三浦くん、あっちに行こ」とそそくさと移動しようとした。まるで逃げるみたいに。

智幸のやつ、やっぱり変だ。友達が単に挨拶しているだけなのに。

過剰反応気味な態度がどうにも引っかかる。確かに鈴木果歩はちょっと変わっている子のように見えるけど……。

「ちょっと待ってよ智幸」鈴木果歩が智幸の前に回って呼び止めた。「久しぶりに会ったんだからさ、もうちょっとぐらい話そうよ」

「そっちが撮影あるから退いてくれって言ったんじゃないっけ」

「そう！ 果歩たちこれから撮影なんだあ。いまからPR映像撮るの。どんなPR映像撮ると思う？ ねえ、どんなのだと思う？」

しばらく無視していた智幸だったが、話しかけなければ逃してくれないことを悟ったのか、うんざりした様子で聞いた。

「どんなPR映像をやるの？」

よくぞ聴いてくれたと言わんばかりに鈴木果歩は目を輝かせた。

「ドラマ風の食堂紹介だよお。ただの食堂紹介じゃ面白くないから、もしも彼女と食堂に行ったら〜って感じでストーリー仕立てになってるのー。カメラに映るのはヒロインだけ。で、カメラワークを一人称視点にして、あたかも観てくれる人が主人公になってヒロインと食堂で食事している気分になれるの。うふふっ。ね、面白そうでしょ」

なるほど、とちょっと感心してしまった。

アイドルが出すビデオでその手のものがある。アイドルがひたすらカメラ目線で話しかけ、画面の視聴者とあたかもデートしているような気分させる。その手法を組んだものか。

「でもそれって男ウケしかしないんじゃないか？」

「もちろん女性向けヴァージョンも作るよ。さっき話したのと真逆で、出演は男だけって映像。でも今日はヒロインの撮影。でね、それでね、ヒロインは果歩なの！」

鈴木果歩はどこぞのファッションショーに出ているかのようにそれらしくポーズを決めて、くるりと回った。

「どう、似合うかな」

天井の照明を浴びて金に輝く鈴木果歩の長髪。キャミソールからあらわになった鎖骨は蠱惑的で、透き通るような瑞々しい脚は扇情的だった。背は高く、モデルようにすらっとした体型は様になっていた。

「撮影のためにね、美容院に行ってきたばかりなんだ。結構高かったんだよ、これ。いいでしょ？」

鈴木果歩が同意を得ようとしていたのは智幸だった。

「ちょっと大胆かなと思ったけど、果歩気に入ってるんだあ。どうかな？」

智幸は伏せ目がちだった。キラキラした眩しいものから目を背けるように。

「果歩、ヒロインしているでしょ」

それでも鈴木果歩に顔をのぞかれるように迫られる。痛切さに耐えるように、智幸は下唇をきゅっと噛み締めていた。

第三者の俺は、そんな二人の様子を黙って見つめているだけだった。

やっぱり智幸がやけにびくついているのが俺にはよくわからなかった。ただ知り合いが声をかけただけじゃないのか。

いや、智幸と鈴木果歩の関係なんてろくに知らない。そもそも、昨年度こいつがどういう気持ちで一部に通っていたかもわからない。わからないことだらけだ。

だから俺には智幸にかける言葉がなくて、やはり沈黙するしかない。

そう、思っていた。

――智幸が、上を向いていた。

一瞬。時間にして一秒、いやもしかしたら一秒にも満たないぐらいの瞬間。智幸の視線は確実に天井へと向いた。

脳裏に閃光が落ちた。

まぶたの裏にフラッシュバックした映像。気のせいかもしれないが、錯覚かもしれないが、いまの映像と一週間前の映像が重なった。陽気な鈴木果歩に迫られる智幸が、俺と阿藤との光景に酷似しているように映った。

胸がざわついた。

「そうだね、鈴木さんはヒロインっぽいよ」

智幸は、微笑んでみせた。

「似合うと思うよ」

作り笑いだった。不格好な笑みを顔面のあちこちに張り付けたような、そんな微笑。

ふいに、雨音が聞こえた。

実際にここは地下で、今日は快晴で、雨音なんて聞こえるわけがなかった。それでも、しとしと小雨が降ってきたのが見えた。智幸にだけ、雨が打ちつけていた。

ああ、やっぱり同じなんだ。

俺にだけ降ると思っていた雨は、智幸にも降っている。

「でしょでしょ！ 似合うでしょ！ ね、智幸も堺ゼミでしょ。どんなPR映像作るの？ ねえ、智幸はなにやるの？」

鈴木果歩の口調は悪意というより、単なる無邪気な振る舞いに見えた。だけど悪意以上に無邪気さが残酷なこともある。

「私の役割は、違うよ。ヒロインとかそういうのじゃないから」

なんだか申し訳なさそうに、智幸は微笑を張りつける。声がかすかに震えているように聞こえた。

いよいよ本降りになってきた。ざあざあと強い雨脚が顔面の筋肉を引きつらせて微笑む智幸を濡らしていく。明るさを装った表情とは裏腹に、寒いのか両肩がかすかに震えている。カタカタと震動がトレイまで伝わっている。下手したら落としそうだ。

「じゃあ具体的にはなにやるの？」

今日に限って智幸のやつはみずから傘を差そうとしやがらない。他人が濡れないようにはできるのに、自分は濡れないように差せないのかよ。

やっぱり智幸のことなんていまの俺にはまだわからない。

わからないけど、感じる心はあった。

「――自分たちを撮るんだよ」

声に芯を通して、俺は言った。

「俺がカメラマンでさ、夜間大学に通う二部の連中を撮るんだよ」

「二部の人たち？」

「一部の連中は知らねえと思うけど、うちの連中はどいつもこいつも癖があるやつらばっかでさ、そいつら撮ったら面白いことになるんじゃないかって思って。そういう連中を映像にしようと考えたんだ」

俺は右手で自分のトレイを持ちながら智幸のそばに近寄って、彼女が華奢な手で握っていたトレイを空いている手でひょいと持つ。智幸はちょっと驚いていたが、なにも言わず俺にまかせた。

「ホント、変なやつばっかでさ。たとえばそうだな、いつもバカみたいに笑っているバカとか、コーヒー大好きでコーヒーメーカー持参してくるやつとか、あとは……そうだな、ヤマトの作業服着ながら授業受けてる野郎とか」

ハッ、と自嘲した。歪んだ唇で笑っていたと思う。

「なんの罰ゲーム受けてんだって話だよ。ははっ、笑われても仕方がねえよ。おかしいだろ」

智幸にしか関心がなかった鈴木果歩の視線が俺に向いた。

雨が、俺にも降り始める。

自虐的になって笑われようとするなんて、自分でもバカなやり方だと呆れる。器用なやつはもっとうまい言い回しをするのだろうが、不器用な俺は智幸以上に雨を浴びて、ずぶ濡れになって注目を浴びるしか方法が思い浮かばなかった。

「ほかにもいろいろ濃いやつがいて、だからうちの映像には主役とかそういった役割はないんだ。脚本とか別がないから、どの役が一番おいしいとかじゃない」

でもさ、と俺は逆接でつなげる。

「俺は同じゼミのやつのことをほとんど知っていて、知らないのは君島ぐらいなんだよな。だからたぶん一番撮って面白いのは君島で、それは自分にとって中心で、いやきっと海や真季にとっても興味の対象で、だから――」

だから、もし、智幸を撮れるなら、それはきっと――

「ポジションに当てはめて喩えるなら、メインヒロインなんだよ、こいつ」

両手にトレイを持ったまま、俺は鈴木果歩に背中を向けた。

「じゃ、撮影の邪魔しないよう俺たち退くから。行こうぜ、君島」

智幸は惚けたような顔つきで俺の言葉が右耳から左耳に流れていた。「ほら、別の席を探すぞ」と再度言って「う、うん」ようやく気を取り直し、俺の後ろをついてきた。

一部の撮影場所から離れて、ぶらぶらとほかに空いているテーブル席を探していると智幸は俺の横に並んだ。

「だいじょうぶだよ」

「なにが？」

俺が聞くと、智幸はちょっとの間を置いて答えた。

「トレイ持てるから、だいじょうぶ。自分で持つよ」

「そうかい」

君島にトレイを返すとしっかり両手で握りしめていた。

「ねえ」

「なんだ」

「鈴木さんはね、一年のときゼミで一緒にいることが多かったひとりなんだ」

智幸はわざわざ説明してくれた。俺が内心で気にしていることが伝わったのかもしれない。

「ほわほわしてるけど、なぜか微妙に察しのいいところもあって、リーダー的で、性格が明るくて、悪い人ではないんだと思う。ただ、私がちょっと苦手なだけ」

それ以上、智幸は鈴木果歩についてなにも言わなかった。

だから俺もそれ以上は聞かなかった。

気にならないわけじゃなかった。聞きたいことはあった。

けど、もし思ってもないことを聞いて無意識に智幸を傷つけて、またあんな作り笑いをさせるのは嫌だった。

「ねえ」

「どうした？」

「席、いいとこ空いてないね」

「中途半端に二人掛けは埋まってんな」

「ねえ」

「いい席見つけたか？」

「私でよければ撮っていいよ、PR映像」

トレイを盛大にひっくり返しそうになった。一度宙に浮いた皿たちをしっかりと着地させる。

「え、ちょっ、え、マジか!？」

あまりの不意打ちに困惑した。いきなりどうして？　なんで気が変わった？

「だけど、出演するには条件があるんだ」

「条件？」

「君も出演すること」

「は？　俺も？」

息が詰まった。

三浦九という人間を、映像を通して伝える。本名を伏せて鈴木果歩に説明したさっきとはわけが違う。

身震いした。

「いや……いやいやいや！ 俺が出演したらカメラマンどうすんだよ。ないない、俺の出演とかないから！」

「カメラ、私扱えるよ。ていうかメディア学科なら一年のとき撮影機材の扱いは習ってるでしょ」

「実習の成績、俺はA判定だったんだ。俺のほうがカメラをうまく扱える」

「私、S判定だったよ」

ぐうの音も出なかった。

「二部塚ゼミの人たちを撮るんでしょ。だったら君だけ逃げるなんて許さないよ」

「けど……」

「あと条件がもうひとつ」

「まだあるのかよ」

「これはすぐ終わるよ」

そう言って智幸は、俺のトレイの上に乗っていたパンナコッタをひょいと取った。

「食べたかったんだ。ありがたく頂くよ」

智幸はショートのを弾ませながら軽やかな足取りで空いている席を探しに先に行く。

パンナコッタをあっさり奪われたのは、俺が油断していたからだ。

だって、智幸が屈託なく笑っているところをはじめて見たから。

※

出演交渉はすぐに終わった。

塚ゼミのメンバーは快く引き受けてくれて、全員出演してくれることになった。

ただ、仕事が忙しくて都合がすぐにつかない出演者もいて、一気に撮影というわけにはいかなかった。平日はみんなたいてい忙しいし、授業後も夜勤に出るやつだっている。だからといって貴重な休日をお願いするのはさすがに申し訳ない。

そういう事情から出演者たちの撮影スケジュールは飛び飛びで間延びしている。一ヶ月以上先でないと撮影できないって出演者もいるぐらいだ。

上映会が七月上旬。撮影を終えたあとは編集作業にかかりきりになるから、完成は提出期限ギリギリになりそうだ。

さて、本日は、はじめての撮影だった。

撮影場所は暗闇にでんと構える六号館校舎前。春の星座が瞬く夜空の下で、俺たちは撮影の準備をしていた。役割は真季が照明、海がレフ板、俺がカメラ撮影で智幸が撮影補助だ。

本日の出演者は山元浩こと山さん。昼は旅行代理店で働いているサラリーマンで、夜はメディア学科の大学生だ。

ショットはフルショット。人と場所によってはバストショットやロングショットなどに切り替えて映像にメリハリをつける。カメラアングルも同様で基本アイレベルだけど、ローアングルやハイアングルにも変える。ただ画面は常にひとりで固定だ。

撮影準備をしていると、背広姿の山さんがちょっと困ったように短髪をわしわしと搔いていた。

「いつもおれが撮ったり取材したりする側だから、いざ自分が撮られるのは緊張すんな。なに喋っていいかわからなくなるわ」

山さんの表情が硬い。できれば出演者は自然体で映したいのだが……。

俺はどうアドバイスすればいいか悩んでいたところ、すぐ横で三脚をセットしている智幸を見て閃いた。

こいつを使おう。

「山さん、君島をカメラの横に立たせるからさ、君島に話しかけるように喋ってみてよ」

私？ と智幸が首を傾げた。

「君島はさ、まだ二部に来たばかりでみんなのこと知らないんだよ。ある意味で、この映像を観てくれる人間の立場に近い。だから友達に話すみたいにこいつに語りかけてくれればいいよ。今日は撮影というより、君島と話しにきたぐらいの気楽さで」

「アハハハ、撮影はおまけかよ。ま、そう言われるとおれもやりやすいな。んじゃよろしく頼むわ、君島さん」

「あ、うん。よろしく」

メンバーが撮影準備を終えたことを確認して、「それじゃ、撮影をはじめろぞ」と俺は合図を出してカメラを回した。

cut.1 山元浩

「おれが夜の大学通ってる理由は……そりゃ夕方までリーマンやってるからだな。で、こんな背広姿なわけだ。今日も今日とて定時退社かましたら上司に嫌味言われてよ。『山元君は偉いねえ、勉強のために残業しないんだもんねえ』って。まったく社会はヤだねえ。

けど大学はいいぜ、上とか下とかねえからさ。そんなわけでおれの将来の夢は『テスト期間中なんで部長の胃に穴ができるほど有給使わせてもらいます！』って言うことだな。ワハハハ。あ、大学卒業したら記者になることも忘れてねえよ。どっちもいい夢だろ？」

撮影が終わって智幸が「社会人、大変だね……」と口元を引きつらせていると、山さんは豪放磊落といった感じで笑っていた。「ま、おれみたいな人間でも通えるからここはいいとこだな」と。

二回目の撮影は三日後。出演者は六十歳の京子さん。スマホを片手に、カメラレンズにしわら

だけの笑顔を投げかける。

cut.2 磯山京子

「あたしの故郷は減反でねえ。どんどん過疎化が進んじゃって老人が孤立しちゃっているのよお。もお、本当に嫌ねえ。どうにか老人たちが気軽に繋がれないか考えて、そこで思いついたのがこれ、高齢者用SNS『シニア万歳』。あら、ちゃんと映ってるかしら？

ブログや写真投稿からメッセージのやりとり、シニアでも使いやすいようにシンプルな機能にしてあるわ。ほら、こんな感じ。それでこの運営、あたしがやってるの。孤独死なんて笑えないものねえ。ぜひ登録してくださいな」

「君島さんも祖父母がいらっしゃったらぜひ『シニア万歳』、よろしく伝えておいてね」と撮影後に京子さんは智幸に声をかける。

「あ、そうそう。こないだうちの畑でイチゴが獲れたの。うちのイチゴ甘くておいしわよお。今度授業のときに持ってきてあげるわね。遠慮しないで食べなさい食べなさい」と京子さんは孫に接するような優しさに智幸本人も「は、はあ」とちょっと困ったように頬を搔いていたが満更じゃなさそうだった。

出演者にいちいち驚く智幸はなんだかおかしくて、ちょっと笑うと「なんで笑うかな」と仏頂面になっていた。

「どうしてこうも出演者に絡まれるのかな、私」

「どんどん絡まれてくれ。そのほうが出演者の緊張が解けていい画が撮れる」

「もうなんだかお腹いっぱいだよ」

なんて智幸は肩をすくめるが、なんでだろう、こいつがほかのゼミ生と話している光景を見るのは悪くなかった。

撮影は順調だった。着々と撮影スケジュールをこなしていき、次の出演者の撮影は一週間後でそれまでぽっかりと空白ができてしまった。

だからそのあいだを利用して、今回は撮影班の俺たち自身を撮ることになった。

夜空に輝く檸檬色の月。桜の花びらはすでに散って鮮やかな緑の葉が夜の闇に溶け込んでいた。

校門から校舎へと続くゆるやかな勾配の半ばほど、そこに俺たち四人は集まって撮影機材をセットした。

「とうっ！ あたし、爆☆誕！ フハハハハハ！」

特撮ヒーロー系の変身ポーズで高笑いしていたのは真季だ。

「こんな感じでいきなりあたしが画面に現れたら面白くない？ 面白いよね！ よしこれでいっ

てみよー！」

「いくな。戻れ」俺は手刀でぽかっと真季の頭を叩いた。「真季、ウケ狙わなくていいんだ。いつも通りでいいんだ。いつも通りで」

「別にあたしはいつも通りだよ？ ほら、テンションの高さとか！」

真季が両手を広げ陽気なステップを踏みながらくるくる回り、プリズムみたいな眩い笑顔を放っていた。

「あたしの頭上はいつも晴れなのさ。晴れてるから笑ってるんじゃないよ。笑ってるから晴れてるんだ。これがあたし笹野真季、ぶい」

頭を抱えた。

海だけが「うん、やっぱり真季は可愛いね。撮った映像は大切に保存して真季と会えないとき何度も見返そう」と楽しげだ。

勘弁してくれと頭痛がしたとき、きゅっとシャツの裾が後ろに引っ張られた。

振り向くと、智幸だった。

「三浦くん。笹野さんの映像が気に入らないならカットすればいいんじゃないかな」

「お前さりげなくひどいな」

「間違ってるかな？」

「妙案だ。よし、それでいこう」

「こらーっ、聞こえてるよ二人ともーっ！ ていうか聞こえてるように言ってるよね！ わかったよう、特撮ヒーロポーズはやめちゃうけん。あたしもつまんないって思っちゃった。フツーにやってあげるよ、フツーに。というわけで、あたし登場と同時に編集でどばばばーんって爆発エフェクト盛大によろしくう」

「どこが普通だ。ほら、アホ言っていないでさっさと撮影はじめるぞ」

被写体をやや見上げるようにビデオカメラの高さを調整。フレームにおさめた光景は照明に照らされた真季の笑顔だ。

cut.3 笹野真季

「その少年少女、深夜ラジオは聴くかい？ あたしは小っちゃい頃から聴いてたよん。

両親が新聞社で働いてて帰ってくるの朝なんだよ、朝。仕事好きすぎて夜中子どももほったらかしなんてひどくない！？ どんだけって思わない！？ ま、夜更かししてラジオ聴いてたから別にそこまで寂しくなかったけどねー。

あるときね、鼻屑にしてるラジオ番組のパーソナリティがさ、『なんか悲しくなったらすげーくだらないこと考えて、オレのところメール送ってよ。そしたらそれ声にするから一緒にくだらないことで笑おうぜ』って言ってたの。それ聞いてめっちゃ嬉しくてさ、あたしも将来はラジオ局就職してーって思ったわけ。

フフフ、あたし人気パーソナリティーになっちゃうかもよ。お宝VTRになっちゃうんじゃない、これ。サインがほしかったらうちの学部に入部することだね！ フハハハハ！」

どうだっ、と調子づいてカメラ横にいた智幸にピースサインをする真季。智幸は肩をすくめて「前半部分はともかく、後半部分はカットかな」と辛口批評に「無慈悲！ トモちゃんは無慈悲なのか！ それが御大将のやることかっ！」なんておどけていた。

「これでもちゃんとやったんだからね。大事なことは伝えてるのだ」

真季の目線の先には海がいて、海は穏やかな微笑をたたえていた。

「じゃ、次は僕が行こうかな」

二番手に名乗り出た海は機材を真季に手渡してカメラの前に立った。「自分のことを話すのはなんだか照れくさいね」と頬を掻きながらもとつとつと語りはじめた。

cut.4 青山海

「僕は高校を卒業してバックパッカーになったんだ。旅に出た理由は……そうだね、進むべき方向性がわからなくなったんだ。

気づいたんだ。進学が決まった大学は僕が望んだ進路じゃなくて、親が進ませたい進路じゃないかって。そしたら急に怖くなって……。

自分がなにをしたいのか、なにをすべきなのか、ちゃんと考えたくなっただんだ。

それで、ネパールを旅してるとき中年の男性に声をかけられて、ネパール原産のコーヒーを飲ませてもらったんだ。それがおいしくて、とにかくおいしくて。うまく言葉に表せないけど、ああ、これでいいんだなって思ったんだよ。

僕はいま定期的にネパールに行ってコーヒー栽培を手伝って、日本でネパール原産のコーヒー豆を扱ったカフェの手伝いをしているんだ。というわけで、おいしいネパールコーヒーが飲める『カフェ・カトマンズ』は白山駅から白山通りを歩いて十分の場所にあります。詳しいことは検索してください。遊びにきてね」

「現地のネパール人に言われたんだ、『日本人には感謝してる』って」

カメラを止めたあとも、海は智幸に話しかけていた。コーヒーを飲まず嫌いの智幸に伝えたい思いがあるのだろう。

「一昔前は栽培方法も効率が悪くて味もいまいちで、その上安く買い叩かれてたんだ。コーヒーを栽培しても栽培してもネパールの労働者たちの生活はよくなる……。でもね、NPOに所属している日本人が改革したんだよ。栽培方法を一から見直して、研究して、おいしいコーヒー豆を作ったんだ。日本にカフェを立ち上げてフェアトレードを通して利益を上げる。コーヒー栽培が雇用を作って生活を支えて、生産性が上がれば笑顔が増えて、素敵なことだと思ったんだ」

「そういうこと、カメラに向かって話せばいいのに」

「原稿作って練習したんだけど、宣伝第一って考えたらどうしても尺が足りなくてさ。でも、君島さんに伝えられてよかったよ。ネパールのこととか、コーヒー栽培を改革した日本人のこととか」

「立派だと思うよ。その人。なにも知らない私が言うのは変かもしれないけど」

嫌味ではなく、智幸は純粋に賞賛しているように見えた。

「死んじゃったんだけどね、その人」

「え」

「現地で強盗に刺されたんだ。やだね、治安が悪いってのはさ。いい人なのにあっさり亡くなっちゃうなんて、残酷だ」

海は悲哀混じりの微笑を浮かべた。そしてぼんやりと中空を見つめ、ここではない、遠く、別の世界を見据えているようだった。

「僕がやりたいことは二つ。ネパール原産のコーヒー豆を、メディアを利用して広めること。どんなメディアを使えばいいかはいま勉強中だね。あと一つは……さっき話した日本人の意志を継ぐなんてカッコいいもんじゃないけどさ、ネパールに飛んでコーヒー豆栽培の生産性を上げ、流通に乗せることなんだ。だから大学を卒業したら向こうに住むんだ」

「それって……」

日本を飛び立つということは、約束された別離がやってくることと同義。その意味を智幸は察したのか真季のほうを一瞥した。けれど真季の瞳は揺るぎなく、堂々と構えていた。

俺は知っている。こいつらの中ではすでに決着のついた問題であることを。

「さてさて」真季は仕切り直すようにパンと手を叩いた。「あたしも海ちゃんも終わったことだし、それじゃあ次は――」俺と智幸を交互に指差して、どちらにしようかな天の神様の言う通り――懐かしい言葉を口にして、最終的に俺で指が止まった。

「次は九ちゃんに決定！」

「決定、って言ってもな……」

俺は顔をしかめた。自分がカメラの前で喋っているところを想像しただけで胸が痛くなる。

「やっぱ俺の映像はいらねえよ。撮っても面白いもんにならねえから」

「えーっ、九ちゃん撮るからトモちゃんも撮るって話になったんじゃないの？」

「まず君島撮れよ。俺は最後でいい」

「そう言って逃げるつもりでしょー！ 嘘つく男は最低だぞ九ちゃん！」

凶星だった。

真季から逃げるように目をそらした先、智幸の顔があった。

「別にやりたくなければやめてくれて構わないよ」

逃げてもいいと智幸は言っている。けれど彼女のセリフを裏返せば、「あなたが逃げれば私も逃げる口実になる」だった。

「お前にはパンナコッタやっただろ。お前が出りゃいいんだ」

「パンナコッタと君が出演することが条件だったでしょ」

俺なんか映してどうすんだ。学校で授業受けてる時間より荷物配ってるほうが長いようなやつなんだぞ。面白味のない画になるに違いない。

知らなくていいと思う。

知らせたくない。

これまで誇れるようななにかがあったわけじゃない。高校生の頃から抱き続けた思いこそあるが、それは海のような信念や真季のような夢に比べればちっぽけだ。こっちはずっと土砂降りのようなつまらない生い立ちなんだ。

「……テキトーにやりゃいいんだろ」

「なら、私もテキトーにやるだけだよ」

やけに食ってかかる智幸。

写し鏡かと思った。ここで俺がカメラの前に立たなきゃ、智幸だって立たない。三浦九が撮影を拒否するなら君島智幸だって拒否権を行使できる権利を得てしまう。適当にごまかしたのなら、向こうだっでごまかすだろう。

しかし。

「君は、私になにを伝える？」

しかし、逆に言えば、同じだというなら、ごまかさず、偽らず、痛くても胸を開いて中にある自分を見せれば、きっと向こうだっ——

「カメラに、なにを話す？」

あれだけお腹いっぱいって言ってたくせに、いまの智幸はまぶたをぱっちり開けて、俺を受け入れようとしているみたいだった。

俺が智幸を知ろうとしているように、ひょっとしたら、こいつも——そんなありえない考えが、ちらっと脳裏をかすめた。

「九ちゃん、こっちにどうぞどうぞ」「九、どうぞどうぞ」真季と海がダチョウ倶楽部のネタみたく両手を差し出す。示した先は勾配を少し進んだ先にある創始者の銅像前。撮影場所をここに変えるということだ。

奇しくも、最初智幸と出会った待ち合わせ場所じゃないか。

「……俺の映像なんてひでえ画になるぞ」

「もう準備できてるよ、九」と海がビデオカメラと三脚をセットし直し、レフ板と照明は智幸と真季が準備している。

どいつもこいつも。

「……わかったよ！ やりゃいいんだろ！ どうなっても知らねえからな！ てめえら覚悟しろよ！ ひっでえ画になるからな！」

けっ、と吐き捨てる。ポケットに手を突っ込んだままカメラの前に立ってやる。

「やさぐれてる！」と真季にツッコまれたが、知るか。ヤケクソだ。こうなったらどうにでもなれ。どうせ笑われるんだったら、むしろどうぞ笑えって態度で臨めばいいんだ。鈴木果歩のときと同じ戦法だ。

海が軽く手を上げてハンドサインを出す。撮影開始の合図。

一度深呼吸して、語気を強めた。

「もう映ってんのか？ 映ってんなーサッカー選手の三浦知良の三浦に、坂本九の九、俺が三浦九だ。定時制高校出身。いまと同じように高校に通っていたのは夜。ああそうだ、夜だよ！

昼は夢と笑顔を届ける運送会社でバイトしている！ CMで素敵なモットー掲げているだろ、ほら、『この世界に溢れた夢と希望をお届けする会社、それが私たち』ってやつ。夢と希望？ ねえよそんなの！ こちとら正社員にあごで使われる毎日で、これじゃあ学生なのか社会人なのかわからねえっつーの。

俺が馬鹿みたいに働かなくちゃいけなくなったのも女作ってどっかに逃げ込んだクソ親父のせい！ どんだけクソなんだよ！ 死ね！ 金だけ残してトラックに轢かれて死んじまえ！ 母親は中卒で安い労働力として買い叩かれてすぐ体調崩すし！ 体中に湿布貼り過ぎてすげー湿布臭えし！ おまけに更年期障害だぞ！ 更年期！

母親にあんま迷惑かけらねえと思って俺は自立したんだ。母親見てわかったんだよ、俺は。やっぱ世の中、学歴だ、学歴！ いま俺をあごで使っているやつら覚えてろよ！ いつかてめえら全員あごで使ってやるからな！」

「カッタカッタカアアアアット！」

カメラが回っているなか、レフ板持ちながら叫んで突っ込んできたのは真季だ。

「九ちゃん八つ当たりじゃん！ 社会に対するロクケンローな魂をこんなところでぶつけちゃダメじゃん！ パンクじゃん！ 七十年代のアナーキズムを煽るバンドか！」

「うるせえ！ てめえらが撮らせろって言ったからやったんだろうが！ まだ話してやろうか、俺の社畜列伝を！ 親父クソさがわかるエピソードを！ ええ！」

「なにそれ意味わかんないよ！ もっとほかに言えることあるでしょ！」

「こんなかっこ悪い過去しか俺はもってないんだよ！ ほらネタにして笑え！ 笑っていいぞ！」

「どんだけ卑屈なの！？ 言うにしても程度ってのがあつたでしょ！ 程度が！ さすがにこれはボツだよ！ ボツ！」

ワーワーと俺と真季が言いあっているなか、海はカメラを止めて「いったん、休憩しようか」と苦笑していた。

撮影は中断。一度小休止をはさむことになった。

結局ボツかよ。まあ俺もひでえ画だとは思っただけさ。

心の中でぼやきながら脇に備え付けられているベンチで休もうとして、すでに智幸が腰を下ろして三ツ矢サイダーを飲んでた。

撮影中は自暴自棄の力を借りて羞恥心をうまくごまかせたが、一度時間を置いて自分の発言を冷静に振り返ると、なんというか、気まずい……。

うまく顔を合わせられなくて場所を変えようとしたが、智幸が腰を浮かしてベンチの端へと移動した。

「いいよ」

ぽんぽん、と空いているスペースを叩く。

少し考えたが、わざわざそう言われると断りにくい。

結局厚意に甘えて智幸とは反対側の端のほうに座る。三人掛けのベンチで、俺と智幸のあいだには人ひとり分の空白があった。

しばらく互いに無言で、夜のキャンパスの静謐さだけが下りていた。

声をかけたのは、意外にも智幸からだった。

「さっきの話、本当？」

「本当だ」

俺は、自嘲した。

バカみたいだろ、ネタにしていぜ、と言わんばかりに過去をおちゃらけたものにしちまえば気が楽だと思った。顔面の筋肉を持ち上げたらズキリと痛んだが、それでも笑みを作った。

「ハッ、まったくおかしいだろ。みっともなくって情けなくて、それでー」

「笑わなくていいよ」

ぴしゃりと、智幸は真顔で言った。

「そういうの、笑わなくていいから」

俺は作り笑いをやめていた。筋肉の痛みはなくなった。

「むちゃくちゃだよ、君。なにヤケになってるの？」

「なってねえよ」

「なってるよ。子どもみたい」

「子どもじゃねえよ」

「子どもっていうか、ガキだね。君って言ったあとですごい後悔するタイプでしょ」

ギクリと心臓に釘が刺さった。屋上での`特別な時間、で俺が言った告白紛いのセリフが蘇って気恥ずかしくなった。

こいつ、やっぱりあのときのことちゃんと覚えてるんじゃないか？

「あんな言い方、ダメに決まってるでしょ」

三ツ矢サイダーを一口飲んで、智幸は叱るように言った。

「やさぐれすぎ。ひどい映像だったよ。君、なんか怒ってるし、カメラ睨みつけてるし。ただでさえ目つき悪いんだから、もっと朗らかにしなくちゃダメでしょ。私が編集なら絶対に使わないよ、あれ」

「ひでえ映像なのはわかってるよ。俺でも使えねえと思うよ」

「じゃあどうしてあんなことを」

「.....嘘つくのはもっとひでえって思ったんだよ」

むくれる俺を智幸はしばし見つめて、そして口を開いた。

「バカだね、君は」

「知ってんよ」

智幸の口調は俺をけなしたというより、つまずいてひざを擦りむいた子どもを慰める母親みたいな言い方だった。

「とにかく、出るところには出たからな。次は君島の番だ」

「……私か。私はどうすればいいのかな」

戸惑いが滲んだ言葉は夜の闇に溶けた。

「君がバカ正直にあんなこと話すから、ここにきて私も考えちゃって……カメラを通して伝えるべき言葉、まだ決めてないんだ。迷っているっていうか、なんていうか……」

「好きにすればいいんじゃないの。なにを話すのも本人の自由だ」

「私の趣味を話すとか？」

「悪くないんじゃないね。たぶんみんなお前の趣味とか知らないだろ」

「将来の夢は？ ありがちな」

「ありがちだけど、大事なことだと思うぞ」

「大好きなオットーセイくんのPR？」

「君島の自己PRになってないよな、それ」

「――じゃあ、神様にイタズラされたこととか？」

俺はきょとんと目を丸めた。

神様？

「たぶん、それを口にしたら――」

智幸は言いかけて、「あ」と持っていた三ツ矢サイダーがするりと滑り落ちた。まるで握力を失くしたみたいに。ぼとり、とペットボトルが地面に落ちる音。キャップをしてないから飲み口からサイダーがこぼれていく。

智幸は慌てていなかった。容器から中身がどぼどぼ溢れ出て、シュワシュワと炭酸が弾けながら、やかげて敷き詰められたタイルに吸われて消える――その様をぼうっと見つめていた。不気味なぐらい落ち着いて。

「もったいないことしちゃったな。まだちょっとしか飲んでないのに」

ペットボトルは半円を描くように俺の足元まで転がってきたので拾った。

「こういうのってさ、たくさんあったから失くしたときもったいないって思っちゃうんだよね。はじめから空だったら失くさないから後悔もしないのにね」

ほとんど中身がなくなったペットボトルを見て智幸は長い睫毛を数センチ下げた。夜が濃くなっているせいか端正な顔立ちに翳りが差している。

「違うだろ」

「え」

「よく見てみるよ」

俺は軽くなったペットボトルを智幸の目の前で二度三度揺らす。ちゃぷちゃぷと容器の中でサイダーが跳ねる音。

「まったくの空ってわけじゃねえよ。まだ少しだけ残ってるだろ。ペットボトルの首が細いから全部はこぼれねえんだよ」

「でもほとんど残ってないよ」

「それでも空じゃないだろ。全部なくなったわけじゃない。残るやつもあるんだ。ほら、次はも

う落とすなよ」

ほとんど中身のない残ってないペットボトルを智幸に返す。一度落としているからいまさら飲む気はしないだろうが、このままキャンパス内に捨て置くわけにもいかない。

「最近ちょっと疲れてて、うっかり落としちゃったんだと思う」

間近で智幸の顔つきを見ていまさら気づいたが、目はとろんとしていてまぶたは重そうだった。頭は鉛でもついているみたいに下がっていて顔色もどこか青白い。まだ夜の大学に慣れてなくて疲れが溜まっているのだろうか。

「あーあ。せっかくの三ツ矢サイダー、もったいないことしちゃったな」

何度目かの後悔だった。

「バカだな、お前も」

「知ってる」

智幸はのそりと立ち上がった。

「そろそろ休憩終わりみたい。笹野さんが手を振って呼んでる」

「疲れてんじゃないのか。もう少し休んでからのほうがいいだろ」

「もたもたしてると遅くなっちゃうから」

俺も立ち上がって智幸と一緒に撮影機材があるところまで行ってみんなと合流しようとしたところで、海が大学の警備員さんとなにやら話していた。

「どうした？」

「あ、九。ひとまず正門閉めちゃうから、撮影するなら別の場所にするか、また別ににして撤収したほうがいいんじゃないかって」

時刻を確認すれば深夜になっていた。撮影に夢中でまったく気づかなかった。

「……ここまでか」

タイミングが悪い。せっかく念願だった智幸をこれから撮るというのに。

でも、ひとり分の撮影ならすぐに終わる。警備員もそろそろと言っていたなら、いますぐ撤収しなくても――そんな欲が出たが、智幸の石のように白い顔を見て冷静さを取り戻した。

「仕方ない。今日はここで引き上げるか」

これ以上の撮影は明日に響くし、智幸も疲れていそうだったので無理はせず打ち切った。

本音を言えば、多少無理してでもあいつを撮りたかった。

それでもチャンスはまだある。明日か、三日後か、来週か、一ヶ月後か、それはわからないけど、同じ班なんだから撮影の都合はつきやすい。

そう思っていた。

――次の日から智幸は大学にこなかった。

「君島が大学に来ていない？」

「そうなんだよー！ トモチん、ぜんぜん顔見せないんだよっ！」

真季からその知らせを聞いたのは七限の授業が終わったあとだった。さっさと家に帰って飯を食おうと校内を歩いていると、別の授業を受けていた真季と鉢合わせたのだ。

「きのうのメディア史、トモチんと一緒に受けてる授業だったんだけど来てなかったんだよ。あれーと思ってさ、そしたら今日の情報検索論も欠席してたんだよ」

「二日連続で欠席してるってことか？」

「うん。トモチんが欠席してるところなんてはじめてみたよ」

「確か俺たち自身を撮影したのが三日前だよな。じゃあ、あれから智幸は大学に来てないってことか……。携帯に連絡してみたか？」

「それが連絡つかないんだよー。メール送っても返してくれないし、電話しても電源がついてないうんたらかんたら。普段ならメールぐらい返してくれるのに」

「真季、君島とメールとかしてんのか？」

ちょっと意外だった。

アドレス教えるのをしぶっていた智幸がいまでは真季とメール交換なんて。俺の知らないところで女の子同士交流が活発になっているのだろうか？

「毎日じゃないけど、ちょこちょこメールしてるよ。くだらないこととか見つけたら写メつけてトモチんに送りつけるんさ。道端に気味悪いきのこ生えてたとか、浮かんでる雲がうんちみたいとか」

「本当にくだらねえな」

「舐めてもらっちゃ困るぜダンナ。と一ぜん授業に関係する大事なことも送ってるんさ。で、真面目な内容の場合はちゃんと返信くれるんだよ。なのに今回の場合は音信不通で、しかも連続して欠席なんて……。なんか変じゃない？ いや、ぜったい変。変だよ」

「変、ね……」

考えられる可能性は――俺は真正面から真季を見据える。

「お前、智幸に嫌われてるんじゃないか。変なことばっかしてるから」

「あたしのせい！？ 変なことなんてしてないよ！ 会ったときに欧米的なフレンドリーシップでさわさわしてるだけだよ。二の腕とか、腋の下とか」

「はい原因発見」

「ぶっちゃけると最近おっぱいもさわさわした。そしたらトモチんがパッド仕込んでること判明したよ！ 【特報】トモチんのバストに強化装甲。チョバムアーマー」

「絶対にそれが原因じゃねえか。ほどほどにしとけよ。じゃあな」

帰宅しようとして右足を一步前に出すが、ぐいっと後ろに引っ張られる。真季が俺の手を掴んでいた。

「待ってよ九ちゃん！ トモチん、素っ気ないこと多いけど懐かれるのそこまで嫌がってないよ」

「どうしてわかる」

「あの女はあたしに相手されて嫌よ嫌よと言いながらも心の中じゃうはうは喜んでやがるぜ。うへへっ」

「帰るぞ。俺は腹がへってるんだ」

「じょ、冗談！ いまのはちょっとふざけて言っただけ！ さわさわしたら割と本気で怒ってたからもうやらない、それはやらないけどさ、なんというか……わかるんだよ。トモチん、実は声をかけてもらったり、だれかと話したりするの、そんなに嫌じゃないって」

ぎゅっと、真季は俺の手をさっきより強く握った。

「ひとりでいいなんて心から思ってる人、いないでしょ」

「……………」

はぁ、と深く息を吐いて、家に向けていた足先を変えて真季へと向き直す。

「仮に、仮にだよ、あたしのこと嫌いだったとしても、授業にはちゃんと出る真面目な子だよトモチんは。それが連絡つかないで休んでるなんておかしいよ」

「けどまだ二日だろ。一週間以上欠席してるならさすがに気がかりだが、二日ぐらいの自主休講なんて大学生ならよくある話だ」

「けど心配だよ。前に聞いたんだけど、トモチんひとり暮らしなんだって。あたしもひとり暮らしだからわかるけどさ、親がそばにいないからなにかあったときすぐ助けてくれる人いないんだよ。できればトモチんの家に様子を見に行つてあげたいけど、住所わからないんだよ」

——千石駅の近く。大学から歩いて帰れるところ。

前に智幸がそう言っていたことを思い出す。

俺は浅く目を閉じた。

頭の中にある引き出しを開けて、そこに入っていた地図を手にする。配達業で培われた記憶の地図。職業病の産物みたいなものだ。

空想の世界で地図を広げ、俯瞰して眺める。大学から歩いて行ける距離で千石駅周辺、その情報から考えるなら一丁目、四丁目、六丁目、本駒込二丁目も入るな。あそこらへんは大学近くだから学生マンションや単身向けアパートが結構目につく。

肝心なのは智幸がどこに住んでいるかということだが——

「……………」

だめだな、見つからない。

俺の配達区域なら一軒一軒表札までマッピングされた緻密な地図を持っているが、生憎、千石駅周辺は区域外で大まかな区画ぐらいしか把握できない。

俺ひとりの力じゃだいたいの見当をつけるのが精一杯で、智幸がどこに住んでいるかなんてわからない。

「ねえ、どうしよ九ちゃん」

いつも明るい光が射す真季の瞳は心配そうに翳っている。

「どうしよって言われてもな……連絡つかないんじゃどうしようもないだろ」

「心配じゃないの丸ちゃんは。ゼミ長でしょ。教授にトモちんの面倒まかされたんでしょ。ゼミ、あさってだよ。このままもしトモちんと連絡つかなくてゼミ来なかったらどうすんのさ」

「……さあな」

じゃあな、と今度こそ俺は真季から離れていた。「もう」と真季は両頬を膨らませていたが俺は無視した。

ほかに考えるべきことがあったからだ。

■クロスカッティング 君島智幸

目覚めはよくなかった。

ぐにゃぐにゃと不安定にまどろむ意識。寝たのか寝てないのかわからない曖昧な感覚。

ベッドから体を起こそうとして、泥沼に浸かっているような倦怠感があった。だから横たわったまま目線だけ動かしてアナログ時計を見る。午前十一時。もう昼だ。

ここ数日、風邪のせいでとにかくだるかった。

携帯が何度もコールしていたけど、あまりにだるくて確認しなかった。そのうちバッテリーが切れたのか静まり返った。充電しなきゃと思ったけど、充電器が目につくところになくて探すのが億劫でたまらなかった。

体調崩したのは、仕事と学業と、あと人前で気を張り過ぎていたせいだろうな……。

けど風邪薬を飲んだおかげか、三日前にくらべれば体調はだいぶマシだ。頭痛も消えてくれて、授業休んだおかげである程度回復できた。

「……………」

薬、あってよかったな。お母さんが電話越しに常備薬は置いておきなさいと口うるさく言っていた。最初はお金かかるしいらないよそんなものと煩わしかったけど、お母さんが勝手に頼んで、薬品会社の人が常備薬を持ってきて、結果として助けられた。

「……………」

バイト、やること溜まっちゃってる。三日も手つかずだったのは二部にきてはじめてだ。

「……………」

今日の夜の講義はどうしよう。出席できないこともないけど……。

ふとんをどかして上半身だけ起こす。相変わらず鉛のように全身が重いけど、なんとか動くことはできる。でも、大事をとって休んだほうがいいかな。

「……………」

テレビのリモコンどこだっけ。ああ、立ち上がって探すの億劫だな。後回しにしよ。

「……………」

お腹、空いてきたな。朝ご飯、というかもう昼ご飯か。どうしよう……。冷蔵庫、確か空っぽだ。しまったな。寝込むことになるならスーパーで惣菜パン買いだめしとくべきだったな。夕方になるとセールで残ったパンが詰合せになって安いんだよなあ。しまったなあ……。

いまからコンビニまで歩いて……。ああ、歩かなきゃ。そのために着替えないと。顔洗って、髪も整えて……。そうだ、洗濯物たまってるんだ。うわあ、もう三日も洗ってないよ。やる事が多くて頭がぐらくらしてきそう。

「……………」

なんだか、静かだな。ワンルームの私の部屋は静寂に支配されている。

あれ、こんな静かだったっけ。前までゼミのみんなの声が騒がしくて、賑やかで、それがいまは……。

カチ、カチ、カチ、と時計の音。なんだか今日はやけに耳につく。ギシ、ギシ、とベッドの軋む音もやけにうるさい。

ああ、そっか。

私、ひとりなんだ。

「……………」

——これが私の望んでいた大学生活？

生まれ育った世界と違う世界を願いながら、体と神経すり減らすような毎日を過ごしているだけじゃ……。

「……ダメだよ」

この感覚はまずい。

ふとんをかぶる。つま先から頭頂部まで全身すっぽり覆って、二枚貝みたく閉じこもる。目の前は真っ暗で、キーンと耳鳴りだけがする。静けさに胸が押し潰されそう。寝よう。余計なことを考えずに寝よう。

ひんやりと冷たい場所で胎児のように全身を丸めた。空虚な世界で過ごそうとして——けれど、そんな世界はすぐに壊れた。

ピンポン、と甲高い呼び鈴が私の鼓膜を震わせた。

「……だれ？」

平日昼頃の訪問者……。新聞か宗教の勧誘ぐらいだろう。ベッドから起き上がっていちいち出るの面倒だし、どうでもいい。ほっといてほしいよ。

しかし呼び鈴は鳴り止まず、三回目で「あっ」と私は大事なことを思い出した。

そう。前にお母さんがお父さんに内緒でこっそり荷物送るって電話があった。到着予定日って確か今日じゃなかったっけ。だとしたらドアの向こうにいるのは配達員さんだろうか。

どうしよう。

体がだるいのもあるけど、いまの身なりがとにかくひどい。髪を整えてないし、寝起きでメイクもしてないから顔もできない。なによりパジャマ姿で、いちいち荷物受け取るためだけに着替えるのも面倒だ。どうせまたベッドに横になるんだから……。

ピンポンと四度目のベル。このまま出なければせっかく荷物運んできてくれたのに、配達員

さんに悪い気がする。

私はベッドから出た。最後に勝った感情は自分の見てくれより、居留守決め込んで配達員さんに苦勞をかけたくない、ということだった。「いま開けます」とドア越しに声をかけて、開錠しドアノブを回す。

――そして、絶句した。

「ヤマト配送で一す。お荷物お届けに参りましたー」

目を疑った。

視界に飛び込んできた映像に、脳が処理しきれない。

寝ぼけていた意識が一瞬で彼方へと吹き飛んだ。

……うそ、でしょ？

正面でダンボール抱えている配達員、それは、それは――

「よお、君島」

ヤマトの制服を着ていた三浦くんが、目の前にいた。

「家にいてくれてよかったよ。呼び鈴鳴らしすぎかなと思ってさ、これでダメなら出直そうと思っていたんだ。それで――」

反射的にうつむいた。前髪がカーテンみたいになって私の素顔を隠す。

なに、これ。三浦くんのセリフが頭の中に入ってこない。脳内に溢れんばかりの疑問が噴出する。なんで三浦くんがここに？ どうして私の目の前にいるの？ 私の住んでるところ配達エリアじゃないって言ってなかった？ これは夢？ 私まだ寝ぼけている？

疑問は、次第に焦りへと変わっていく。

うそでしょ、うそでしょ、とパニック寸前だった。いまの自分の格好を思い出して、ぞわっと背筋が寒気立った。

やばい……やばい、やばい、やばい。いまの私の身なり、やばいって。寝癖ついてるし、ノーメイクだし、パジャマ姿だ。ブラだって……うわっ、ブラつけてないじゃん！ つまり詰め物なくて、それって、それって……！ わ、わわわ、わあっ！ やばっ、こんなのおかしいって、変だって思われちゃうよ！

顔が熱い。真っ赤だ。私、いまぜったい湯気が出そうなほど赤面してる。

「――君島？ 俺の話ちゃんと聞いてんのか？ お前のサインがほしいんだけど」

「うきゅっ！」

素っ頓狂な声が出た。前髪で隠していた私の素顔を彼がのぞくように見ようとしたから。

「う、き、きっ、きゅっ……！」

「うきゅ？ おいどうした君島？」

「きゅう！」

両手で顔を覆う。こんがらがった糸みたいに頭の中がぐちゃぐちゃになる。気恥ずかしさで心臓が激しく動く。バクバクと全身が脈を打っているみたいで、血液の循環が急激に早くなる。

動悸がする。

過呼吸になって、うまく息ができない。

息苦しいのに、心臓は熱暴走気味に血を送り続ける。

手と足が痙攣する。ほっさが起きたみたいに口から泡を吹きそうだった。

「あ、あ——」

くらっと、強烈な日射しに当てられたみたいに目眩がした。

意識が遠のいていく。足元がふらついた。下向いていた視界がぐるんと天井に移り変わって暗転する。両足の力が抜けてへなへなとその場にへたりこむ。

三浦くんがなにか言っているけど、声が遠い。うまく聞き取れない。どんどん離れてフェードアウトしていく……。

そこで、私の意識はぶつりと途切れた。

※

智幸がいきなり倒れてさすがに焦った。「おい君島！ 君島！」呼びかけるが反応がない。

なにが起きた。一体どうしたんだよ智幸。これ、救急車とか呼んだほうがいいのか？ いや、驚いて気を失っただけか？

失神するほどかよと動揺したものの、そこからの俺の行動は早かった。荷物をその場に置いて智幸を抱え、部屋の中にベッドを見つけたのでそこに横たわせる——連の動作はほとんど反射的で無意識だった。

「あ」

はたと我に返って気づく。女の子の部屋に無断侵入していることに。

ぐるりと見渡す。桃色を基調とした花柄のカーペットに、同系色のカーテンと脚の低いテーブル。棚の上にはぬいぐるみがいくつかあってオットーセイくんもいた。ハンガーにはブラウスやスカートなど女性ものの服が飾るようにつるされている。掛けふとんには小さなハートマークいくつもプリントされていて、俺が想像している以上に女の子らしいレイアウトだった。

禁断の花園に足を踏み入れている気がして冷や汗が流れた。

無防備な智幸の横顔が映ったが、さすがにそこに目を向けるのは反則な気がしてあまりそちらを見ないように意識する。かといって彼女のプライベート空間に視線の落ち着けどころなんてない。

困った。このまま部屋で待っていていいのだろうか。それとも外で待つべきだろうか。けど、倒れた智幸を放置しておくのはまずいよな。どうする、どうすりゃいいんだ。

はじめて置かれた状況にあたふたしていると智幸の呟きが部屋に落ちた。「あ……」と長い睫毛をパチパチさせて、視線だけきよろきよろ動かしている。どうやら意識を取り戻したらしい。

「き、君島、目覚めた、のか？」

「————ッ!？」

智幸はおっかなびっくりといった様子で、ばさっと顔全体を覆い隠すようにふとんをかぶる。

「ど、どどど、どうしてっ!？　なんで君が私の目の前にいるの!？」

「お、落ち着け。この服装見りゃわかるだろ。仕事だ」

「ヤマトの服装で金輪際現れないって言ってた!」

「仕方ねえだろ。荷物配ってくれって頼まれたんだから」

「前に私のところは配達エリア外って言ってた!　ぜったい言ってた!」

非難するような口調だった。これ以上パニックを起こされては困ると、俺はなるべく穏やかに説明した。

「えっと、順を追って説明させてくれ。あのな、先輩が病欠で俺が代わりにここの配達エリアまかされたんだよ。そしたら君島宛ての荷物があったんだ。偶然だよ、偶然。それで荷物持って来たらお前がいきなり気を失って倒れたんだ。わかったか？」

それを聞いて、智幸が恐る恐るふとんから目元の部分まで顔を出す。

「三浦くんが私をベッドまで運んでくれたの……？」

「あ、えっと……まあ、そうなる、よな」

いまごろになって気づく。智幸の体に触ったことに。

正直、早く介抱してあげないと意識が先行して、智幸の体を抱えたときの、パジャマ越しの彼女の柔肌を両手に感じている余裕などなかった。

ただ、どうあれ無断で彼女の体に触れたことは事実だ。非難と糾弾の嵐がやってくるなと身構えたのだが、智幸は照れくさそうに顔を染めているだけだ。



「その、変だと思った……？」

「変？ なにが？」

はて、と俺が首を傾げる。

「……気づいて、ない……」

「え、なに？ いまなんて言った？」

「な、なんでもないよっ！ なにも思わないなら、それでいいよ！」

「なにも思わないっていうか、悪いとは思ってるよ。その、君島に触れて、勝手に部屋の中に入っちゃって……。それでいろいろ怒ってるのかなと思って」

「じゃあ、怒る」

「じゃあってなんだ。じゃあって」

「君が突然すぎたんだ。本当に、突然なんだもん」

ぶすっとした言い方だが、状況はだいたい飲み込めたのか智幸の声のトーンは少し落ち着きはじめた。

「真季から聞いたぞ。君島、大学に行っていないんだってな」

「……体調崩してたんだ。風邪だと思う」

「あー、やっぱそうか。去年も多かったよ、五月頃に体調崩すやつ。前に俺が言った通りになっちゃったな」

「特に最近忙しかったんだよ。バイトとか、課題とか。だってひどいんだよ。雑誌出版論の授業で急に教授がレポート課題出してさ。いきなりはひどいよ、いきなりは。寝る間も惜しんで作業してる時に限ってバイト立て込んでやって……」

「バイト、なにやってんだ？」

「あれ」智幸が指を差したのは部屋の四隅に置いてあった白い箱。なんだろうと中をのぞきこむと分厚く積み重なった原稿が入っていて赤で校正されている箇所がいくつもあった。

「校正の外部スタッフをやってるんだ。でも毎日仕事があるわけじゃないから、二部にきてからウェブデザインのバイトもやっている。収入はそこまで多くはないけど、直接人と関わらないのはいいなと思って。気を遣わなくて済むからさ」

「けどこうして倒れてたらダメだろ。ちょっと無理しすぎなんじゃないか」

「生活のためだから仕方ないよ。それに今回体調崩したのは仕事と課題がどさって重なっただけだから。もうこういうことがないようにするから、平気」

智幸の声はいつもよりやせ細っているように聞こえた。目の下にはうっすらと黒い影までできている。

風邪をこじらせて、だれの力も借りるわけでもなくひとり寝込んでいた。仕事だってひとりできっと黙々とやっているんだろう。

……ひとり、ひとりか。ちゃんと栄養のあるもの食っているのだろうか。智幸の抱きかかえたときの感触は覚えてないけど、すごく軽かった気がする。

言葉にできない感情が胸の奥に湧き上がって俺は立ち上がった。

「荷物、玄関に置きっ放しだけど部屋の中に運んでいいか」

「え、いいよ。あとで自分で運ぶから」

「結構重かったぞ。まだ体調万全じゃないみたいだし運ぶの大変だろ。俺が運んどくよ」

「……じゃあ、キッチンに、冷蔵庫の前に置いといてほしいかな」

「わかった。あとは？」

あと？ と智幸が小首を傾げてる。

「俺にできること。まだあるだろ。そうだ、飯は食ったのか？」

「え？ まだ、だけど……」

「風邪のときはやっぱ消化しやすいものもいいよな。だとしたら……うどんだよな、やっぱ。」

君島、冷蔵庫の中に食材とか入ってる？」

「あ、えっと……、三ツ矢サイダーしか入ってない、かと」

「ぷっ。お前、ホント好きだな三ツ矢サイダー。じゃあ、いまからスーパーまで食材買ってくるから。あとでキッチン借りるぞ」

俺が部屋から出ようとする「ちょ、ちょっと待って！」と智幸の焦った声が背中に飛んできた。

「君、いま仕事でしょ！ まずいよ。車で荷物とか運ばなくちゃいけないでしょ」

「違えよ、君島。俺みたいな下っ端バイトは車じゃなくて台車で運ぶんだ。繁忙期はドライバーの横について手伝ったりもするけどな。あのときはアゴで使われてさ、団地とかエレベーターないから超キツイの」

「そ、そうじゃなくてさ。私が言いたいことは、えっと、だから、これから配達があるのに私に構っていたらまずいってことだよ」

「一応、俺の分の荷物は君島のところで終わり。あとはほかのドライバーが配達するから。そんなことよりうどんがいいのか？ なんか食えないものとかある？」

「えっと、ない、けど……」俺の顔色をうかがうように智幸は言った。「どうして、そこまでしてくれるの？」

「ほっとけねえだろ」

智幸の細い眉がぴくりと反応してそのまま硬直する。妙な間ができて、その間になんとかそわそわして俺は付け加えた。「同じ班のやつが困ってたら助けるのもゼミ長の仕事だろ。……まあ、迷惑なら帰るけど」

「迷惑って、わけじゃ……」

「じゃあ、行ってくるから」俺はたたきに置いてあった靴を足に引っかけて出ようとした。

「待って」智幸に再び制止させられる。「うどん、麺はあると思う。君が運んできてくれた荷物に入ってるはず。実家、香川でさ、お母さんうどん送ってくれたと思うから」

「へえ、君島の地元って香川なんだ。うどんの本場じゃないか。わかった。じゃあ麺以外の食材買ってくるな」

またあとで、と俺はアパートを出て近くのスーパーへと急いだ。

スーパーで食材を買って再びアパートに戻ると、智幸があらかじめ調理道具をキッチンに用意してしてくれた。休んでいて構わないのに。

パジャマ姿だった智幸はカラフルなボーダーの入ったパーカーとパンツに着替えていた。寝癖も直っていて、俺の前でも平気で顔を出すということはたぶんメイクもしたのだろう。だろう、と推量なのは前髪で隠れていたせいでノーメイクの素顔はちゃんと見てないから違いがわからないのだ。

部屋も軽く整理したのか、飾られていた女性ものの服は片付けられていた。

智幸の母から送られてきた荷物の中身は確かにうどんだった。どうやら智幸の好きな製麺所のかけうどんらしく、パッケージに梱包されたセットが四ケースも入ってた。

俺はコンロに火をかけて鍋を沸かした。他人のキッチンは勝手にわからなくてどうにも使い辛く、手際はあまりよくない。

緊張だっけとしていた。猫のイラストの入ったまな板や蓋をするとパンダに見える鍋、可愛いキッチン道具を手にする女の子の部屋にいるんだと再認識して動き硬くなる。

俺が調理している一方で、キッチンから扉一枚はさんだ部屋で智幸は電話していた。携帯を充電して復活させたのだ。「お母さん」と言っていたから相手は母親だろう。耳をそばだてているわけではないが、断片的に智幸の声が聞こえた。「荷物、届いたよ。ありがとう」「え、茶封筒に?」「夏休み? 帰省しても、お父さんとは会い辛いよ。ちゃんと髪整えてこいとかうるさく言いそうだもん」「二部にはちゃんと通ってる」「がんばってる、うん、無理のない程度にね」「うん、うん、私は……元気だよ」

最後の君島の言葉を聞いて、強がりだな、と口には出さず思うだけに留めておいた。

智幸が通話を終えたときに、ちょうど俺もうどんを作り終えてお盆に乗せてテーブルの上まで運んだ。

「ほら、月見うどんな」

緊張したせいでちょっと手こずったが、悪くない出来栄えだ。半透明なかけつゆから湯気が立ち、こしの強いうどんの上に浮かぶのは刻んだネギと半円のかまぼこ、そして月のような黄身。テーブルの上に差し出した月見うどんを見て智幸はのどを鳴らしていた。

「……意外。おいしそう。君、本当に料理するんだ」

「疑ってたのかよ。ほら、冷める前に食っちゃえよ」

いただきます、と智幸は味を確かめるようにうどんをちゅると一本すすった。すると、ぱあっと目が輝きだしてちゅるちゅると箸の動きがスムーズになる。

「おいしい! さすが香川のさぬきうどんだね」

「褒めるのそっちかよ」

「このもちもちな食感と歯ごたえはいつ食べてもほっぺた落ちちゃうよ。料理の腕以前に素材がよすぎるね、素材がさ」

「素材を生かすも殺すも調理した人間次第だ」

「うどんなんて茹でるだけなのになに偉そうに言ってるんだか。私が作ったらもっとおいしくな

るかもね。ふふん」

「よしわかった。じゃあこの月見うどんは没収させてもらう。俺が食う」

「あ、ちょっとダメ！ ダメだよ！ もう。ちょっと言っただけで怒るんだから。短気だ、君」
軽口を叩きながらも智幸は次々に麺をすすっていく。そして小さな両手で丼を持ってつゆにふっーと息をかけてから飲んだ。

「あったかい」

そんな当たり前なことを、どこか嬉しそうに漏らした。

「ねえ、君どうしてさっきからずっと立ってるの？ 座ればいいのに」

「そ、それは……」

女の子の部屋に腰を落ち着けるなんてできなかった。なるべく平静を装っているが、正直、いまも血圧が上がりそうなほど緊張しているのだ。ましてやいまは会社の服装だし、清潔にしているが、ズボンを床につけると汚してしまうような気分になる。

「た、立っていたい、気分だから」

「くすっ。なにそれ。変なの。じゃあ、立っているついでに風邪薬取ってくれないかな。そのこの棚の上に置いてあるから」

君島はぺろっと月見うどんを食べ終えた。食欲はあるみたいでよかった。

棚の上に乱雑に置かれた薬は数種類あってどれが風邪薬か迷った。適当に手を取ってみて...
...『リーゼ』ってのは違うよな？ もしかしてこれぜんぶ風邪薬？ 数種類飲むものなのか？
風邪をひいたことがないからよくわからん。

と、よく見れば『風邪薬』と書かれている市販のものがあつた。それと水を君島のところに持っていく。

「あ、そういえばダンボール開けたとき『智幸へ』って書かれた茶封筒が入っていたぞ。勝手に触るとまずいと思ってそのままにしてあるけど……」

「お母さんからだ」

薬を飲んでから思い出したかのように智幸はダンボールから茶封筒を持ってくる。手紙だろうかと思っていたけど、封が開けられて出てきたのは紙幣だった。一万円札が、一枚。

金。厳密に言えば、宅配便で現金を送ることは禁止されている。いちいち咎めるほどのことでもないかもしれないが、配達業に就いている人間として一応注意しておこうとして――茶封筒からなにかこぼれた。ひらひらと舞ってテーブルの落ちたのは紙片だった。

――これでおいしいもの食べて。少なくてごめんね。

短文のメモ。智幸の母親からなのは予想がついた。

「前はさ、お母さん私の口座に仕送りしてくれてたんだよ」

智幸は落ちたメモを拾って母親からのメッセージをじっと見つめる。

「それも結構な額でさ、生活費だけじゃなくて学費もある程度まかなえるほど。でも、お父さんにバレちゃって仕送りストップ。通帳とかカードとか全部握られちゃったんだって」

「どうして父親にバレると仕送りが止まるんだ？ 家族なのに――」

言いかけて、無思慮な発言だとすぐに言葉をのみ込んだ。家族だからって必ずしも良好な関係

を築いているというわけじゃない。

それでも、智幸はあっけらかんとした口ぶりで教えてくれた。

「お父さん、私が上京することに反対だったんだよ。出ていく最後の日まで喧嘩しちゃってさ、もうガラスの灰皿まで飛び交うような、すごいい喧嘩。『お前なんか勘当だ一っ！』って近所迷惑になるくらい叫んで、恥ずかしいったらないよ。最後の最後まで上京を許してくれなくて、結局家出するみたいに上京したんだ」

一万円札とメモを茶封筒に入れ直し、テレビボードの引き出しに大事そうにしまう。そして小さく頭を下げていた。

「お母さんはね、優しいんだ。私のこと理解してくれるし、こうしてお父さんの目を盗んでこっそり荷物送ってくれるし。でもうちのお父さんは絵に描いたような頑固で、亭主関白で、イメージはあれ、巨人の星の星一徹みたいな人。病気になるのは心が弱いからだとか、どんな障害も強い気持ちさえあれば乗り越えられるとか、時代錯誤のトンチンカンで、なんていうかな、私をちゃんと見ようとしらない人。で、家出娘にやる仕打ちが兵糧攻めときたから笑っちゃうよ」

「兵糧攻め？」

「仕送り打ち切りのこと。お金がなくなれば大学辞めて実家に戻ってくるって思ってるんだよ。『お前はうちに入ればいいんだ』って口うるさくてさ。もうヤになっちゃうよ」

悪い人じゃないんだけどね、と智幸は呆れたように微笑んだ。

「心配なんだろ。娘がひとり東京で生活するのが」

「お母さんも似たようなこと言ってた。お父さんは私を手元に置いておきたいんだって。厳格の裏返しは過保護、みたいな。うちは香川で小さな旅館やっててさ、お父さんうちで働けばいいって言うんだよ。働いている人たちはみんな小さい頃から私のことを知ってるし、東京の冷たい人間に苦しめられることもないって。ふふっ、むかしの人ってどうして東京の人＝冷たい人なんだろうね」

おかしように半笑いする智幸。唇を横に広げながらも、その瞳はどこか物思いに耽るような感じがあった。

「……東京の大学にこだる理由があるのか？」

箱にたくさん積まれた校正待ちの原稿。病気で白くなった智幸の頬。追い込まれるような生活の一方、帰る場所がある。それでも彼女はまだ東京の地に踏みとどまっている。両親がいて、帰れる場所があるなら、俺ならきっと甘えている。

「変わりたいと思ったから。それが一番の理由」

迷いが無い言い方だった。

「私が実家を出てくことを決意したときにさ、お父さんよく言ってた。家にいれば安全で安心で、私がだれかに傷つけられることも、だれかを傷つけることもないんだ。確かにそうだと思う。思うけどさ、嫌なんだ。ずっと香川にいるのは。すごく、気持ち悪くなっちゃって」

智幸はパーカーの胸元をくしゃりと掴んだ。不安とか、嫌悪感とか、そういったものを潰しているように見えた。

「ほら、たまにさ、いろんな嫌なこと一切忘れて、リセットして、だれも自分のことを知らない

世界に飛んで行きたくない？ そんな感じ、かな」

わかる、気がした。

「でもね、時々……」

智幸は少しだけ視線を落とした。

「大学辞めて帰ろうかなって、気持ちが揺らぐときがないわけじゃないんだけどね」

「そう、なのか」

「援助を打ち切られたし、喧嘩しちゃったお父さんだけど本心から心配してくれたのわかったし。お母さんも優しい言葉をかけてくれるけど、ホントはお父さん以上に戻ってきてほしいと思ってる。でも、とりあえずうちの大学は二部があって、昼にくらべて授業料半分ぐらいで済んで、ほかにも理由は……うん、まあいろいろ都合がよかったから私は二部にいるんだ」

時々辞めて帰りたくなる——それはいまでも思ったりするのだろうか。退学という文字がちらついて、迷うことがあるのだろうか。

「あ、でもここの大学が嫌ってわけじゃないよ。勉強したい学科が東京にしかないからって理由でもこっちに来たんだ」

「それがメディア学科？」

「そう。映画の広告について興味があってさ。まだ早いけど、卒論はそのテーマをぼんやりと考えているよ」

映画。可愛いらしい部屋のコーディネートを隠れていて気づくのが遅れたが、テレビの横に置かれたラックには映画のBD・DVDがずらりと並んでいた。

タイトルは『ラブ・アクチュアリー』、『P. S. アイラブユー』、『25年目のキス』、『ノッティングヒルの恋人』、邦画なら『僕の初恋を君に捧ぐ』、『タイヨウのうた』、『ただ、君を愛している』。

一部邦画のタイトルは聞いたことあるけど、観たことない映画ばかりだった。けれど、愛、恋、ラブ、キス——甘いキーワードが並ぶタイトルばかりで恋愛映画なんだろうと推測はできた。

「へえ、BDとDVDかなり持ってんだな。やっぱ女の子って恋愛映画好きなんだな。君島も映画みたいな恋愛したいとか思うの？」

特別深い意味はなく何気なく聞いた。すると彼女は急に頬を紅潮させて、照れ隠しみたいにすぐそばにあったotto-seiくんのぬいぐるみで顔を隠した。

しばし沈黙が下りる部屋。

おい、いきなりどうした。俺、なにかまずいこと言っただろうか？

ひとり困惑していると、やけに低めのトーンで智幸が口を開いた。

「そうなのだ。智幸は恋愛映画が好きなのだ」

「……はい？」

なんだそのまるでotto-seiくんが喋っているみたいな話し方は。

「いきなりどうした君島。キャラ変わってんぞ」

「君島じゃないのだ。otto-seiくん」

「高熱でも出たか。熱で頭でもイカれたか」

「き、君は失礼なやつなのだ！ いまは私……じゃなくて、ぼくはオットーセイくんなのだ。君があまりにぼくのチャームポイントに気づいていないから、智幸の代わりに質問に答えてぼくの魅力を伝えまくってやるのだ」

なんの茶番だこれは。智幸の顔がすっぴりぬいぐるみに覆われてその表情が見えない。

しかし、これはこれでレアケースだなと思い付き合うことにした。

「それで君島」

「オットーセイくん」

「はいはい、わかったよオットーセイくん。つかオットーセイくんってそんな口調だったんだな。すっかり忘れてたよ」

「これを機にぼくの魅力にハマればいいのだ。どうだいこのもふもふボディに、キュートなおひげ。生協に行けば湯呑みからボールペンまで関連グッズいっぱい売ってるからたくさん買ってじゃんじゃん金を落とせなのだ」

「言葉汚ねえから。ゆるキャラみずからがめつさアピールすんな。話戻していいか？」

「どうぞなのだ」

「君島は恋愛映画が好きって話だったよな」

「正確には映画館の宣伝が好きなのだ」

「宣伝？ 映画館行ったときに本編はじまる前に流れるあれか？」

「うん！ 映画館の宣伝ってすごく面白そうに見えるよね？ 魅力的なキャッチコピー、壮大なBGM、おいしいシーンがダイジェストになってて興味そそられるのだ。もう宣伝だけで満足しちゃうのだ」

「あー、わからないでもないなその気持ちは。で、その映画観に行ったら本編より予告のほうが面白かったってオチはよくあるな」

「あるあるなのだ。でも宣伝で観客に劇場まで足を運ばせたんだから広告としては成功だよ。智幸は世の中に溢れた広告のなかで映画館の宣伝がもっとも素敵だと思っているよ。ちなみに、就職は広告業界を狙ってるのだ」

「へえ、就活への展望はもうあるわけか」

「君は？」

「俺？」

オットーセイくんの表情でいきなりこちらに話を振られてちょっと戸惑う。

「さっきからずっと智幸の話ばかりだ。君も話さないとずるいのだ。このオットーセイくんが話を聞いてやるのだ。えへん」

「ゆるキャラに話してどうすんだよ。ていうかまだやんのかよこの茶番」

「ぐちぐちうるさいのだ。オットーセイくんは東星大学生たちの夢を応援する妖精だよ。さっさと話しやがれうじうじ野郎」

オットーセイくんにかこつけ好き勝手言ってんなこの野郎。

「君はどうしてメディア学科に？」

「……別に面白い話じゃないぞ。飲み会のネタにもならない話だ」

「別にいいのだ。大して期待してないよ」

「そうかい」

俺は浅く目を閉じた。記憶の底からあの日観たフィルムを取り出して、まぶたの裏に映写する

。

「綺麗だったんだよ」

「綺麗？」

「高二のとき、文化祭でたまたま観た映像研究会のドキュメンタリー映像が綺麗だったんだ。春にさ、町工場で働いている職人が小学校に進学する新入生のために鉛筆をプレゼントするんだよ。ただの鉛筆じゃないぞ。桜の枝を加工してくり抜いた中心に芯を入れた、桜の鉛筆。世界で一本だけの鉛筆を子どもたちあげるんだ」

春爛漫。落ちた桜の枝を拾って鉛筆にする年老いた職人。プレゼントをもらって幸せそうな笑顔に満ちた子どもたち。舞い散る桜の花びらのなか、ピカピカのランドセルを背負って登校——それぞれのカットが克明に蘇ってくる。

「上映中はその世界に飲みこまれるようだったんだ。はじめて見た。あそこまで人の心情を大事にした、目に映らない部分を、心を映した映像は」

人と人が触れあう光景の一コマを撮影者は切り取って、暖かな感情をフィルムに焼きつけていた。

上映後も鳥肌がおさまらなかった。

大げさかもしれないけど、あの映像は胸が震えたんだ。この先、何年、何十年経っても俺の脳裏に焼きついて離れないだろう。

「だから大学で映研のカメラマンみたく心を映した映像を撮りたいと思って、この学科に来たんだ。……まだそんな映像は撮れてないけどさ」

自分で撮った映像を見返すたびあの日の感動にまだまだ届いていないと悔しくなる。なにが足りないのかわからない。テーマか、構成か、被写体か、撮影技術か。それとも、これが撮りたいという情熱だろうか。

俺はいつか撮れるだろうか。内面の世界を切り取った映像を。

「なんだ、学歴だけじゃないじゃん」

ひょい、と智幸はぬいぐるみから顔を出して普通に話しかけてきた。オットーセイくんキャラはどこにいったのか。

「その話、こないだの撮影のときに話せばよかったのに。そうすれば笹野さんにも文句言われなかったよ」

「うるせえな。あのときは……いろいろ考えがあったんだよ」

「なにそれ、意味わからないよ。やっぱり君、バカだね」

白い歯を見せて笑う智幸は、ひょい、と再びぬいぐるみで顔を隠した。

「君が夢見る映像、いつか撮れるといいのだ」

智幸は——いや、オットーセイくんは夢を見る東星大生をそう応援してくれた。

「そろそろ帰るな」

配達伝票にサインしてもらって時刻を確認すると、結構長居していたことがわかった。智幸の様子も知れたし、顔色もだいぶよくなっているように見える。これ以上ここに居る必要はない、のだろう。

「風邪は油断すると長引くからな。温かくして寝ろよ。あとちゃんと栄養あるもん食うこと。一応、スーパー行ったときに夜飯分の弁当と明日の朝飯の菓子パンも買っといたから。冷蔵庫の上に置いてあるから。ほかになにか困ったことがあればいつでも――」

俺に連絡してくれればいいから、とは言えなかった。固定電話どころか携帯すら持っていないじゃないか。

「……真季の携帯に連絡してくれ。俺が必要なら、きっと大学で真季が俺に伝えるから」

たたきで安全靴を履いていると、「ちょっと」智幸が呼び止めた。「スーパーで買ってきてもらった食材費、まだちゃんと払ってないよ」

「別にいいって。大してかかってねえんだから」

突然押しかけたのはこっちだ。これぐらいしないと罰が当たる。

だが、智幸は納得できないのかぶつぶと首を横に振る。

「よくないよ。ぜんぜんよくない。ちょっとの金額でもお金はお金だよ。ううん、お金だけじゃなくて君の貴重な時間を使わせちゃった。仕事中的なのに、面倒まで見てもらって……」

「どうしたよ、やけに殊勝じゃないか」

ちょっといじわるく片頬で笑ってみせるが、智幸の真顔が崩れることはなかった。

「嫌なんだ。私だけ助けてもらってばかりで、君ばかり損をしてるのは。それって、なんだか平等じゃない」

「じゃあ、どうすればいいんだ」

「なにか君に返せたらなって思うよ。それで貸し借りなし。体調が万全になったら、私にできることならなんでもしてあげるよ」

別に見返りを求めているわけじゃなかった。損だってしている気はなかった。俺はゼミ長だからと、これまで海や真季、もしくはほかの堺ゼミメンバーの助けになれることがあったら助けてきた。感謝されても、「別に気にしなくていい」と一言で済ましてきた。だから智幸にもその定型文を繰り返すだけ。

でも、できなかった。

普段絶対に見せないルームウェアの格好で、俺だけに瞳の焦点を合わせている智幸を見て、欲が出た。

それは、きっと純粋な欲じゃない。

ちらりと、視界の端にチョコレートのように甘いタイトルが並んだBD・DVDが目に入って思いついた。

映画。いや、それだけだと彼女を気遣っているだけにしか思えないから。

「じゃあ、4DX」

「……4DX？」

「体感型の映画、聞いたことないか？」

「ちょっと耳にしたことあるけど、詳しくは知らないかな。最近忙しくて映画館行けてなかったから」

「えっと、4DXっていうのはシーンに合わせて座席が上下左右揺れたり、会場に煙が出たり、風が吹きつけてきたり、3D映画以上の迫力を味わえるアトラクションみたいな映画——って、俺もちょっと前に知り合いに聞いて知ったんだけどな。で、最近池袋にある映画館が4DXを導入したらしい。メディア学科としては、やっぱり新時代のメディアを体験しておきたいよな」

「……気になる。うん、それ、気になるね！」

「だろ。俺も気になっていてさ。だから、その、見返りっていうなら4DXの料金おごってくれよ。それで、どう？」

つとめて平静を装った表情を浮かべながらも内心はそうじゃなかった。上がっていく脈拍をおさえ固唾を飲む。

智幸の反応は——なぜかそばにあったオットーセイくんを顔の前に持ってくることだった。

え、と呆気にとられる。なんだよその反応。

オットーセイくんが邪魔して智幸の表情から感情を読み取れない。だがそれは向こうからも同じで、小さな壁が張られているみたいだった。

「——わかったのだ」

やけに調子外れな声での返答。智幸が手でオットーセイくんの頭をむぎゅっと押さえて頷かせた。

「東星大生の願いを叶えるのがぼくの役目なのだ——なんてね」智幸はさらりとショートのを揺らしながらぬいぐるみから小顔を出す。「いいよ。私も興味ある。一緒に行こ。いつにする？」

鼓動が一段強く高鳴った。

「えっと、できる限り君島に合わせるよ」

「再来週の日曜日とかどうかな？」

「再来週の日曜日は、確かバイト入ってないはず。じゃあ、その日に」

「うん。わかったよ」

約束を重ねて、俺は玄関ドアの取っ手を回して開ける。春の生暖かい風が吹きこんできた。

別れ際、ドアに手をかけながら智幸のほうへと振り向く。

「君島、明日のゼミにはこれそうなのか」

「うん。だいじょうぶ」

「真季には連絡返しといてやってくれ。心配してたから」

「うん。電話いれておく」

「じゃあひとまず明日だな」

「うん。また明日」

「じゃあな。体、ちゃんとなおしとけよ」

智幸は片頬に笑みを張りつけた。

玄関ドアがガチャリと閉じられる。

扉一枚はさんで見えなくなったお互いの姿。視界から彼女が消えたことで、うるさいぐらいに高鳴っていた鼓動が少しずつ、ゆっくりと、落ち着きを取り戻しはじめる。

「……とんだ嘘つき野郎だな、俺は」

休みがちな智幸の様子が気になっていたところ、バイトの先輩が欠勤して、その配達エリアを担当したらたまたま智幸の家に荷物を届けることができた。

——そんな話、偶然にしてはできすぎている。

いや、確かに偶然はあった。それは智幸宛ての荷物があったこと。その点は、神様が背中を押してくれたのかもしれない。

けれど神様の力に頼らなくても今日俺は智幸に荷物を届ける予定だった。荷物なんていくらでもでっち上げられる。適当なダイレクトメール用の通販カタログを、あいつのところまで配達する口実を作ればいいだけだ。

白状しよう。

俺は今日バイトなんてなかった。休みだったのだ。

けれど早朝、ヤマトの制服を着て営業所に出向いた。千石駅周辺を配達しているドライバー数人に君島智幸を知っているか尋ねていったのだ。

配達のプロであるドライバーの記憶力は凄まじい、というより毎日同じエリアを配っていればどこにだれが住んでいるのか体が覚えてしまうのだ。ドライバーによっては荷物の受け渡しの際に主婦と世間話なども弾んで、その家の家族構成まで熟知している人だっている。

智幸がどこに住んでいるかはすぐにわかった。

ドライバーが智幸の家に配達があるというので、そこで俺は自分にやらせてほしいと申し出た。ドライバーはちょっと困ったようだったが、「ほかのエリアの配達も勉強しておきたいんです」なんてうやうやしく頭を下げたらまかせてくれた。

そして俺は智幸の家に荷物を届けに来たわけだ。仕事だと言って。

休日潰してまでなにやってんだ。しかも仕事利用して個人情報探るなんて職権乱用もいいところだ。甲斐甲斐しく面倒まで見て、必要以上に手厚く扱っているんじゃないかとみられても仕方ない。

助けるのはゼミ長だからと智幸には言った。同じ班の仲間の連絡つかなくて、このまま自主休講が続けば今後の撮影に影響が出る。だから智幸の様子を知っておく必要がある。

けれど本当にそれだけの理由か？

一点の偽りなく、純粋に、ゼミ長の役目だけで動いていたと言い切れるか？

「……………」

YES、と答えられない。

迷いが生じる。

俺は智幸にどうなってほしいんだ？ 智幸にどう思ってほしいんだ？

自問は止まらない。胸の中の感情の色は、グレーで、中途半端で、曖昧なままだ。

「……一緒に行くんだよな、映画」

下を向けば制服が視界に入った。

服、映画観に行くときはちゃんとしよう。まともで、大学生らしい服を。

※

cut6 大林奈々子

「『サウンド・オブ・ミュージック』ってガールズバンドやってます！ いえい！ ウチのバンドの特徴は十代から三十代までメンバーの年代が幅広いことなんだ！ オープンキャンパスの日に百周年記念ホールでライブやるからぜひ聴きに来てねっ！ カバーからオリジナルまで幅広くやるよ！ その君たち、私の歌を聴けえええーッ！」

cut.7 野村さやか

「……ワタシ、卒論のテーマは『ムダ毛』についてやろうかと考えてるの。え、どうしてムダ毛かって？ ムダ毛が原因で彼氏と別れて、それからムダ毛が無性に気になって……。ねえ、ムダ毛ってなんだと思う？ ムダ毛の概念はいつから生まれたの？ 気になるでしょ。だから調べたのよ、ムダ毛の起源を。国会図書館でひたすらムダ毛に関する資料探し、フフ。そしてわかった、メディアが関わっていたことに。明治から昭和にかけて発行された雑誌でムダ毛について論述があった。ねえ、知ってる。むかしの女優は平気でワキ毛を見せたのよ。メディアという観点からムダ毛をアプローチしてここまできたわ。フフ、ウフフ」

cut.8 田中太郎

「映画作ってんの、自主制作映画。タイトルはずばり、『俺が靴だと思っていたものは本当は鍋だった』！ どうだ、興味を引くタイトルだろ！ いやー、このタイトル思いつたときにはもう俺天才じゃねと思ったね。勝った、これは勝ったとガッツポーズしちゃったよ。どんどんアイデアが湧いて脚本がいま仕上がって、役者と本読み真っ最中。つーわけで、『俺が靴だと思っていたものは本当は鍋だった』完成したらよろしく！ あ、エキストラ募集してるから気になったら連絡くれよ！」

PR映像の撮影後。俺は海と大学近くのファミレスにやってきた。深夜まで営業していて二部生でも学校帰りにゆったりと話すことができる憩いの場所だ。

「悪いな。真季と帰れたのに俺が誘っちゃって」

「気を遣わなくていいよ。真季とは普段から一緒にいるからさ。だからほら、真季だっていつてらっしゃーって送り出してくれたでしょ」

ボックス席の向かいに座った海はニコリといつもの微笑で、ドリンクバーのコーヒーを飲んだ。

「変わってないなあ、ここのコーヒー。ま、ファミレスのコーヒーの味なんてそうそう変わらないよね」

授業後、海と二人きりでファミレスに足を運んだのは久しぶりだ。

オレンジの照明に染まる店内。夕食時をとうに過ぎてまばらにしか埋まっていない客席。スピーカーから陽気なジャズが流れていて、雰囲気は一年前と変わっていない。

ふと、俺の座っているイスの端っこのほうに目をやるとシートが破けて小さな穴ができていた。まるでほじくったように黄色のワタが出ている。これまだ直してねえのかよ。変わってねえな、ホント。

「ここのファミレス、僕が真季と付き合う前は九とよく来てたよね」

「一年の頃な。ドリンクバーだけで深夜まで駄弁ってさ、いま思えば店員すげーうざがってただろうな。しかも喋り過ぎて時間忘れて、お前よく終電逃して俺の家に泊まり来てた」

「あははっ。あったあった。で、九の家に行ったあとも喋ってるの。それで気づいたら朝になってお互い寝不足のままバイトなんてざらだったよね」

「お前、ふとんの中入ってからがトーク本番とか言い出すんだもんな。眠気どこいったレベルだよ。ネパールコーヒーに対する情熱とか、高地栽培における大変さとか、フェアトレードの仕組みとか……って、主に盛り上げてんの海だな」

「いやいや、ゼミの話だってしてたじゃないか。〇〇くんが〇〇さんのことを気になっているとか、最近あそこ付き合いはじめたとか、フラれたらしいとか、それこそ修学旅行の夜にするような話をさ」

「それも海が一番盛り上げてた」

「ほかによく話したのは、僕が真季と付き合う決心できない話だね」

あったな。そういう話。

あのときも俺は穴の空いたイスのほうに座って、向かいに海がいた。

「なんだかんだ言いながらも、九は僕の話によく付き合ってくれるんだよね。授業が終わって疲れてるはずなのに、ちゃんと聞いてくれた」

「実際聞いてるだけだったけどな。なにかアドバイスしたわけじゃない」

「そういうのは、聞いてくれるだけで半分は解決しているようなものなんだよ」

心から和んでいるように微笑む海。

こいつは柔らかくなった。そうだ、海を包む空気がふわりとしていて柔らかい。

昨年度、俺の前に座ってコーヒーを飲んでいるときは苦々しく唇を曲げて、苦笑してばかりだった。

出会ったときから爽やかで微笑む表情がやけに絵になるやつだったけど、実は結構思い詰めるタイプだった。変なところで真面目で、一度決めたら考えが固定して抜け出せない。柔軟に見えて石のような硬さがあった。

それがいま優しく溶かされたように見える。まるでコーヒーに溶け込む角砂糖のように。

確実な変化は真季と付き合ってからだ。

変化のないファミレスの中で、海だけは変わったように見える。

「付き合うって、どんな感じなんだ？」

深い意味は特になかった。無意識に声に出していた。

「珍しいね、九からその手の質問が飛んでくるなんて。どんな感じ、感じか……。僕が真季と付き合って感じたことは、そうだね——」

手で一度あごを触ってから言った。

「付き合うって、認め合うことなんだろうね」

ぶれの無い声。自分のなかで揺るぎなく打ち建てられた答えを持っている人間の言い方だった。

「だれにだって他人に見せたくない部分ってあるよね。友達にも、家族にも知られたくないこと。弱いところとか、汚い部分とか、傷とか。でも不思議と好きな人には見せられる、っていうか付き合っていると見えちゃうことがあってさ。そういう部分を、真季は受け入れて認めてくれるんだよ。もちろん真季にだってそういう部分はあって、だから僕も受け入れて認める。そうやってお互いに見せたくない部分をひとつずつ確認して、受け入れて、認めていくって過程が付き合うってことなんじゃないかな。だとしたらきっと、結婚っていうのはすべてを認め合った結果なんだろうね」

海の話は遠い世界の物語を聞いているようだった。

完璧で理想的な優しい世界観。俺の想像が及ばないおとぎ話。

果たして、この世界にいるのだろうか。大学生なのか社会人なのかわからない中途半端な自分を受け入れてくれる人間が。この先、そんな陽だまりのような世界観を抱えている人間が現われて認めてくれるのだろうか。

——私も、普通じゃないから。

一瞬、彼女の影がちらついた。

「それで、今日の本題は僕と真季のノロケ話三時間コースってことでいいのかな？」

「さすがに勘弁してくれ」

「九の家で朝まで真季自慢でもオーケーだよ。コーヒー道具一式持ってきたからカフェインもバッチリ！」

「泊ませんぞ！ 絶対に泊ませんからな！」

「あははっ」

おどけながらも笑顔で頬杖をついて本題を待つ海。

俺はストローでアイスティーの氷をちょんちょんとつついて切り出し方を考えながら、でもスマートな切り出し方なんて思いつかなくて、とつとつとその件を口にするしかなかった。

「君島とさ、映画館、行くことになった」

「二人で？」

「まあ、二人かなと」

「お、デートだ」

「でっ……デートじゃなくてっ！」

反射的にバンッとテーブルを叩いて立ち上がって否定した。ウエイトレスが何事かと怪訝な視線を突き刺してきたので、俺は慌てて頭を下げてイスに座る。なにやってんだバカ。落ち着けよ、俺。

「せ、正確には……これ、デートじゃなくて見返りなんだよ」

「見返り？ どういうこと？」

返答に窮した。智幸の家に行って看病した経緯を話していかどうか迷ってしまう。

というのも、今日の撮影のとき智幸は元気な姿を見せた。体調がよくなって撮影機材のセッティングから二部生の聞き役として活躍してくれたが、事情を知らなかった真季や海はやはり心配して、そこで休んでいたときの状況を尋ねていた。智幸が事情を説明しているとき、ちらっとうかがうように俺を一瞥こそしたものの、俺が様子を見に来たことは一切喋らなかった。

互いに秘密にしようと思ったわけではなかった。

けど、智幸は胸の内に隠した。

月見うどんを食べたことも、恋愛映画好きということも、オットーセイくんのぬいぐるみでおどけたことも。

俺が話さなければ、あの日あった智幸の一面は俺以外だれも知らないことになる。

俺だけの、もの。

「まあ、君島に貸しを作ってさ」

結局、言葉を濁した。

「それで、君島と映画館に行くのはいいんだけど、問題があって……」

「問題？」

「服がないんだっ。よそ行きの服がまったくないんだよ」

「九が普段大学で着ている服装で問題ないと思うけど？」

「な、なんか嫌じゃん！ 遊びに行くのに大学と同じ服着てるって思われそうだし！ ただでさえこっちはヤマトの服装のイメージが強いんだ。洒落てるとまではいかなくていいから、こう、普通の、いい感じの服を着ていきたいと思って」

「ははっ、普通なのかいいい感じなのかよくわかんないよ」

「よそ行きの服ってあんま意識したことないからよくわかんねえんだよ。やっぱ、多少は、カッ

コつけるべきかなって……。だから、その、今度買い物付き合っほしくて……」

「なんか可愛いこと言うんだね、九」

「うるせえ！」

海は陽気に笑って頷いた。「いいよ。一緒に服を見に行こうか」

それから数時間、海との会話は弾んだ。どこに買いに行くか、どういう服装がいいのか、また話が転じて映画の話とか、海から見る智幸の印象とか、やっぱり真季とのノロケ話とか、深夜を回っても会話は途切れることなく、ドリンクバーを何杯もおかわりした。

「そうだ。真季と付き合っ感じたことをあとひとつだけ」

店を出るとき、最後にこれは覚えておいたほうがいいとアドバイスしてくれた。

「後悔したくなかったら自分の気持ちに嘘ついちゃダメだよ」

※

智幸との約束の日、当日。

突き抜けるような青空に響く池袋の喧騒。待ち合わせ場所のフクロウを模した交番は池袋駅東口から出て少しのところにあった。

「……いくらなんでも早く着すぎたよな」

待ち合わせ時刻は午後三時だったのだが、俺は一時間半も前に交番前に着いていた。

待ち合わせ場所にかなり早く到着したのは大した理由じゃない。今日に限って朝四時に目が覚めて、それから二度寝しようとしても寝つきが悪くそのまま起きてしまったのだ。家にいてもそわそわして、外の空気を吸っていたほうが精神衛生上よろしいと判断して早めに出た。早すぎる気がしないでもないが……。

改めて服装確認をする。紺のテーラードジャケットに、インナーは白のシャツ。下は黒のスリムパンツに、靴はブーツスニーカー。

コーディネートは海がしてくれた。海は似合っていると背中を押してくれたが、本当だろうか。智幸にがんばりすぎと思われないだろうか。

腕時計で時間を確認すると待ち合わせ時刻までまだ一時間近くある。

約束の時間が一秒事に近づくにつれて、鼓動のピッチが上がっていった。緊張と同時に、不安もゆるやかに広がっていく。

——最初出会ったときみたいにまたすれ違わないだろうか。

目の前を行き交う大勢の人たち。だれもが早足で肩がぶつかりそうになりながら交差していく。この人波のなかに智幸の亜麻色の髪は飲み込まれてしまわないだろうか。もし見失ったら、携帯を持っていない俺は連絡のつけようがない。

智幸に気づけなかったら、すれ違ったら、俺はどうすれば——

「あれ、三浦くん？ もう着いてたんだ」

「うわっ！」

背後から不意打ちみたいに呼ばれて思わず全身が跳ねた。

振り向けば智幸の艶やかなショートが春風に揺れていた。

「なんでそんなに驚くかな。うわって驚き方はやめてほしいよ。もう」

「す、すまん。君島がこんなに早く到着するとは思ってなくて、いきなり声かけられたからびっくりしてつい……。てか、到着すんの早すぎんだろお前」

「そ、それは……ちょっと早起きしちゃったからさ、なんていうか、割と早めに池袋に来たんだよ」ごまかすように智幸は跳ねた髪の毛先を指でいじる。「というか君だって人のこと言えないでしょ」

確かに人のことは言えなかった。俺だって智幸と同じだ。

そんな智幸の今日の服装は、純白のブラウスに可愛らしいリボン、黒のスカートだった。風に

なびくスカートのプリーツが彼女の可憐さを引き立てる。

「な、なにかな。黙ってじっと見て……」

ブラウスの胸元をくしゃりと掴んで恥ずかしそうに身を縮める智幸。緊張しているのか声が強張っている。

「あ、いや……君島のスカート姿はじめて見たっていうか、可愛らしいつつうか、似合ってんなって」

ぼろりと本音がこぼれてしまった。まるで俺らしくないセリフに自分でもなに言ってんだと赤面するが、智幸はぱっと花みたいに笑顔を咲かせた。

「たまにはいいこと言うね、君」

「たまにはってなんだ、たまにはって」

「それで、これからどうしよっか？ お互い早く着きすぎて時間できちゃったね」

二人して予定時刻を繰り上げて到着するという奇遇。困った。想定外の間にかこういうとき女の子とどう過ごせばいいかわからない。

フツーに考えて、喫茶店で時間を潰せばいいのだろうか。ただ、目の前にある喫茶店はカウンターで列ができて明らかに満席状態だった。ほかにどこか喫茶店があるだろうか？

池袋は目まぐるしいほど賑わっていてどっちに歩けばいいか迷う。こういうとき穴場を知ってれば……。くそ、もっと遊んどくべきだったな。

わしわしと髪を掻いて方針を考えていると智幸が言ってくれた。

「あのさ、時間あるならその携帯ショップ寄ってほしいな」

智幸が指差したのは喋る白い犬で有名な携帯会社のショップだった。

「携帯のバッテリー消耗してるっぽくて交換したいんだ。寄っていいかな？」

「上映までだいぶ時間あるし、構わねえよ」

そっか。間が空いたら女の子にどうしたいか聞けばいいのか。

携帯ショップに入ると、店内は比較的空いていた。さっそく智幸は店員をつかまえてバッテリー交換を頼んでいる。

手持無沙汰な俺は棚に陳列されたスマホの新機種を眺めていた。種類が多すぎてなにがなにやら。どの機種も同じに見える。

数ある中から適当にひとつ手に取っていじりながら、ふと思い立った。

——携帯さえを持っていればすれ違いがなくなるだろうか。

携帯なんて煩わしいだけだと思っていたのは、たぶん会社から持たされたせいだ。荷物片手に急いで配達しているのにも関わらず、次から次へと集荷やら再配やら電話がかってきてうんざりした。

これまで携帯がなくてもそこまで不便だとは思わなかった。ネットに繋がったパソコン一台あればメールも、いまじゃ電話だってできるのだから。

でも、だれかと繋がれるのは俺がパソコンの前に座っているときだけ。外出してしまえばそうではない。

携帯さえあれば、智幸と最初に出会ったあの日みたいにすれ違うことはないのだろう。智幸

が困ったときに気軽に連絡しろとも言える。仮にいま広大な池袋ではぐれたとしてもすぐ見つけられる。

どこにいても繋がれて、どんな場所でも他人と自分の声を届けられる魔法の機械。あんなに疎ましかったものが、いまはかけがえのない代物に映っている。

「三浦くんって、これからも携帯持たないつもり？」

いつのまにかバッテリーを交換した智幸が俺の横に並んで同じように携帯を物色していた。

「固定電話は持ってるの？」

「まさか。大学生のひとり暮らしで固定電話持ってるやつは少ないだろ」

「大学生のひとり暮らしで携帯電話持ってない君が言うかな、それ」

「いままで連絡は全部パソコンで済ましてきたんだよ」

「不便でしょ。さすがに就活がはじまったら携帯必要だよ。もう来年だよ、就活」

「そう、だよな……」

不便。そう、智幸と出会ってからなにかと不便だと思うようになった。

どのみち、来年の就活時期には持たなければいけないことぐらいわかっている。それなら、どうせ持つなら、いまから手にしたって――

視線を上げれば『本日中即お持ち帰り』、『新機種実質0円』と俺の背中を押すようなポップが書かれていた。

「携帯の契約って、やっぱ時間かかるよな」

「いま混んでないし、すぐ終わると思うよ」

「じゃあいいかもな。いま、携帯買っても」

すれ違いが、なくなるなら。

「おおっ、これでやっと生きてる化石から現代人に仲間入りだね。そんな携帯を買うことを決心した君に、先輩である私が契約までいろいろサポートしてあげよう。アウストラロピテクスくん」

「うるせえよ。携帯ないと死んじゃう病に犯された現代人め。契約なんて俺ひとりでも楽勝だ」

「じゃあ君はこの多種多様でそれぞれ特徴が異なる機種の中から自分に合ったベストを選べるんだ。へえー、へえー。複雑な契約プランに頭がくらくらしらないんだ。へえー、へえー。受付のお姉さんの口車に乗せられて不要な割高オプションとか組まされちゃっても平気なんだ。へえー、へえー」

「……教えてください」

「ふふっ、最初から素直にそう言えばいいんだ」

智幸が陳列された携帯を持ってあれこれ説明してくれる。「画面はワイドなやつがいい？ それともバッテリー長持ちのやつがいいかな？」「色、ホワイトがいいね、明るくて」「ネットあまりしないならこっちのプランのほうが割安でおすすめだよ」ともろもろ丁寧に解説してくれる。

「メールと電話ができればいいや」俺がそう言うと智幸はぷすっと吹き出した。「それぐらいいまどきどんな携帯でもできるよ」

「じゃあ、ムービー機能が充実しているやつ。撮りたい光景があったら、すぐ撮れるように」
それならと、智幸がオススメしてくれた携帯を俺は買うことにした。

契約はどうやらキャッシュカードと運転免許所があればいいみたいで、店員の説明を聞いて真新しい携帯電話が入った小包を渡された。

一連の流れはスムーズであっさり契約できてしまったことにちょっとびっくりした。本当に本日中即お持ち帰りだ。

「ね、そこのスタバでちょっと休憩しよ。休憩がてら新しく手に入れた携帯もいじれるしね。君、初期設定とかでつまずきそう。最後まで責任持って一緒にしてあげるよ。アウストラロピテクスくん」

どれだけ携帯音痴だと思っているんだと抗議しようかと思ったが、智幸側に一理あったので黙って従うことにした。

スタバに入って真新しい携帯の初期設定を教わる。どうにもフリック入力が慣れなくて手こずる。会社の携帯はガラケーだから扱いがまるで違う。

メールアドレスの設定で何度か入力ミスしながら、適当に思いついたメアドを打ちこんだ。「うわー、メアドが自分の名前と誕生日ってセンスないな。すごいテキトー。もしかして男の子ってみんなのそうなのかな。私、すごく悩んだのに」

女の子はメアドに意味とか趣向とか、ひょっとしたら願いとか、そういった類のものをこめているかもしれない。まるでひとつの詩みたいだ。

けど俺からしたらメアドなんて記号で、わかりやすいに越したことはない。

「ま、いまの主流はメッセージアプリだからメアド使っていない人けっこういるけどね。でも、私はメールが好き。なんかメアドに変に愛着湧いちゃって」

「人を馬鹿にするぐらいだ。さぞ、センスあるメアドなんだろうな」

「君よりはね」

智幸は自分の携帯をいじってプロフィール画面を俺に見せつける。どうだっ、と水戸黄門の印籠を見せつけるシーンの如く。

智幸のメアドは簡単に言ってしまうとオットーセイくんが好きってニュアンスのものだった。拍子抜けだ。こいつのセンスも大概じゃねえか。

「……これ、さ」

表示された智幸のメアドと電話番号。世界でたったひとつの彼女の連絡先。どこにいても通じることが可能な入口。

思うところがあった。

「……アドレス、登録していいか？」

声を肺から振り絞って、震えそうになるのをできるだけおさえた。

智幸はすぐに返事せず自分の携帯を見たままで、それは一秒にも満たないほどの間だったが、その一瞬が俺には永遠のように感じられて、たまらず照れくさくなって付け加えた。

「ゼミの連絡とか、できたほうがいいし」

もっと素直な言い方があるのに、言えなかった。

「だね」智幸は頷いて、いじわるな笑みを作った。「センスないなーっていつでもばかにできるように、君のメアドも登録しとくよ」

俺が智幸のアドレスを登録して、智幸が俺のアドレスを登録して。

携帯に登録したのはじめての連絡先は家族でも親友でもない、君島智幸だった。

上映時間が迫ってきたので俺たちはスタバを出た。

映画館のあるサンシャイン通りは賑わっていた。休日のせいで混雑していて、初詣を思い出すほど人だらけだ。

「うわー、サンシャイン通りってこんなに人いたっけ」

人混みのなかを進みながら、智幸は辺りを見渡して再確認するような口ぶりだったので、ちょっと気になって俺は聞いた。

「君島は池袋とか遊びに来ないのか？」

「二部に来てからはバイトばかりで来なくなっちゃったな。君は？」

「同じ。ゼミの飲み会とかで何度か来たことはあるけど、暇なときは基本バイト。こうやって二人きりで遊ぶってことがあんまりなかったからいままで仕事してた」

「ヤマト男子だね」

「馬鹿にしてんのか」

「してないよ。悪くないじゃん、ヤマト男子。モテそうでさ」

「は？ モテる？」

「ほら、ちょっと前にネットで話題になったの知らない？ 佐河男子とヤマト男子って。女の子からしたら重そうな荷物をひょいひょいって運んじゃう姿……その、カッコイイと思うよ」

寝耳に水だった。作業着で荷物運んで姿がモテるだって？

まさかと思う。夏場なんて汗まみれでむしろ敬遠されるんじゃないかと不安なのに。

でも、そういえば職場で配達先の女の子と連絡先交換してそのまま結婚した人がいるって聞いたことはあるな。異性から見たら作業着で荷物運ぶ姿はいい印象として映るのだろうか。

「あ、映画館ってあそこでしょ」

智幸の視線の先にあったのは建物の壁面に張りつけられた巨大な映画広告。

俺たちは通りから曲がって映画館内の自動ドアをくぐる。さきほどまで混雑していたのが嘘のような静かなホール。通路には上映作品のポスターが張られていて智幸は俺に聞いた。

「4DXで観れる映画のタイトルってどれだっけ？」

「『トランス・フォーミング・パラダイスロスト』ってSFロボットバトル映画。ネットで事前に調べただけど、いま上映している4DX作品ってそれしかないんだよ」

地球外生命体『バグワイズ』が地球に侵攻を開始。これに対して人類は古代文明の遺産である自意識を持った乗り物『トランス』を発掘する。トランスは乗り物から戦闘ロボットに変形して、人類と共にバグワイズと戦う——そんな内容の映画だ。

4DXは体感型とあって、バトルシーンやアクション性が高い映画のみの公開なんだろう。

「ポスターはえっと、これだな」

俺が指差すと智幸はふらりと、まるで夢遊病患者のような足取りで巨大ロボが描かれたポスターに近づいた。

「……………」

細い指先でその映画のタイトルに触れていた。無言で、能面のように無表情で、ただじっと見つめている。

いきなりぼうっとした智幸の様子に俺は戸惑った。さっきまで普通に話していたのに急にどうした？

「――あ」

やっべ。もしかして智幸はこの映画にまったく興味がないんじゃないか。あいつが好きなのは恋愛モノ、なのにこれから観る映画はSFバトル……。

やっちまった！ と頭を抱えなくなった。いや、4DXでは恋愛モノはやってないとわかってた。わかっていたのだが、まさかここまで淡泊な反応されるとは思っていなかったんだ。

「あ、えっと、君島、興味ないなら4DXじゃなくなるけど別のでもいいぞ」

「え？ 別の？」

「いや、なんかポスター観てぼっとしてるから、ひょっとしてほかに観たいやつがあるのかなって」

「あ……ごめん！ 別につまらなそうにしてるとかじゃないんだ。どんな内容なのかなーって考えてちょっとね。映画ならなんでも好きだから、私」

「いいのか？」

「いいもなにも、私だって4DX楽しみなんだよ。ほら、チケット買いに行こう。ぼやぼやしていると上映しちゃうよ」

調子を取り戻した智幸の声は弾んでいた。無駄に明るく振舞っているようなわざとらしさは感じられない。無理している様子でもなかった。

俺が気かけすぎているだけか、とこれ以上言及せず、智幸は足早にチケット売り場に並んでチケット二枚を受付に頼んだ。

「六四〇〇円になります」

高っ、と驚愕して思わず声が出そうになった。

ひとり三二〇〇円。一般のチケットのおよそ二倍の料金設定。ひとり分ならまだしも、二人分払うとなるとかなり値が張っているように思える。こないだの食費はそこまでかからなかった。見返りにしてはバックが大きすぎる。

間抜けだ、俺。値段を調べることをしていなかった。

やっちまった！ といまにも頭を壁にぶつきたくなる俺の横で、智幸は嫌な顔ひとつせずピンクの折り畳み財布から一万円を取り出していた。札に描かれた福澤諭吉先輩が「女の子に全部払わせるとか、ないわー」とドン引きしているように見えた。

「き、君島。やっぱり払う。俺も払うから割り勘にしよう！」

「え、ダメだよ。それじゃあこないだのこと、返したことになるもん」

「いやでも、こないだの食材費はここまでかからなかったんだ」

「食材費だけじゃなくていろいろお世話になったから、これでプラマイゼロぐらいだよ」

「俺は大したことでないって」

「もう、ぐじぐじうるさいな。後ろに人並んでるのにここで言い争いしていると詰まらせちゃうよ」

「だけど」

「これ、一万でお願いします」

なにを言っても智幸は頑なに聞く耳を持たず、結局、智幸がその場を持った。

「すまん。マジで悪かった……。ちゃんと値段まで確認してなくて……」

「別にいいよ。今月はたくさんバイトしたからお金いっぱい貰ってるし。はいこれ、君の分のチケットと3Dメガネ。上映場所はシアター3だって。ほら、いつまでも申し訳なさそうな顔していると怒るよ。一番やだよ、楽しもうとしないのは」

「あ……ああ。わかった。すまん」俺は切り替えるように軽く両頬を叩いた。

チケットをスタッフに手渡して劇場内に入るとすでに観客はちらほらいた。座席は五割ほど埋まっている。

指定された座席は中央からやや前列で、スクリーン正面に構えた絶好の位置。智幸と並んで席に座ると、彼女は興味深そうに劇場内のあちこちに視線を送っている。

「へえ、天井にいっぱいスピーカーついてる。シートの間隔も広くて快適だ。あ、前の席になんかある……噴出口かなこれ？ いっぱい仕掛けがありそう！ シート前後左右に動くんだよね。どんな感じなんだろ。気になるね、気になるよ！」

子どもみたいに足をぱたぱた動かしてうきうき声を弾ませていたそのとき、「あ！」と智幸の目の色はプリズムに輝きだした。

スクリーンに映画の宣伝が映し出されたからだ。

全米観客動員数ナンバーワン、国際的な賞を総なめにした、そんな謳い文句から入り、次のカットでいきなりド派手なカーアクションが展開。広大な荒野をスポーツカーが土煙を巻き起こしながら突っ走って最後は崖から飛ぶ。おいしいとこどりのカットの連続に智幸はうっとりした目つきで眺めていた。

「わあ、やっぱり映画館はいいなあ！」

映画本編がまだはじまってないのに興奮は最高潮。ひょっとしたらこいつ、本編観なくても宣伝だけで満足できるんじゃないか。そう思ったらなんだかおかしくてちょっと笑った。

宣伝ムービーが一通り終わると照明が落ちてシアター内が真っ暗闇に包まれる。

いよいよ本編がはじまるかと思ったら4DXの説明ムービーだった。なるほど、4DXの座席効果を前もって味わってみようというデモンストレーションだ。

正直、4DXをなめてかかっている節はあった。シートが揺れるといってもどうせ子ども騙し程度だろう。

だから最初、揺れの衝撃に耐えられず俺の体は盛大にくの字に曲がった。

「……っ!？」

危ねっ! バランス崩してシートから落ちそうだったぞいま。浅く座ってたらこれ振り落とされてもおかしくない。

縦揺れ。横揺れ。ミキサーの中でかき回されているんじゃないかと思うぐらいよく揺れる。座席に「座っている」のではなく「乗っている」という感覚。まさにアトラクション。結構本格的じゃないか。

「ひゃん!」

智幸なんて声を上げていた。……なんつー可愛らしい声を。

その後もぐらぐらとシートは揺れ続け、落ち着いたところで説明ムービーが終わった。

俺は小声で隣に座っている智幸に話しかける。

「おい、大丈夫か? 酔ってないか?」

「へ、平気だよ。ぜんぜん、平気っ」

「本当かよ。声出して驚いてただろお前」

「わ、私じゃない! 私じゃないよ!」

絶対にこいつだ。

「4DXの座席効果ってシートが揺れるだけじゃないんだよね……?」

「まだまだ仕掛けはたくさんあるぞ。平気か?」

「へ、平気だよ! 子ども扱いしないで。ちょっと最初びっくりしちゃっただけ。もう平気。こんなの慣れちゃえばなんてことないよっ」

ぐっと胸の前で手を握って意気込む智幸。

そして、スクリーンに映し出された映画本編。

都市ひとつ覆うほど巨大戦艦が襲来し、ビーム砲による波状攻撃をしかけ蹂躪していくシーンからはじまった。

悪の侵略者『バグワイズ』対、正義の守護者『トランス』。ストーリーはシンプルな勧善懲悪ものだろう。

肝心の4DXはというと、シーンと連動していた。平和的なシーンに座席効果は特にないのだが、ひとたび戦闘シーンになると真価が発揮される。

――映画の世界の爆発と同時に劇場内でリアルに煙が発生、もくもくと立ちこめスクリーンを覆う。

――都市が敵の侵略によって焼き払われるシーンでは、こちらでも硝煙の臭いが鼻腔をついてくる。

――敵に味方のロボットが押し倒されると、ドン、と実際にシートが俺の背中を叩く。

――スピーカーからガンガンと鼓膜を刺激するサウンドに、銃弾がこちらに飛び出してくる3D映像の視覚効果。観客に緊張を与え続ける。

不意打ちみたいな仕掛けの連続だった。時折劇場に控え目な驚き声が聞こえたが、すぐに銃撃戦の激しい音響効果に飲まれた。

智幸も例外ではなかった。

「きゃっ！」

あれだけ平気だと強がっていた智幸は不意打ちじみたシートの揺れに仰天している。

俺は声にこそ出さないが揺れは中々に強く、ひじ掛けに手を置いてしっかり掴まってないと重心がぶれて不安定になる。

瞬間、俺の手にじわりと温度が伝わってきた。最初は4DXの座席効果だと思った。

違った。

智幸の手だった。

俺の手の上に、彼女の手が重なっていた。

おそらく、彼女は重心の安定をはかろうとして咄嗟にひじ掛けに手を伸ばしたんだろう。けれど、俺の手が先にあったから重なって……。

智幸の手のひらはじわりと汗ばんでいた。彼女の水分がリアルさをともなって俺の肌へと伝わる。

「ごめっ——」

智幸が慌てて手を離そうとして——

「わわっ」

バランスを崩しそうになったので、危ない、と今度は俺が彼女の手を掴まえてひじ掛けに固定させる。さっきと上と下が逆転して、彼女の手の上に俺の手が重なる。

無意識の行動だった。

重ねた手から互いの温度を交換し合っている。肌と肌を通して、そのうちバクバクの自分の鼓動すら通じて、最後には心の内まで疎通してしまいそうだと危惧した。

緊張で強張っていた智幸の手だったけど、俺が離さないようにしっかり、けれどできるだけ優しく掴んでいると次第に力が抜けていった。

スクリーン上に展開された戦闘が一区切りして落ち着いたシーンに映ったところで、俺はそっと彼女から手を離した。自分がしていることをいまになって気づいて焦った。

——ごめん。

ほとんど唇の動きだけの、智幸の音量。ハッキリとは聞こえなかったけど、たぶんそう言っている気がただけだ。

対して俺は、なにも言えなかった。

スクリーンを覗いても映画のストーリーなんてまったく頭に入ってこなかった。

ただひたすら胸の鼓動が痛かった。

「ストーリーが頭に入らなかったよ」

上映終了後。智幸も俺と同じ気持ちを抱いていたのかと思ってドキリとした。

「4DXの座席効果すごかったんだもん。本物の煙がぶわーって噴出して、シートはぐらぐら揺れちゃって！ ああ、楽しかったなあ。ストーリーに集中できなかったけど満足だ」

.....なるほど、そういうことか。

「でも、元々ストーリー性は薄いよね。わかりやすい勧善懲悪ものだったし。けどウリは脚本じゃなくてVFXの技術だね。あんな複雑なメカの変形を丁寧にCG処理できちゃうなんてすごい。CG技術じゃやっぱり邦画は太刀打ちできないのかなあ」

シアターから出て歌うように感想を口にする智幸。人差し指を指揮棒のように振って映画のポイントをまとめる仕草は上機嫌そのもの。グッズ売り場でパンフレットも買って満足そうな顔をしている。

「男の子のツボをついている作品だったよね。破壊と爆発、そして変形。もう戦闘シーンで爆発多すぎて世界救ってるんだか破壊してるんだか」

パンフレットを開きながら監督のインタビューにうんうんと頷いて感心している。このまま放って置いてもあと三十分は感想を述べていそうだ。

恋愛映画じゃなくても楽しんでくれたみたいでそれはよかったのだが、俺の意識は別のところに向いていた。

映画の終わりはすなわち、見返りを果たしたことと同義だった。

気づけば映画館の出入り口。楽しい時間の終わりを前に、俺は一度手前で足を止めたが、立ち止まっても仕方なかった。

夢と現実の境界線をまたぐように自動ドアをくぐって外に出た。

暮れなずんだ池袋の色合い。空は藍色から闇色へとグラデーションしていた。

夜の闇に負けないようにと池袋の街が発光する。チカチカと目に刺さるような電飾があちらこちらで輝いていた。

「――で、どうだった？」

急に智幸の声がよく聞こえた。遠くに飛んでいた意識が現実に戻る。

「あ、悪い。ぼうっとしてた。なんだっけ？」

「もうっ。なんでちゃんと人の話を聞いてないのかな。4DX楽しめたかなって聞いたんだけど」

「ああ、そりゃもちろん楽しかったよ。ありがとな、君島」

「よかった。見返り、これでちゃんと返せたね」

貸し借りゼロ。智幸の言い方は区切りをつけて線引きし、距離を取ったように聞こえた。

そこでぷつりと会話が途切れた。

こういうとき、どう声をかければいいのかうまい言葉が見つからなかった。

映画観の前に立ったまま、互いに言葉を失くしたように佇む。街の電子音や行き交う人々の足音が耳に響く。互いに立っている間には空白があって、街灯に照らされて伸びた影が重なることはない。

今日、智幸と過ごしてきた時間は借りた分を返すだけ。

そうだ。最初からわかっていたじゃないか。だからこれ以上一緒に時間を過ごす必要はない。

「終わり、だね」

やがて、絞り出すように智幸が呟いた。

しばらく地面に根を生やしたように不動だった智幸が、駅へと戻る人波に流されるように、靴底をコンクリから引っぺがして足先を帰途へ向けた。

智幸の歩調は行きとくらべて時間を使うようにゆったりとしていたが、途中で絶対に歩みを止めることはなく、その両足が止まったのは改札前だった。

「私、こっちの路線だから」

くるとスカートをはためかせてこちらに振り向く。楽しさと寂しさと、満足と不満足と、どっちつかずの中間にいるような微笑だった。

「ここで、お別れだね」

智幸の声は駅構内の雑踏に飲まれそうだった。

すぐ隣にある改札はこれまで見えなかった一線の暗喩みたいに見えて、くぐってしまえばもう二度と会えない気すら起こさせた。

「久しぶりにだれかと過ごした休日だったよ。4DX、観れて楽しかった」

目線を落とすが、それは一瞬。すぐに手を肩口まで上げた。

「また、ゼミで。……バイバイ」

別れの合図を切り出された俺は、

「ああ、またな」

そう、返事することしかできなかった。

俺は踵を返した。後ろ髪を引かれそうになりながらも視界から智幸を消した。

今日の智幸との時間は見返りだ。だからここで別れるのは当然で正しい。向こうだってそれを承知しているから別れを切り出したんだ。

なに、十分じゃないか。携帯を契約して映画観て充実した一日だったろ。満足、満足だろ。

これ以上の時間を求めることはまた違った意味合いを持ってしまう。だから俺はみずから離れるように一歩踏み出した。

――後悔したくなかったら自分の気持ちに嘘ついちゃダメだよ。

立ち止まった。

海のセリフが強烈に響いて俺の両足を縛りつけた。

足が帰ろうと一歩を踏み出せない。体が心に対して満足なんて嘘っぱちだと見抜いていた。

抑圧していた感情がまるでバネのように跳ね上がって全身を突き動かし、ジャケットを翻して智幸へと振り返る、その刹那で思う。もう遅いと。きっと智幸は改札をくぐってしまっている。越えられない改札、彼女との埋まらない距離。そして彼女の耽美な亜麻色の髪は有象無象の群集にのまれて見つけられないと。

――けど、いた。

智幸は佇んでいた。まるで俺の背中が消えるまで見送るように。

地面を強く蹴り上げた。コンマ数秒でも早く、智幸との距離を埋まるように。

「あのさ！」

別れたはずの俺が目の前に戻ってきて智幸はきょとんと目を丸めていた。だけど俺は気にせず、マグマのように湧き上がってくる気持ちをぶつけた。

「連れて行きたいところがあって、その、それは、サンシャイン60の展望台と一緒に行きたいんだ。だから、ちょっとのあいだ……付き合っほしい」

ときどき声を上擦りながらも、なんとか言えた。

「えっと、あの、えと」

あわあわと口をまごつかせる智幸。突然の提案に脳の処理が追いつかないのか、視線があちこちに飛ぶ。うつむいて、顔を上げて、うっすらと赤らんだ顔でまたうつむいて。かしかし、と横髪を掻く。

「い、嫌なのか!？」

これで「嫌だ」と断られたら地面に頭打ちつけて死んでやろうと思ったが、智幸はぶんぶんと髪を乱すほど首を横に振った。

「ち、違うっ。そういうわけじゃ……」

「じゃあなんだ!? 高所恐怖症か？」

「ばっ、バッカじゃないかな! そんな子どもみたいな理由じゃないよ! その、実は、私……」

智幸はうっすらと赤らんだ頬に手を当てる。

「こんなにたくさん、二人きりで異性と過ごしたことなんて、なかったから、その、だから、どうすればいいのかわからなくて……」

最初は単にはにかんでいるだけかと思ったが、やがて困り果て、揺れて、最後に智幸はどこか哀しそうにうつむく。敷いた一線を越えるかどうか、外側と内側の境界線上に立って葛藤しているように見えた。

「このまま終わるのは、なんか、物足りないって思ったんだ」内側へと手を引くように言った。

「なんつーか……楽しかったからさ」

いろんな言葉が浮かんだがどれも着飾ったように嘘っぽくて、率直に言ってしまった。

「ほら、行こうぜ」

俺が再び池袋の街へと足を出すと――智幸はついてきてくれた。彼女の顔を直視するのは気恥ずかしくてできないが、彼女との時間がまだ終わらないことに胸をくすぐられるような心地だった。

雑居ビルの区画を抜けて視界が開けると城のようにでんと構えたサンシャイン60が現われ、ビルの中に入ってそのまま高層行きのエレベーターに乗る。エレベーター内に表示された移動速度は加速度的に増していき、すぐに六十階の展望台へと到着した。

受付で入場券を買って俺と智幸は展望台内へと踏み入れた。

瞬間――ぐわっと視界がワイドに広がった。

高さ二三〇メートルの世界が、そこにあった。

「わあ!」

胸の前で手を合わせて感嘆する智幸。テテテ、と一目散にガラス窓に近寄ってのぞきこむよう

に夜と光の世界を眺める。

俺も息をのんだ。圧巻だった。

光が洪水みたいに溢れている。車のライトが大動脈みたいに流れて、池袋の街そのものが生きているみたいだった。

「あ、あっちが駅の方面なんだ。映画館はサンシャイン通りだから向こうかな。あそこらへんはさっきまで一緒に歩いていたところだよ。わあ、綺麗……素敵だなあ」

さっきまでの戸惑いはどこにいったのか、智幸はうっとりとした目つきで池袋の街を指でなぞる。今日過ごしてきた時間を思い出すかのよう。

「君島はサンシャインの展望台って来るのはじめて？」

「はじめてだよ。夜景が綺麗ってのは聞いていたから行って見たかったんだけど、なかなか機会がなかったんだよ。だって――」

くるりと亜麻色の髪をなびかせながらこちらに振り返って照れくさそうに笑った。

「ひとりじゃ、なかなかこういう雰囲気のところって来れないでしょ」

サンシャインの展望台は海の入れ知恵だった。もし時間に余裕があったら行ってみてはどうかと。

「わあ、こっちの方角はスカイツリーが見えるんだ。綺麗だなあ、すごく綺麗……」

池袋の燦然とした光に照らされる智幸の横顔。陶醉する彼女の表情は妖しい魅力があって、俺の意識は夜景よりそちらに向いた。

「ねえ、見て。ほら、綺麗だよ」

俺に教えるよう夜景のポイントを指差す智幸。うっすらとガラス窓に映る俺たち。どちらからというわけでもなく、肩が触れあいそうな距離まで近づいていた。

右の手のひらに残った彼女の感触。映画館での出来事を思い出して、鼓動が全身を震わせるくらい強く脈を打った。浮足立つような高揚感に空すら飛べそうだと錯覚しそうになる。

「綺麗な夜景。君もそう思うでしょ？」

同意を求めるような、無邪気な笑顔。漆黒の夜と無数の光に濡れる池袋の街を背負った智幸は映画のワンシーンのように映えていた。

視線は彼女に奪われて、意識はその心に釘付けになって、このままずっと時間が止まっても俺は神を恨まないだろう。

胸が締め付けられるような、でも角砂糖を舐めるような、甘さと苦しさが同居する感覚の正体に、俺はもう気づいていた。

なにも難しい話じゃなかった。

いまさらごまかす必要もなかった。

白状していい。

――俺は君島智幸が好きなのだ。

そう認めた瞬間、オセロの白と黒がひっくり返るように、俺の心象世界はがらりと変わった。これまで保留して曖昧なままだった感情の色合いがくっきりと一色に染まっていく。

大学の屋上での出来事。告白紛いと濁してきた言葉は間違いだった。あの気持ちは本物で、も

はや紛いではない。いまなら言える、告白だと。

智幸が風邪で寝込んで倒れたとき、家に訪れたのは心配だからだ。憔悴してやつれた頬を見て、好きな人のためになにか尽くしてやりたいと思ったのだ。

映画館までの時間は確かに見返りだったかもしれない。しかしもう見返りの時間は終わっている。貸しとか借りとか打算や口実のいらぬ時間。いまここで智幸と同じ空気を吸って、同じ景色を見ているこの時は――デートなんだ。

動揺はなかった。

ぼやけていた感情の輪郭がくっきりと縁取られ、心はやけに落ち着いていた。

「君島」

襟を正す。

ふわりと智幸はショートのを浮かせて、こちらに振り向く。

「君島」

二度、彼女の名前を呼ぶ。

ただ名前を読んでいるだけなのに、胸の中で溢れた気持ちが声に帯びて、滲んで、智幸に伝わっている気がした。

胸の奥から激しい欲がこみ上げてくる。一步、二歩と彼女の内側へと近づく。

周囲にはだれもいない。心を酔わすような壮大な夜景だけが広がっている。

ついてきてくれた。こうして俺の誘いに乗ってくれた。偶然とはいえず手だって握れた。性急かもしれないと思う反面、今日一日の時間を思い出して、いいんじゃないかと自分自身に言い聞かせた。

後悔したくない。

この機会を逃したら後悔すると思った。

作法も礼儀も詳しくはなかったけど自然とうまくいく気がした。だからゆっくりと彼女の肩に手で触れた。

俺の内にあるもの、俺がこれから求めようとする事、それらを智幸は直感的に察して頬を強張らせた。睫毛も唇も、髪の毛なんて一本も揺れずに固まっている。硬直したなかで唯一、視線だけが焦点を定まらず揺れていた。

怯えたように智幸は顔を伏せた。

智幸の反応は嫌がっているのかと思ったが、俺の心の声を聞いたみたいに小さく頭を振った。

「違う。違うの」

「……君島？」

「これ以上は、私じゃなくて……君が嫌になるから」

意味がわからなかった。智幸じゃなくて俺が嫌になる？

「――そっか。大学の屋上で君が言ってくれたこと、やっぱり本気でいてくれたんだ」

その一言で、凍りついて停止していた時計の針が動き出した。

ずっと一時停止されたシーンに再びカメラが回り始める。途中で止まったままのカットの続きが、唐突にカチンコが鳴って再開される。

特別な時間、が幕を開ける音がした。

「あのときはびっくりしたよ。本当にいきなりだったから。……でも、でもね、それ以上に嬉しかった」

予感があった。智幸がこれから話すことはあの日の続きだと。俺の告白を受けての返答だと。「可愛いって、一目惚れしたみたいって、そう言ってくれたこと嬉しかった。ホントは私、肩幅とか結構広いし、服装だって心の中じゃ似合っていないんじゃないかってビクビクしてて……。だから、だからね、たとえ見た目だけでも、嘘だったとしても、可愛いって思われて嬉しかったんだ。本当だよ。君の前では冷静でいたけど、もう心の中は舞い上がっちゃってさ、帰ったあとベッドにうずくまってジタバタしてたんだ」

「君島……」

「食堂でメインヒロインって言ってくれたときなんて、私のことちゃんと認められたみたいで心が躍ってたんだ。今日なんてスカート可愛いって言ってくれて、さっきは一度別れたはずなのに君が戻ってきて……夢見てるみたいだと思ったよ」

じゃあどうしてさっき俺についてくるのかどうか葛藤する必要があったんだ。迷う必要なんてないじゃないか。

「でも、でもね。君は、君のために私は……やっぱり、こんな、こんな私じゃダメなんだ」

胸が痛むのか手を当ててうな垂れる智幸。

「私は……君にまだちゃんと話してないことがあるんだ」

「話してないこと？」

「ねえ、世界構成に必要な人の最小単位って何人か知ってる？」

いきなり話が飛躍した。突拍子もないセリフに俺はなにも答えられず立ち尽くしてるだけだった。

「二人だよ。ある授業で言ってたんだ。自分と、もうひとり。その他人が自分を観測して、自分が他人を観測して、はじめて世界が成り立つんだって。つまり、自分を確立するのに必要なのは自分じゃなくて他人なんだって。自分で自分をいくら定義してもダメなんだって」

そこまで聞いても俺にはまだ智幸の気持ちすべてを理解するに到れなかった。奇妙な不安感だけがぞわぞわと足元から這い上がってくる。

「そんな哲学的で小難しい真理は知らない。自分は自分。私はそう思ってるよ。思ってるけど、他人はそう見ないかもしれない」

智幸の声は濁っていて温度が感じられなかった。今日一日過ごしてきたひだまりみたいな時間までも暗い影が差すようだった。

「……嘘ついてるわけじゃなかったんだ。騙してるつもりだってないよ。私は、私だから」

ざわざわと胸騒ぎが強くなっていく。

おかしい。手の届くところに智幸がいるのに、なぜだかどんどん距離が離れている。エスカレーターの流れに逆行しているみたいに、進んでも進んでも距離が埋まっていけない。

焦った。智幸がいつか声の届かない世界に行ってしまうようで。

「怖かったんだ。本当のこと話すの、怖かったんだ。君に失望されたくなくて。君が離れれば、

私は……。私だって、本当は私だって、君を――」

智幸は顔を上げて、でも、それでも、続きの言葉をぐっと飲み込んだ。痛みに耐えているみたいに歯を食いしばっていた。まるでそれを口にすれば罪になるとでも言わんばかりに。

だったら、俺が。

「君島、俺は――」

「三浦くん」

「君島！ 聞いてくれ！ 俺はお前を――」

「ありがとう」

息が、詰まった。

呼吸を、忘れた。

――智幸が上を向いていた。

「ごめんね」

ぽつりと、肌に落ちた滴。

冷たそうな水滴が、生ぬるい匂いとともに降りはじめた。

雨だった。

無論、展望台は屋内で、そもそも窓ガラスの向こうにある池袋にだって雨なんて降っていない

。

たったひとり、心の世界に降りしきる雨。

雨粒に濡らされたのは、俺ではない。

――智幸だ。

俺には確かに見えた。灰色の分厚い雲に覆われた世界で、智幸にだけ降りしきる冷たい五月雨が。

「……シンデレラみたいに浮ついて、なに調子に乗ってるんだろうね、私」

スカートをくしゃりと掴んで見せた表情は、不格好な微笑みだった。統一感の取れてない福笑いみたいな、切って張ったような微笑。

「――私は普通じゃないんだ」

ざあざあと雨脚が強くなっていく。全身を打ちつけるような雨に、それでも智幸はやはり微笑みを装った。

「たぶんね、神様にイタズラされちゃったんだと思う」

銃弾のように激しく降り注ぐ雨粒。どんどん笑顔のメッキがはがれてひび割れていく。無理して明るさを口元にぶら下げているのが明らかで、見ているこっちの胸がズキズキと痛んだ。

「私がいままで言ってきたことは、決して嘘じゃないよ」

胸を、その奥の奥にある人間しか持ちえない部分をぽんと叩いた。

「でもね」

声が掠れていた。

「……でも、ね」

胸に置いていた手を、ゆっくりと、かすかに震わせながら、自分の頬へと触れた。

「こんなカラダじゃダメなんだ。人並みの恋愛なんて望めないんだ。この頬も、口も、目も、鼻も、耳も、手も、足も、このカラダは――」

泣き笑いのような表情で、智幸は打ち明けた。

「男の子なんだ。カラダだけが、男の子なんだよ」

cut.9 秋宮和夫

「ぼくは文芸サークルに所属してるんだ。そこで小説書いてんだけどさ、毎度締め切り前は徹夜なんだよ。計画性がなくてね。眠気と戦いながらキーボード打鍵していると頭くらくらしめてさ、ステッキ持った妖精が見えるんだ。マジだよ、マジ。妖精に応援されながら薄れゆく意識のなか執筆して、『やっと完成した！』って喜んで……ハッと目を覚ますの。うん、夢見てたんだよね。原稿完成したのも夢の中だけだよ。実際は寝落ちして原稿落ちたよね。あとこの話、夢オチってもっとも許されないオチだよ。……次、がんばります」

cut.10 佐竹一成

「携帯アプリ開発で一発当てたい！ そう、在学中に起業できるぐらいに！ というわけで、いま絶賛開発中なのがダイエットアプリ、その名も『萌えキャラと一緒に脂肪燃焼しよしよっ☆』。形式的にはレコーディングダイエットを採用していて、その日、口にしたものを入力すると自動的にカロリーが計算されるんだ。

しかも、萌えキャラが不足しがちな栄養素を補えるメニューまで紹介してくれるんだ。『ビタミンB1を摂るには豚汁がオススメだよお兄ちゃん！』って感じ。もちろん萌えキャラの属性は数種類用意。ツンデレ、ヤンデレ、妹系などなど。

さらに！ このアプリのセールスポイントは目標体重に近づくにつれて萌えキャラがご褒美してくれるんだ。最初はデレボイス、そして次にスチル挿入、最後に……むふ、むふふっ。萌えキャラの服が（以下カット）」

cut.11 月野真美子

「メディアって聞いたらなにを思い浮かべる？ テレビ？ ラジオ？ 携帯電話？ ゲーム？ 本？ うん、どれも間違っていないよ。でも実はね、身体だってメディアなんだよ。身体を通して伝える、だから身体メディア。私は劇団に所属しててコンテンポラリーダンスをやってるんだ。どんなダンスかっていうと、こんな感じに身体を……え、よくわかんない？

言葉で説明するのは難しんだけど、なんていうかな、私は身体を通してだれも気にしないような美や価値観を伝えたいんだ。じゃあどんなものか具体的に言うと……あー、言葉にしにくい！ 知りたきゃぜひ劇場まで観に来やがってください！」

※

——これから、智幸とどう向き合えばいいんだ？

展望台で智幸が打ち明けた真実を受けて、俺は頭が真っ白になった。

これまでの智幸に関するあらゆる記憶がすべて裏返った。思考回路がぷつりぷつりと途切れて、壊れたパソコンみたいに停止していた。

結局、智幸とは展望台で別れた。俺は声をかけることも追いかけることもできなかった。

それから数日経って、時間を置いたいまでも智幸の事情をまだちゃんと飲みこめない。

心と体で性別が違う。なにかのドラマでちらっと観た程度の浅い知識だけど、自己認識にズレがある人がこの世界にいることは知っていた。それに智幸が当てはまるのか、どこまで病的なものなのか、定かではない。けれどあのときの真剣な口ぶりから、おちゃらけではないことぐらいわかる。

連日寝不足だったせいか意識はぼやけて頭が重い。ふらふらしながらも智幸の事情に当てはまるだろう図書を片っ端から手に取った。

そう、俺はいま大学の図書館にいた。

読書コーナーに設置された長机に腰をかけてそれら本を読みはじめると、これまで智幸と過ごしてきた時間が脳裏を過ぎった。

思い返せば、おかしな点はあった。

企画のプレゼンの際、真季が水着を着せようとして智幸は動揺して声高に拒否していた。あれは照れくささだけじゃなく、もっと別の気持ちが潜んでいたのだろう。

鈴木果歩がヒロイン役に抜擢されて、あいつは自分では届かない世界を見ているようにうつむいていた。

俺が見舞いに行ったとき、智幸は失神した。気を失うなんて大げさだと考えていたが、あれはいままで俺に見せなくなかった部分を見られそうになってパニックを起こしたんだろう。

人の器に同居する矛盾した二つの部分。ココロはオンナで、カラダはオトコ。

それならこれまでの言動に合点がいく。あいつが展望台で俺のしようとしたことに謝ったのだから……そういうことだ。

でも、待てよ。じゃあ、こないだ一緒に池袋に行った智幸はどっちなんだ。心は女の子なんだろう。なら、だれがなんと言おうと女でいいじゃないか。いや、実際に体はそうじゃない。映画館で握った手だって、桜色の唇だって。いやいや、ちゃんと内面を見てから物を言えよ俺。智幸の振る舞いは女の子じゃないか。ゆるキャラに興奮している様や夜景見て爛々と輝かせる目。そうだよ、あの池袋の時間は女の子である智幸と一緒にいたんだ。いやいやいや、その理屈は強引だろ。じゃあ体の部分は気にしなくていいのかよ。無視か。無視。いやいやいやいや、さっきからごちゃごちゃうるせえよ。いやいやいやいやいや、事実だろ。逃げてんじゃねえよ死ね。うるせえお前が死ね。いやいやいやいやいやいやいや、いやいやいやいやいやいやいや——

「……落ち着けよ、俺」

混乱していた。

ずっとだ。智幸と別れてからずっと非生産的な思考が空回りして、糸の乱れたリールみたいにぐちゃぐちゃになっている。

目を閉じて智幸の姿を浮かべれば、淡い桜色の口紅でめかした端正な顔が真っ先に浮かぶ。デートのときの智幸の服装も、可愛らしく彩られた部屋も、それらを考えたら本当の自分は女の子、だからそうありたいという意志の表れはわかる、けど……。

なにかあいつに関して少しでも知ればと、今日はバイトがなかったからこうして専門書を読んでいるが、だんだんまどろんで文字が頭に入ってこなくなる。寝不足のせい、それとも現実をまだ受け止められない俺の狭量のせい。

ポケットに手を突っ込むと硬い感触が指先を触れた。

携帯電話。智幸が選んでくれた最新機種。

表示された番号をタッチすれば智幸に電話がかかる。

たったそれだけのことが、できない。

あいつとの向き合い方がわからない。

智幸への気持ち、胸の奥の奥にくすぶらせているモノは、あるにはある。

けれど、智幸の真実を受けて盤面が揺らぎ、オセロの白黒がひっきりなしに変わるように落ち着かない。

俺はあいつのどの部分に惹かれたことになる？

俺が想うのは？

あいつの、あいつのどこを――

「……………」

智幸に対しての心の置き所が見えない。抱いた気持ちはあるのに、着地点が見えない。

「……どうすりゃいいんだ」

そう、呟くしかできない。

そのときだった。カツカツとヒールを鳴らす音が聞こえた。静寂な図書館にやけに響いていたが、ふと鳴り止んで背後に人の気配を感じた。

気になって振り向くと――

「あ」

「あ」

ちょっと驚いたように声を漏らしたのは俺と、彼女だ。

透き通るような肌色の美脚を見せつけるかのような、大胆なホットパンツ。砂金を振りまくかのような派手な金髪。一目見れば忘れないほどの美人。目の前にいたのは一部メディア学科所属――鈴木果歩だった。

「あれ、あなた確かあ、えっとお……？」

一方で鈴木果歩はうーんと指先を頭に当てて考え込む。やがて思い出したのか目を電球のように光らせた。

「あ、思い出したあ！ 学生プロレスのレスラーさんだ！」

「違えよ。どっから学生プロレスでできた」

「じゃあ、学生プロレスのレフリーさん？」

「学生プロレスにこだわりすぎだ！ 俺は三浦九。君島智幸と一緒にゼミの」

「あっ！ そうだそうだ思い出した！ ごっめーん。果歩、あんまり興味ないとすぐ忘れちゃうから」

こいつ、いまさらりと俺のこと興味ないって言ったよな。

やっぱりこの手のタイプは苦手だ。なにかとペースを乱されて調子が狂う。

「謝るからむっとしないで。ごめんごめん。ちょっと前に智幸と一緒にご飯してた二部の人だよねー。こんなところで会うなんて偶然だあ」

完全に思い出したと鈴木果歩は手を叩いたが、その音がうるさくて通りがかった司書が「しっ」と人差し指を口に当てて注意する。一応ここは館内でも私語ありのスペースだけど、鈴木果歩は度が過ぎていた。

鈴木果歩がぺろっと舌を出して司書に頭を下げている。なにやってんだよ、この人は。

「あんた、図書館になにしにきたんだよ」

「え、課題の資料集めだよー。締め切りはまだ先だけど、早め早めにやっておかないとあとで大変だからあ」

注意されて反省したのか口に手を当てて囁く。やたら彼女の顔が近い。鉛筆でも乗せられそうなつけ睫毛が目につく。

「キミも課題？ なにを調べてるのー」

鈴木果歩は机に散らばった図書のタイトルに視線を送って、整った細眉をぴくりとつり上げた。アイメイクでぱっちり開いた目をさらに大きく開いて俺の顔を一瞥、そして再び図書を見つめた。

少しの沈黙のあと――なにか察したように妖しく笑った。

「そういうこと」

鈴木果歩がわざわざ隣のイスを引いて座った。まるで俺に興味を抱いたように、ぱっちりメイクした小顔をこちらに向けてくる。

「――智幸のこと、気づいてなかったんだ」

ドキリとした。心臓が胸骨を突き破っていきそうだった。

雲の上を歩くようなほわほわとした人だと思っていた鈴木果歩が、察しのいい一面を持ち合わせて驚いた。

この人は智幸の事情を知っている？ いや、昨年度一緒にゼミなら知っていてもおかしくないのか。

「なんで、俺が智幸のこと気づいたってわかるんだ……」

「別に勘がいいとかじゃないよー。果歩もお、気づいたとき似たようなことしたから」

鈴木果歩も同じことをした？ この人が俺と同じ？

意外だ。唯我独尊とはいかないまでも、自分のペースで何事も進めそうな気質の鈴木果歩が他

人を気にかけた？

興味を持ったからか？

智幸の事情を聞けば気にはなると思うが、鈴木果歩は他人に目を向ける人間とは思っていなかったのに……。

それとも去年、注意を引くような事件でも起きたのだろうか。

「昨年度、智幸になにかあったのか……？」

不安げに聞くが、鈴木果歩は鮮やかに塗られたマネキュアに息をかけながら平然としていた。

「別にー。特別ななにかがあったわけじゃないよ。まあ、智幸の事情を知ったからといってフツーといえばフツー。なんだけど……」

黄金の髪をかき上げるとやや神妙な面持ちの鈴木果歩の横顔がのぞいた。

「騙されてたってのは違うんだらうけど、全員じゃないけど、そういう事情知らない人たちはすっかり女の子だと思っていたからびっくりはしたよ」

「智幸みずから打ち明けたのか？」

「んー、というよりい、仕方なくって感じ。基本全員参加のゼミ合宿になぜか智幸キョヒって、なんでなんでってみんな執拗に聞いたからなんだよね。そこでしぶしぶ教えてくれたってわけ。まあ、それ聞いたからって大きな変化があったわけじゃないよ。ホント、フツー。けど、ちょっとねー。フツーなんだけど、ほら、フツーにしようという気持ちがなんかフツーじゃないってうか、構えてるってことじゃん。智幸も智幸でそれからより距離を取るようになった感じ。果歩はあ、あんま気にしてなかったけどー」

面白くない話だと思ったのか、鈴木果歩はそこで言葉打ち切ってマネキュアの色合いをうっとり眺めはじめる。

鈴木果歩の話聞きながら、俺は以前智幸から聞いた言葉をぼんやりと思い出していた。

——時々、大学辞めて帰ろうかなって気持ちが揺らぐんだけどね。

昨年度の智幸は自分の事情を明かして、大学に通うことにイスとイスの狭間に座っているような居心地の悪さみたいなものがあったのだろうか。

転部の一番の理由は経済的な事情のような感じで話していた。それは間違いないのだけれど、親に援助を打ち切られてぐらぐら揺れているときに、ちょっとした、でも気持ちにちくりと刺さる人間関係だって、転部の割合を占めていたんじゃないだろうか。

鈴木果歩は気にしてないというが、ほかの一部の連中はフツーを装いながらもどこかでどう向き合えばいいのか探っていたのだろうか。

俺は？

ふいに降ってきた疑問。俺の場合は智幸とどう向き合う？

ほかの連中とは違う。ただのゼミ友達という範疇を超えて違う場所に向かおうとした俺はどうすればいいんだ？

「キミさ」

鈴木果歩が頬杖をついてこちらをじっと見据えた。目元が寝不足で黒ずみ、満足に食事をとらずやつれた俺の顔を凝視して言った。

「――がっかりしたのかな」

胸を撃たれたかのようなショックが全身を貫いた。

「ち、違っ……！ 俺はっ」

「でもフツーじゃん、それ」

たとえ取り繕いだと責められても、それは、それだけは智幸に失礼に当たると反論しようとしたのに、鈴木果歩は率直で飾りげなく、平然と諭すようだった。

「果歩にはね、すごく素敵な彼氏がいるの」

「は？ 彼氏？」

いきなり話が飛んだ。突拍子のなさに戸惑う。

「背が高くてえ、スタイル抜群で、小栗旬にチョー似てるイケメンなの！ だれが見てもカッコイイカッコイイって言うほど！」

「はあ」

「果歩とデートするときなんてえ、いちいち新しい服買って、モデルが通うような美容院で髪切ってもらったって。『オレは彼氏として果歩とつり合いたい』そんなこと言って気合い入りまくり。チョー可愛いでしょ！」

「あの、えっと、ノロケ話……？」

「しかもチョー優しいんだよ。誕生日には果歩が好きなスヌーピーのオルゴール買ってくれたの！ うふふっ。いい歳した男がひとりでスヌーピーショップうろうろ歩き回って悩んで買ったんだって。やあんもう、想像しただけですごく好き！ 顔がよくてえ、果歩の好きなモノを真剣に悩んでプレゼントしてくれてえ、しかもいまから結婚資金貯めるとか意気込んじゃってるの。照れちゃうなあ、うふふっ」

「えっと鈴木さん！ もうノロケ話はわかったから！ 俺たちが話してしたのそういうことじゃなくてっ」

「――果歩が好きなのって外見もなんだよ」

装飾も欺瞞もなく、鈴木果歩はそう言い切った。

「外見とか一、見栄えとか一、もっと言えば手に触れられる部分とか一、そういうの重要視するのって、特別じゃないことですよ。フツーにカッコイイ彼氏友達に見せたいし、ほかにも、いろいろあるじゃん。だからもし、もしだけど、果歩の彼氏の体が彼じゃないと知ったら……やっぱり果歩だってがっかりすると思うよ」

つい、黙ってしまった。

なんて言葉を返せばいいのかわからなかった。

ガイケン、カオ、カラダ――視界に映るモノは愛おしい。そう鈴木果歩は言いきっているのだ。

それが正しいかどうかはわからないが、暗い森で彷徨っている俺とは違って鈴木果歩の双眸に迷いはなかった。

「だから、フツーなんじゃない」

鈴木果歩の声がやけに頭に響いた。

「がっかりしたって気持ちがある人は、果歩はフツーなんだと思うよ」

普通。

なぜだ。あれほど望んでいたものなのに、いま普通という証明書を拾っていいと言われても、胸が苦しいだけだ。

「こんなことを平気で言っちゃうからダメなんだろうね」

鈴木果歩は苦笑いしていた。

「こんな果歩だから智幸と仲良くなれなかったのかなあー」

どこか物憂げの鈴木果歩は、皮肉ではなく本当に残念がっているように見えた。

お互い、しばらく無言が続いた。

どこからか図書のページをめくる乾いた音が聞こえた、そのときだった。

「――それでも好きでいられるかな」

不意に漏らした鈴木果歩の言葉に、なにか突きつけられているように感じて俺はびくりとなった。

だけど、鈴木果歩は図書館の天井をぼんやりと見上げ、そのセリフは俺個人に向けられただけでなく、智幸の事情を鈴木果歩自身の場合に当てはめて自問しているようにも見えるし、世界のどこかにいるだれかに投げかけているようにも思えた。

しばらく鈴木果歩は考え込むように天井を眺めてから、言った。

「果歩ね、智幸に感心したことがあるんだー」

「感心？」

「綺麗でしょ、智幸。ホント綺麗。智幸さ、クリームなに使ってるか知ってる？ 前にちょっと聞いたんだけど、ドゥラメールだよ、ドゥラメール！ もーめっちゃ高いんだよ！ 果歩だって使いたいよお！ あれ、わかってない……？ 果歩の言ってること理解できる？ わかんないの！？ もうこれだから男の子は！？」

ぐっと拳を握ってまくしたてるように語る鈴木果歩。よくわからないがその勢いに気圧されて俺は「お、おう……」としか反応できない。

「あの子、肌の気遣いハンパないって見てればわかるからね！ それで果歩、感心したもん。それに比べてさあ、ときどきキャンパスにもいるんだよねえ、ろくに化粧もしてない女一。忙しいって言うならせめて眉の処理ぐらいしといてよって話だよ。あいつら女捨ててるでしょ。そういうズボラな子と智幸を比較したら、いや比較とかじゃなくて、私がもう感心しちゃってるなら――」

言いながら「あれ」と自分自身で疑問を抱きながらも、なにかおぼろげな答えを掴んだかのような顔をした。

「果歩にとって、それって――」

声のつまみを回して大きなボリュームで話していた鈴木果歩に、司書が鬼みみたいな形相で睨みをきかせる。「ご、ごめんなさい」なんて鈴木果歩がぺこぺこ頭を下げていた。

俺は、鈴木果歩の言葉の意味を考えていた。

目に見える世界に注視するというのは極端なんだろうけど、でも、だからこそ見えるものがある

るのだろうか。

以前食堂で智幸と鈴木果歩が鉢合わせたシーンを思い出した。映像に出演するヒロインとして服装が似合うかどうか聞く鈴木果歩。見える世界を悪く捉えて、一面的にカメラを固定してしまえば、あのシーンは自分の美貌を見せつけている意地悪な場面に映るかもしれない。

けれど見方を変えれば――鈴木果歩は智幸を自分と同じ友達だと見ていたから、だからああやって近寄ったとも見えなくないだろうか。

ほら、よくあるじゃないか。女の子同士服を買いに行って、この服似合ってるとか、似合っていないとか、仲良さげにじゃれあう光景。

目に見える世界なんて見えて当然、知ってて普通。そうやって俺はどっかで軽んじていなかったか？

さっき鈴木果歩と出会ったとき、鈴木果歩は他人を気にする気質じゃないとか勝手に測っていなかったか？ 鈴木果歩の生い立ちも、学生生活も、人柄だってたいして知らないくせに。

俺ははき違えていたんじゃないか。視野を固定して、勝手にそいつのすべて見た気になって、そいつの一面だけですべて判断していなかったか？

いままであらゆることを、ちゃんと見ようとしてこなかったんじゃないか？

連鎖的に思い出したのは、阿藤との食堂でのやりとりだった。

いまでも阿藤の物言いは嫌気が差すし、ヘラヘラした態度も好きにはなれない。仲良くなる気なんてさらさらない。でも、一步後ろに引いて、視野をワイドにすればまた違った光景が見えるのだろうか？ 第三者の立場に立てば、ただ声をかけただけって見方になる？ じゃあなんだ。俺が馬鹿にされていると感じたのは？

ひょっとしたら俺を馬鹿にしてんのは――

「あーあ、司書さんに目つけられちゃった。果歩、ここにいるとそのうち司書さんにつまみ出されちゃうからもう行くね」

鈴木果歩はイスから立ち上がって、

「それでも、好きでいられるのかな」

ぼんやりとさっきのセリフをもう一度繰り返していた。自分に問いかけているのか、他人に問いかけているのか、よくわからない感じで。

その日、広告論の授業がいっさい頭のなかに入ってこなかった。

まどろんでいた。強烈な眠気が襲っても、もやもやとした気持ちが快眠を許さなかった。

意識が覚醒したのは、同じ授業を受けていた真季が俺の肩を叩いてくれたからだ。

「九ちゃんなにぼけっとしてんのさ。もう授業は終わってるよ」

授業終了のチャイムすら気づかなかった。

辺りを見渡せば、学生たちがカバンをぞろぞろと退室している。俺ひとりだけノートを広げたまま席に座っていた。

「ちゃんと授業聞いてたの……って、うわ、ノート真っ白じゃん。広告論試験厳しいって話だよ。ぼやぼやしてたら単位とれないぞー」

やれやれと、真季はどこぞの外国人みたいに大げさに肩をすくめてた。

「HEY、ボーイ。ノートを取り忘れるなんて困ったちゃんだ。そこで君に朗報さ。本日紹介するのはこれ、真季ちゃん広告論ノート！ ビューティフルガール真季ちゃんのノートを、いまならなんと、なんとっ、学食十年分で手に入れられるんだぜ！ HAHHAHA！ さあさあ、限定一名様の早いもの勝ちだ。欲しかったらいますぐTELだ！」

「学食十年分はぼったくりすぎだ」

「いまならオプションで海ちゃんがタンブラーに入れてくれたアイスコーヒーも付けちゃうぜ！」

「海に会いにいけばいつでも飲ませてくれる」

「おうおう、ダンナあ。この真季ちゃんの好意を無視するってのかい」

「お前のキャラ設定がぶれすぎててわからねえよ」

カバンにノートをしまっただけで帰り支度をしていると、真季が顔をうかがってくる。

「……なんだよ。人の顔をジロジロと」

「いやー、真面目な九ちゃんがノートとらないなんて珍しいなーと思って。そういやこないだの撮影のときもぼうっとして様子おかしかったし、だいじょーぶ？ 体調悪いの？」

こないだの撮影というのは、秋宮、佐竹、月野の三人をまとめて撮ったときだ。

あのときの俺は、傍から見れば心ここにあらずといった感じだったのだろう。細かなミスを連発しただけでなく、なにを撮っても納得のいく画に仕上がらなくてリテイクを何度も重ねた。

被写体の聞き役として機能していた智幸がいなかったのも、うまくいかない一因だったかもしれない。

そう、智幸は撮影に参加しなかった。

本来なら智幸もそこで撮ってクランクアップの予定だったが別日になった。

撮影不参加の連絡は事前にメールでもらっていた。『本日の撮影に参加できません。ごめんなさい』と。

詳しい理由は聞けなかった。

欠席した智幸の身を心配している自分と、正直、あいつの撮影が順延してほっとしている自分がいた。

真季は智幸の様子を気にしていた。「また体調崩してるのかな」なんて。

真季は知らないのだ、俺と智幸が池袋に遊びに行ったことを。もし知っていたなら、その日の様子を再現実況しろと詰め寄ってきたはずだ。

海の配慮だろう。俺と智幸がもしうまくいかなかったら——そういうことを見越して真季に話を広げなかったのだ。

俺と智幸が遊びにいくなんてとびっきりのネタをよく黙っていられたと思う。本当にあいつは気配りのできるやつだ。

海だって俺たちの結果がどうなったのか気になっているんだろうけど、無理に聞きだそうとし

なかった。撮影でミスばかりしていた俺を見て、海はなにか察したように帰り際「話したくなったら、言って」と気持ちを整理する時間をくれた。その優しさがありがたくて、でもなにも話せなくて申し訳なかった。

「ねえ、九ちゃんなにかあった？」

真季の鮮やかな瞳に、俺の虚ろな瞳が投影された。

「……なんでもねえよ」

「なんでもないことないでしょ。顔色、悪いよ。ほら、なんかあったならこの真季ちゃんが相談に乗ってやるのだけ。この海ちゃんが淹れてくれたアイスコーヒーを飲みながらともに語ろうではないか、兄弟」

そう言って、ごくごくと勢いよくタンブラーのアイスコーヒーを飲む真季。

……どうする。

真季に智幸の事情を相談すれば少しでもいい方向に事が運ぶのだろうか。五里霧中の状態に進むべき光は射すだろうか。

「真季は――」

言いかけて、しかし気の引ける思いがストッパーとなって口をつぐませた。

智幸がずっと抱えてきた問題を、俺が勝手に喋っていいのだろうか。打ち明けるにしても、まず智幸みずから話したいんじゃないだろうか。

どうする。どうすればいい。

相談したほうがいいんじゃないかと思う反面、易々と話してはいけない気もする。板挟みになって頭の中がこんがらがる。俺はどう言っているかわからず、結局、直球なのか変化球なのかよくわからないおかしな言い方をしてしまった。

「真季はさ、海が実は女の子だったらどうする？」

「ぶ――――っ！」

真季が盛大に吹き出した。九十年代のギャグアニメさながらアイスコーヒーが霧状になって俺の顔面に吹きつける。

「おい汚ねえなっ、飛ばすなよ！」

「九ちゃんの変なこと聞くからいけないでしょ！ さすがに飲んでいたコーヒー吹くわ！ なに考えてるのもう！」

「うっ……、ああ悪かったよ！ きのうそんな話がテレビでやってたんだ。それだけだっ。じゃあな！」

俺はカバンを背負って教室から出ていこうとして、けれど真季が俺の肩に手を置いた。

「ちょい待ち！」

振り向くと真季の目の色は真剣だった。

「一応、考えるから。あたしの好きなラジオのパーソナリティーは荒唐無稽な質問だってちゃんと考えて答えるもん。だからちょい待ってて」

真季は浅く目を閉じて、眉根を寄せて腕を組む。うーんと唸り、もし海がそういう状況になったらと想像しているように見えた。

しばしの熟考後、目を開けた真季は張り詰めた表情で言った。

「海ちゃん、実は尻フェチなんだよ」

「ぶ————っ！」

今度は俺が盛大に吹いた。げほげほとむせ返る。

「おい！ お前こそなに言ってんだ」

「前にね、その手のDVDを海ちゃんの部屋で見つけた。うん、フェチ見つけたりって感じだったよ」

「ふざけてんのか」

「ふざけてないよ。そっかー、男の子だなーって思ったよ」

「なんで海の性癖がさっきの質問に答えることになってんだ。てか俺すら初耳だったわあいつのフェチ。真季は一体なにが言いたいんだよ」

「それでも恋はしないんだ」

きっぱりと真季は言い切った。

「海ちゃんはそういうDVD観ても、えっろい格好の壇蜜見ても、佐々木希の悩殺ショットでも、それでも恋はしない。恋は、あたしにだけしてくれる」

恥ずかしがるどころか両手を腰に当ててえっへんと誇らしげだ。

「デートしているとき、ひょんなことがきっかけでこんなこと言ってくれたことがあった。それはカッコつけかもしれないけど、でも言ってくれたんだ。肉体的なものに抱く感情は恋じゃなくて興味でしかない、って」

真季は胸を、その奥にある人ならでの核をぼんと叩いた。

「あたしだって海ちゃんと同じだよ。同じなんだ。海ちゃんがなんであつても、関係ないよ」

真季の視線はこの世界に形として現れない部分に向いているようだった。

綺麗な答えだとは思う。だからといっていちいち文句をつけるつもりもない。

ただ、そう割り切れる自信をどうして持ち合わせているのかわからない。

それで真季は納得できるのか。割り切れるのか。

「……それで事実を受け入れられるのか？ 恋人がそうであったとしても、真季は心の決着をつけられるのか？」

「あたしの言うこと信じられない？」

真季の心の着地点に、俺はそう簡単に着地できない。これは単に俺が逃げているだけなのだろうか。考えているフリして、実際には智幸の真実に目を瞑って現実逃避しているだけなのだろうか。

「まあ、そうだね。それはやっぱり、その場面に直面した人間だけが説得力のある答えを出せるんだろうね。直面してないあたしがなにを言っても、きっと嘘っぽくなっちゃうんだろうな。だからわきまえていうなら、ちっぽけな想像だけで状況設定した、いまの段階で言えるあたしの答えってことになるね。言い方ややこしー」

真季は腕を組んでもう一度考えるようにあごを引いた。二度三度うんうんと頷いてから、「これってさ」と人差し指をピンと立てる。なんとなくその仕草が海っぽかった。

「オンナとかオトコとか無理に枠に当てはめて考えるんじゃないくて、単純に好きかどうか、もっと言えばシンプルに一緒にいたいかで考えればいいのかな。だったやっぱりそう、、あたしが海ちゃんに抱く気持ちは変わらないよ。――だってさ、好きなんだもん」

あっけらかんとした顔つきで言い切った。

「好きになっちゃったんだからしゃーなしだ。そうそう、好きなんだもん。うひょー、自分で言っただけ引くぐらいラブがマックスじゃん。アタシの名前はマキマックス。海ちゃん健康と恋愛を守ります」

どこぞのキャラクターのモノマネをして笑う真季は陽光を浴びるひまわりみたいだった。俺の目がくらむほど眩しかった。眩しすぎて、目を瞑らないと自分の心が焼かれそうなほどだった。

「あ、ちなみにDVDですが、海ちゃんはTHUTAYAでレンタル派です」

「あいつのキャラが崩壊する！」

「アタシはマキマックス。海ちゃん健康と恋愛を守ります」

「プライバシーを守ってやれ！」

「ニシシ。なーんてね」

おどけたようにカラカラ笑う。

そこでわかった。真季は沈んだ俺を笑わせようとしていることに。海のフェチがどこまで本気でどこまで冗談なのかはわからないけど、俺を元気づけるように明るく笑っていたのは間違いなかった。

「九のダンナあ。仕方ねえからあちきがタダで広告論のノート貸してやるでげす」

「だからもうキャラ設定がよくわかんねえよ。……ノート、助かる」

「うむ。助けてやったでげす」

「……真季は、大人だな。ずっと」

きょとんと目を丸める真季。ぱちぱちと瞬きしたあと、目を細めて俺が偽物なんじゃないかと懐疑的に瞳が染まった。

「九ちゃんがあたしを褒めるなんてはじめてだ……やっぱりおかしいままだ。しっかりしてよ。もうすぐトモちんの撮影なんだから」

そうだ。とびっきり大事な撮影があとワンカット残ってる。

智幸と向き合う日は、もう目の前に迫っているのだ。

※

夢を見ていた。

薄暗い世界で、なぜか俺はカメラの前に立っていた。着ている服装はバイトの服装で、この格

好で撮られると思ったら無性に恥ずかしくなった。

ぽつぽつと雨が降りはじめた。雨が降って来たんだから撮影は中止だと思っていたが、濡れていたのは俺だけだった。

目の前にいるだれかがカメラをセッティングしていた。暗がりのせいでカメラマンの顔がよく見えない。黒いシルエットみたいにどこのだれだか判別できない。

ソイツはカメラを回しながら俺に質問した。

――君島智幸とは同じゼミ？

質問の意図がよくわからなかったが、一応イエスと答えてやった。

ひとつ答えると、調子に乗ったのかカメラマンは次々と質問をぶつけてきた。君島智幸は何歳？ 君島智幸の趣味は？ 君島智幸の好きな食べ物は？ 君島智幸はどのような高校生活を送ってきた？ 君島智幸は家庭でどのように扱われていた？ 君島智幸は家族からどう見られている？

お前は君島智幸をどう見ている？ 君島智幸のなにを知っている？ なにも知らないんじゃないか？ どういう関係を望んでいるんだよ？ 悩んでるフリして実際はただ現実逃避してるだけだろ？ あいつのカラダがどうなってるか知ってるだろ？

「黙れよ」

やかましかった。

無神経な質問をぶつけられて腹立たしかった。しかもなにが苛立つって、ソイツはへらへら笑いながら聞いてくるのだ。こっちを馬鹿にしてる。

どこのどいつだと思ってズカズカ近づいてソイツの正体を見極めてやった。

俺だった。

ぎょっとした。父親でも、母親でも、中学の知り合いでも、高校の知り合いでも、阿藤でも、鈴木果歩でも、海でも、真季でも、智幸でも、ほかの二部生でもない。俺だ。私服姿の俺。

ほかのだれでもない。俺が俺のことを嘲笑していた。

強く、拳を握った。眼前の私服姿の俺をぶん殴ってやろうと振りかぶった。

――君島智幸のこと好きだっていうなら、どこに惚れたんだ？

殴れなかった。

ヤツの質問が俺の右手を金縛りみたいに停止させた。

すぐに返答ができなかったのだ。

「――あ」

目が覚めた。

気分是最悪だった。寝汗をびっしょり掻いていて、口内は粘っこい唾液で満たされていた。洗面所で顔を洗ってうがいをしても気持ち悪さが拭えない。

鏡で顔を見ると頬がこけていてひどい顔をしていた。

胃がぐるぐる回っている。気分が悪い。吐きそうだ。

目線を横に滑らして壁にかかったカレンダーのメモ書きを見て、今日一日の予定を確認する。

今晚は智幸の撮影だ。

ああ。結局、気持ちが散らかったままこの日を迎えてしまった。

どんな顔をしてあいつに会えばいいのか、いまだはっきりしていない。

俺はあいつをどう見る？

俺が想うのは――

※

最後の出演者、君島智幸の撮影。

撮影場所は創始者の銅像前。指定したのは俺だ。

ここで智幸と出会ったとき、夜桜に囲まれて儚げに立つ姿が印象的だったから選んだ。残念なのはすでに桜の花が散ってしまったことだけど、こればかりは仕方がない。

六月特有のじめじめと湿気を含んだ空気は肌にまとわりついて不快だった。

月明かりは分厚い雲に遮られている。微妙な天候ではあったが、雨は降らなさそうなので決行した。

真季と海、そして俺は撮影準備に取り掛かる。

肝心の智幸はというと、まだ現場に着いていなかった。撮影開始予定時間は午後九時三十分で、いまはまだ十分前だから遅刻というわけではないけれど……。

どうにも不安だ。今日に限って夜の闇を濃く感じる。

二部の授業はすでに閉講し、周りに学生はおらず静寂だけが漂っている。まるで黒い海に浮かんでいるみたいだ。これがもし真季と海がおらず、ひとりだったら足元をすくわれて飲み込まれるような不気味さがあった。

結局、あの展望台の一件から智幸とは会えないままだった。

最後に見たあいつの表情は哀しい微笑で、それがずっと網膜に焼きついたまま、時間が止まってしまっているかのような毎日を送っていた。

智幸はカメラの前でなにを話すのだろうか。

あいつの事情を知ったいまだからこそ思うが、この自分を語る撮影というのは、ひょっとしたら智幸にとって酷なんじゃないだろうか。

一度は撮影を打ち切ってしまうのもアリかと考えたが、それはある意味で智幸の居場所を認めていないことと同義だ。これは二部メディア学科全員が参加して完成する映像。智幸の出演は不可欠。

言いたくないことは言わなくていい。無理する必要はない。撮影に入る前にそれだけは言っておく必要があるだろう。

ほかに問題があるならば――

自分の手を見つめる。

この手で智幸を、智幸の部分を、きちんと撮ってやりたいと思う。だけど同時に不安もある。俺は智幸を撮れるのだろうか。

ちゃんと、あいつの心を切り取って映し出してやれるだろうか。不安がぞわぞわと胸の内に広がっていて、プレッシャーで胃が締め付けられて――

「九ちゃんッ！」

わっ、と大きな声量が塊となってぶつかってきた。意識が目を覚ます。

気づけば、頬を膨らませて怒る真季が目の前にいた。

「もうっ！ さっきからずっと準備できたよって呼んでたんだよ！」

「す、すまん」

「正確にはずっとじゃなくてずーうっとだからね。アメトークみたいに伸ばし棒二本も付けちゃうレベルでの連呼だよ。もうこれから九ちゃんって呼びたいぐらいだよ。いっそきゅうりのキューちゃんって呼んじゃうぞ」

「すまん」

「すまんって……。そこいつもならツッコむでしょうよ。らしくないなあ、もう。マジでこないだから変だよ九ちゃん。いよいよラストカットだよ。トモちんの撮影なんだよ。しゃんとしてよ」

真季の軽口にも対応できないほど、どうやら俺の神経はすり減っているらしい。

今朝見た不快な夢が脳にこびりついている。いまも俺はどこかで怯えている。周囲の暗闇に紛れてひっそりアイツがカメラを回して、俺の一挙一動を撮って、性質の悪いマスコミみたいに悪辣な質問をぶつけてくるのではないかと。

「トモちんまだかな……。早くこないかな」

真季は唇をとがらせてぶつくさ独り言を漏らしてた。

「いつもなら十分前にはもう現場入りしてたのに、今日に限ってまだきてないなんて……。最近のトモちんもなんか変なんだよな。あたしと一緒にの授業欠席してるし、メールもろくに返ってこないし。なんかあったのかな……」

真季の独り言で俺に質問してきたわけじゃないのに、なんだかばつが悪くなってふいに目をそらしてしまった。その一瞬の動作を真季は見逃さなかった。

「九ちゃんなにか知ってる……？」

智幸が授業を休みがちになっているのは知らなかった。ただ、なにかあったと聞かれれば心当たりは存分にある。

「九ちゃんも変で、トモちんもなんか様子の変で……。あれ、そうだ、そうだよ。二人ともなんか変だ。これって無関係なの？ 無関係じゃないよね？」

こういうときの真季は目敏かった。こちらに詰め寄って「ねえどうなの」と聞いてくるが、なんて答えればいいかわからない。

「トモちんが前の撮影に不参加だったのも、九ちゃんがどっか上の空なのも、同じぐらいのタイミングで……。なにか知ってるんでしょ九ちゃん？ そうだ、ぜったいなにか知ってる」

「……………」

俺の沈黙はある意味で肯定しているようなものだった。

「なんでダンマリなのさ。なんで話せないのさ！ マジでトモチンとなにかあったの？ 話してよ九ちゃん。あたしちゃんと聞くからさ、ねえ、ねえってばっ」

真季が俺の両肩を掴まえて前後にぐらぐら揺らす。ぐるぐる目が回って気分が悪くなる。

「真季」

助け舟を出したのは海だ。真季を制止させてくれた。

「そんな無理やり聞こうとしちゃダメだよ。九だって言いたくないことがあるんだ」

「だけどひとりですっとずーうっと抱え込むのもよくないでしょ。話してくれれば解決することだってあるかもじゃん。思い詰めたってどうしようもないでしょ」

「……なるほど、確かに、一理ある。真季の意見も間違いとは言えない。わかった。じゃあ止めない。ぐらぐら揺らしてどうぞ」

「まかせろ！ うおりゃあああっ！」

「助けてくれねえのかよ海っ！ 真季もやめろこのバカっ！」

俺は真季の手を乱暴に払う。揺らせば気持ち全部吐き出すとでも思ってたのかこいつは。壊れた自動販売機じゃねえぞ。

「なに考えてんだ真季！」

「心配してんだ！」

俺の芯を揺さぶるように語気を強める。両足をしっかりと地に踏みしめ、頼っていいと言わんばかりにぽんと胸に手を当てていた。

「あたしはただ心配なだけだよ。こないだから九ちゃんの調子がおかしくて、時間が経てば復活するかと思ったけどそうじゃなくて……友達元気ない姿見るのが嫌なんだ。不安なんだよ。今日、いつもの楽しいゼミと雰囲気違うもん。なんだかボタンが掛け違えたみたいにズレたって、それでそのズレがどんどん大きくなっていっているような気がして……とにかくいまの感じはダメな気がして、ものすごくまずい気がして……」

真季には珍しく声がしょげていた。俺の胸の内に蠢く不安が伝染したように真季は目尻を下げた。いつもひだまりみたいに明るい真季に翳りが差しているなんてめったにないことだ。

困った。撮影前に沈んだ空気になるのはよくなかった。

俺のせいだ。ぐらぐら足元を揺れて、ぼやぼやしてばっかだから撮影班まで不安が広がる。

心配するなど、声をかけようとしたそのときだった。

「遅くなったね」

夜の空気に響いた、鈴を転がしたような智幸の声。

きた。

背後に、智幸がいる。

細胞が騒いでいるように肌がチリチリした。

俺はゆっくりと、最初かける言葉を探りながら、スロー再生みたいに振り向いた。

――え。

振り向いて、啞然とした。

一瞬、本当に一瞬だったけれど、視線の先にいた人物を智幸だとハッキリしなかった。夜の暗がりのせいもあるかもしれないが、それが主な原因ではない。LED電球の光源が最も照らしている足元、そこから徐々に視線を上げていく。

服装はさっぱりとしたパンツルック。ジーンズに白のTシャツ、そして、それを目撃した瞬間、のどが失われたみたいに絶句した。

髪を切っていた。

もともとショートだったけど、艶やかな亜麻色の髪はあごの辺りまで伸びていた。

それがいまはぱっきり切り落とされている。

短髪。丸っこい両耳も出ていて、世間的に言えばベリーショートというのだろう。

断髪後の智幸の印象はだいぶ様変わりした。端正な顔立ちがよりハッキリして、スポーツ好きな美少女のように見えた。

――だが中性的で、美男子のようにも見えた。

ざわついた。

胸の奥でなにかが黒く蠢いていた。

ぱさり。ぱさり。髪が切り落とされる残酷な音が聞こえてくるようだった。それが自分の胸の奥にあるものすらちょんぎっていく痛覚があった。

え、え、と真季が言葉にならない声を漏らす。海は無言のまま目を細めている。その断髪はイメージチェンジにはあまりに短すぎて、ひどく自傷的に映った。異変の前兆を感じていた真季と海にもそう見えただろう。

「……トモチん、それ……？」

だからほら、真季なんて動揺してぐらぐらと視線が揺れている。

「高校の頃はこの髪型だったよ。お父さんによく髪切れって言われてたから」

だれもが狼狽するなかで智幸だけがやけに落ち着いていた。それが奇妙で、アンバランスで、違和感だらけだった。

なにが起きた？

一体なにが彼女に髪を切らせた……？

こいつにとって髪を切るって行為は重いことなんじゃないのか。重いはずだろ。

想像力をフル稼働して智幸の背後に抱えている原因を探ろうとする。断髪はあいつの意志？ あいつの決意？ それともほかの要因？ 父親？

――それとも俺か？

俺がいけないのか？ 池袋で見返り以上の求めたから？ でも、だからといって髪を切る必要があるのか？

わからない。夜の漆黒がすべてを隠して見えない。

「さあ、撮影をはじめよ」

智幸はゆったりとした足取りで創始者の銅像前までたどり着くと、振り返ってカメラの正面に立った。夜の闇にさらわれそうな儚げな表情で、その双眸は俺に焦点を合わせていた。

直面させられているみたいだった。

いままで見えなかった部分を、オトコとしてのカラダの一面を。

撮れ、というのか。

髪を短く切ったお前を。

これまで維持してきた自分らしさを失ったお前を。

こうありたいというものを投げ捨てたお前を。

この俺に撮れっていうのか。

「ふっざけんなッ！」

血液が沸騰した。

目の前が真っ赤になる。胸の奥がぐしゃぐしゃに熱くなった。

「なんだよ……なんなんだよそれはっ！ 違うだろ！ お前はそうじゃねえだろ君島！ ヤケになってんのかッ！」

「ヤケには、なってないよ。私は冷静だよ。本当だよ」

「じゃあなんで！ どうしてそんなっ、そんな髪を……ッ！ 俺か！ 俺がいけなかったのか！」

「それは、違うよ。本当に違う。君が悪いとか、そういうことじゃない」

「じゃあなんだよ！ ふざけんな、ふざけんなよッ！ いまの君島を映せるわけないだろ！ だっ
ていまのお前は、お前は……っ！」

「君が私に望んだんだよ。出演してほしいって」

「違う！ 俺が撮りたかった画は違う！」

「違うじゃないよ」

「違えよッ！ 俺が撮りたい画は、俺がいつも憧れを抱いている画は——ッ！」

息を巻いた瞬間、かみなりに撃たれたような電流が全身を駆け巡って自覚する。

——それでも、撮ってほしいのか。

どんな状況になっても、どれほど自分の外見が変わったとしても、それでも俺ならと自分の在り方を委ねてくれたのか。

俺が撮りたかった画、それはずっと変わらない。高校の文化祭で観た映研の映像。カメラにし
か映せないような人の感情や心情を切り取ったカットの連続。

カラダだけではなくココロも。

目に見える世界だけではなく、目に見えない世界だって映すこと。

「——いまの私じゃ映せない？」

髪を切った智幸。こいつにどんな心境の変化があったのかわからない。はさみで切られて落ちたのは髪だけじゃなく、願いとか、希望とか、理想とか、そういった光り輝くものさえ切り落とされた気がした。

どうして智幸がこんな状況に陥ったのか、足りない自分の頭をフル回転させてもなにもわからない。悔しいぐらいにわからない。

わからないことだらけだけど、嫌がらせや当てつけで断髪するようなやつじゃないことぐらいわかっている。

俺は前に言った。君島智幸は映像の中心で、核で、メインヒロインで。そんな智幸を通じて神に試されているようだった。

――三浦九はカメラフレームに`彼女、をおさめられるのかと。

俺がちゃんと智幸を撮れるなら、たとえ智幸がどんな格好でも、どれだけ変わろうとも、胸の奥の扉を開いた先にあるものはなにひとつ変わらない。だれも見ることのできない世界から彼女をすくいあげて、撮って、映像にする過程。心の結晶化。

真季も海も当惑している。まだ、現実を受け入れられていないみたいに呆然とした顔つき。いや、二人だけじゃなく、どれほどの人間が彼女を見てきたというのだろうか。

俺が。

俺がやるんだ。

彼女のために。

「――やってやるよ」

三浦九の真価が問われていた。

「え、九ちゃん……？ やるってなにを？ ちょっと、九ちゃん！？ ちょっとどういうこと……。なにこれ。なんなのこれ……。トモチん髪切って、九ちゃんわめいちゃって……。まさか……。こないだ九ちゃんが質問してきたことって……。九ちゃんっ、ねえ九ちゃん！ ちゃんと説明してよ！」

真季を押し除ける。

周りの雑音をすべて消す。

余分な思考も一切カット。

視界に入るのは智幸だけ。

俺が撮るんだ。俺が撮るんだ。俺が撮るんだ。俺が撮るんだ。俺が撮るんだ。俺が撮るんだ。俺が撮るんだ。俺が撮るんだ。俺が撮るんだ。

もはやそれは呪いに近かった。逃げないように体を縛りつけ、みずからに呪いをかけるように呟く。

胸に渦巻くのは嵐のような衝動。使命感に似た感情に全身を突き動かされ、カメラの電源を入れる。深く暗い夜の闇を背負った智幸とレンズ越しに向い合う。

「撮影をはじめろぞ。真季、海、二人とも機材を持て」

「ちょっと待ってよ九ちゃん！ さっきまで撮りたくないって言ってたのになんで急に……」

「真季はレフ板だ。準備してくれ」

「準備って……ダメだよ」

怯えるように真季が一步後ずさった。

「だって、変だもん。こんなの撮影する雰囲気じゃない。だって、だってさ……いまのトモチん見てると……撮影なんてできないよ。撮影したくない。だっていまのトモチんは」

「聞こえねえのか真季！ 黙って俺の言うこと聞けッ！」

咆哮に夜の大気が震える。俺の怒鳴り声に、真季は怖がって肩が震えていた。いつも笑っている彼女はそこにいない。縮こまりながらも、それでもぶんぶんと首を横に振る。

「……嫌だ、嫌だよ。だって、こんな撮影おかしいっ」

「おかしくねえ！ 被写体がいて、撮影班がいて、これまでとにも変わらねえだろうがッ！」

「九」

落ち着けと言わんばかりに俺と真季の間に割って入ったが、もはや関係なかった。

「海、お前は照明だ。君島に照明を当てろ」

「冷静になりなよ。なにを焦っているの」

「焦ってねえ！ お前らにだって協力してもらいたいだけだ！」

「トモチんっ、トモチんはこれでいいの？ 本当にいいの！？ トモチんだって本当はおかしいと思ってるでしょ。ねえそうでしょ！」

「私がいないと映像は完成しないよ」

「そうじゃないってば！ あたしが言いたいのは、言いたいことは、綺麗な髪バツサリ切り落としてまでやることじゃ……！」

「どけ真季ッ！ レフ板持たないなら邪魔だ！ 俺の指示が聞けねえならどいてろ！ カメラだけあればいい！」

「九！ いったん休憩しよう。休憩できないなら今日の撮影は中止だ」

「ふざけんなッ！ 中止になんてさせるかよ！ ほかのだれでもねえ！ 君島のちゃんとした部分を撮ってやりてえんだ！ 俺がやってやりてえんだッ！」

怒号、焦燥、痛烈、恫喝、使命。夜の下であらゆる感情を帯びた言葉が飛び交って混沌みたいに渦を巻いている。あらゆるベクトルは重ならず、闇の虚空のなかで乱反射して、衝突が次の衝突を加速度的に生み出していく。

「今日はもう終わりだ。機材、片付けるよ」海が三脚とカメラを持って撤収しようとして、俺はカメラだけ強引に奪う。「九！」海が声だけで静止するがもはや耳に入らなかった。

カメラの支えなんて必要ない。俺が支えになればいいだけだ。

照明もレフ板もなければいい。最低限必要なのはカメラ。智幸の心を映し出すものさえ手にしているならそれで十分。

ずっしりと重みのあるカメラを肩に乗せる。カメラグリップをしっかりと握ってレンズをゆっくり智幸へ向ける。アングルは被写体の目線。フレームに智幸の全身が映り、ズームを調整して智幸をアップで映していく。

やるぞ三浦九。俺がやるんだ。俺が`彼女、を映すんだ。

彼女のために。智幸、智幸、智幸――

集中。鋭利な刃物を砥ぐように極限まで神経を研ぎ澄ます。

骨を、血を、精神力すらもひっくるめてショットに全霊をこめる。

ハッ、ハッ、と呼吸がうるさかった。

だれの息かと思えば、自分の息だった。

ドクンドクンと心音までも聞こえてきた。体を通して脈動がカメラマイクに伝わりそうだった。

ズームで智幸との距離が埋まれば埋まるほどひどくなる動悸。浮き彫りになっていく智幸の姿

。

レンズに映ったのは短髪。

レンズに映っていないのは切り落とされてしまった亜麻色の髪。

——カラダだけが男の子なんだ。

こんなときにリフレインする冷たい現実。心臓がねじ切れそうになるほど締め付けられる。

頭を振って雑念を振り払う。

しかし振り切れない。

フレームは君島智幸の肉体的な部分しか映していない。

ショットを変えてもアングルを変えても無意味。目も、鼻も、口も、耳も、指も、爪も、肌も、映し出せるのは目に見える智幸のカラダだけ。

モニターに映った映像は真っ白な布地に墨汁を垂らしてできたシミのような違和感があった。やがてぼたぼたと大量の墨汁が白地に落ちていって違和感は強大なものになっていく。

——好きだっていうなら、どこに惚れたんだ？

声が聞こえた。智幸の声じゃない。真季や海のものでもない。声の出どころは俺自身の胸の内からだった。

溢れ出てくる自問をすべてねじり潰す。

だが、潰しても潰しても洪水のように迷いがなだれこんできて俺の意志の支柱を押し流そうとする。

——心なんて撮れないと、本当はどこかでわかってんじゃないのか？

むしばまれるような声が胸中から響いてくる。

——それでも、被写体の心を映すとしたら、それは被写体の言動だろうよ。新入生のために桜の鉛筆を作ってやった職人の顔、言葉、格好、仕草、そういう部分に滲むんだ。そういう部分をちゃんと見てきた、人間だけが心を撮れるんだ。

不安定な精神は肉体に影響を及ぼす。手が痙攣を起こしたみたいに震えた。カメラの重さをうまく支えられなくてブレる。次にひざにきて、足が木の棒みたいにぐらついた。

——オマエはカメラを向けているだけで、目は閉じてんだよ。

うまく息ができない。

モニターが夜の闇に塗り潰されていく。

どんどん夜の黒がフレームに浸食して行って智幸をさらってしまいそうだった。

撮れねえ……っ。

なんでだッ。どうしてだよッ。見えない。彼女が見えなくなっていく。そのうち見える世界すら視野狭窄を起こしたみたいに閉じていく。

胸の奥を開いた先にいる彼女がフレームアウトする。

天使みたいな羽を広げて可憐に踊る彼女の姿が幻となって霧散していく。

閉ざされた扉。必死にこじ開けようとするがびくともせず、殴りつけて強引に壊そうとしても自分の手が血で真っ赤に染まっていく。

——彼女を撮れない……！

そう思わされた瞬間、尖った氷柱に全身を貫かれたような激痛が走った。心の血がどぼどぼと流れ、足元に血溜まりが広がっていた。

ひざの力が抜けていまにも崩れ落ちそうだった。歯を食いしばって踏ん張る。諦めちゃダメだ。諦めたくない。諦めてはいけないと血反吐を吐きながら踏ん張った。

なのに。

「もう、いいよ」

落ち着いた声で、智幸がそっと手を伸ばしてカメラを下ろさせた。あまりにそれが自然で、優しかった。

ぽつりと、夜の天井から雨が降ってくる音が聞こえた。一歩、智幸が近づくと俺の頭上に降る雨脚は強くなった。

「撮ってくれようとして、ありがとう」

感謝が痛かった。

「撮らせて、ごめんね」

謝罪はもっと痛かった。

「このままでいいから、私の話を聞いてほしいな」

雨に打たれる俺と智幸。不甲斐なくうな垂れる俺に智幸は支えるように言葉を置いた。

「展望台で別れたあとね、考えたんだ。自分の未来のこととか、君の気持ちのこととか、私なりにすっごく考えたんだ。ホント、いっぱい」

「君島……」

間近で見る智幸の目は充血していて、目の下にはうっすらと黒い影ができていた。

「前に大学の屋上で話したとき、君は羨ましげに言ったよね。普通がいいって。わかるよ。その気持ち、すっごくわかる。私も普通だったらみじめさとかなくなって、居場所に悩むこともなくていいなあって考えたことあるから」

――みじめ、なんだ。

屋上で智幸が俺に言ったセリフを思い出す。あれは俺だけじゃなくて、もしかして智幸が自分自身にも言っていたのか。

「目を瞑って、展望台で君にごめんねって言わなかった未来も想像したんだ。でもね、目を開けたとき、やっぱり見えちゃったんだ。だれもが普通にやれることとか、私といなかったことによって得られる、もっと、もっと別の巡り合わせとか、ほかにも、いろいろなこと含めて、私ということで君は……」

そこで一度言葉を区切って、智幸は雨粒で顔を濡らしながらも薄い笑みを浮かべた。

「普通になりたくて、なれる機会があるとしたら、ちゃんと手に入れてほしい。そっちのほうが私も嬉しいよ」

「そんなの……そんなのっ、どうするかどうしないかは俺が決めることで――」

「お互い、自分の道を。それが一番だよ。君にとっても、私にとっても。それが私の精一杯考えた結果。だから、ここでもう」

さーっと吹く夜風ともに、するりと俺の脇を智幸が通り抜けた。

すれ違う。彼女が俺の視界から消える。

闇に手を引かれるように遠ざかる足音。夜に飲まれる彼女の気配。

離れていく。

どんどん離れていく。

このままじゃ、彼女はもう手の届かない場所に行ってしまうそうだった。

ズキリと胸を抉られるような激痛が走る。一步、智幸が離れていくたびに四肢がもがれていきそうだった。

本能がこれまで考えてきたあらゆることを放棄して、告げた。

離したくない。

いままここで離しちゃいけない。

「智幸！」

はじめて、声に出して彼女を呼ぶ。

智幸と開いた距離を、空白を、ガッと地面を蹴り上げて追いかける。

彼女に手を伸ばそうとした。

だが。

「私が嫌なんだ」

背中を向けたまま、智幸はガラスの壁みたいな言葉を俺との間に差し込んだ。

「君といると、私が嫌なんだ」

心のど真ん中に風穴をあけられた。

「もう、私を見なくていいよ」

それが、とどめだった。

精神の柱が折れた音がした。

「トモちん！」

真季が智幸を止めようと手を掴んだ。が、なぜだか真季が、俺が咆えても自分の我を通した真季が、フリーズして結局智幸を手放してしまう。

俺はその場から一步も動くことができなかった。

気づけば、俺の頭上には雨が降っていなかった。

まるで、智幸が引連れていったようだった。

※

俺は、いつも自分のことで手一杯だった。

小学生のとき、母親が仕事で帰ってくるのが遅いから自分で晩飯を作った。はじめて作った味

噌汁はダシを入れ忘れてめちゃくちゃまずかった。中学になったら勉強が難しくなった。太陽が沈むまでバカみたいによく遊んでいた友人たちは全員塾に通いはじめた。みんなに置いていかれないように俺も塾通いしたかったけど、いろいろと余裕がなかった。高校になったら本格的にバイトをはじめて、家事と学業、そこに仕事も加わって自分の両手はほかになにも抱えられないほどいっぱいいっぱいだった。

自分のことばかりで周りに目を配る余裕がなかった。いつだってそうだ。

だから、智幸の真実を知って真っ先に目を向けたのは自分の内面だった。

自分の感情整理にしか時間を費やせなかった。

それはいまだってそうで、そしてそんなんだから、智幸の気持ちを考えてやれなかった。

あいつだって、俺に打ち明けてずっと悩んでいただろうに。

「……………あ」

目覚めれば、パソコンディスプレイが眼前にあった。辺りを見渡せば撮影に使う機材が置かれていて、自分がメディア実習室にいることを思い出した。

静かだ。だれもいない。

ああ、そうだ。智幸の撮影に失敗して、ここに機材を片したあと、海と真季と少し話したんだっけ。

……真季と海には悪いことをしちまった。

撮影のときに怒鳴り散らしたことを二人に謝ると、あいつらはうな垂れる俺の肩を優しく叩いてくれた。

最後の最後まで、智幸の事情を話すべきかどうかは迷った。

けれど、二人は気づきはじめていしたし、壊れた撮影の空気のとこでこれ以上隠すこともできなかった。

だからぼつぼつと、ゆっくり、話した。

そしてしばらくひとりにさせてくれてと頼んだのだ。

真季はなにか言いたげだったが、海が帰ろうと引き連れていってくれた。

俺はこの部屋でなにをしていたかといえば、なにもしていない。ただこもって、荒んだ気持ちで智幸との別れの意味を考えていたら……いつのまにか意識が落ちていた。

俺はどれほど眠っていたのか。部屋に窓がなくて時間感覚が狂う。

壁掛け時計で時間を確認してびっくりした。

もう夜明け前。かなりの時間仮眠をとっていたことになる。

警備員に見つからなかったのは偶然か、もしくはここが研究棟の一室だからだろう。うちの大学は二十四時間開放している施設がある。それが、研究室のある研究棟。学生が昼夜問わず研究に没頭しており、卒業論文や卒業制作の締め切り前になると寝泊りしている学生もざらにいる。だから警備員は見回りこそしても、厳密にチェックはしないのだろう。

気だるい体を起こしてメディア実習室に鍵をかけて出た。扉にある『使用中』のプレートを裏返して研究棟の出入り口まで向かった。出入り口には二十四時間警備員が駐在し受付があって俺は鍵を返却した。警備員はあくび混じりに対応していかにもやる気がなさそうだった。

研究棟を出て広々としたキャンパスに足を踏み出すと少し肌寒かった。辺りには闇が立ちこめ、夜明け前のもっとも暗い時間のなかに俺はいた。

やけに目が冴えている。

荒んでいた気持ちも、仮眠をとったせいも多少落ち着いている。

——どこに惚れたんだ？

撮影のときからずっとリピートされているその疑問。

いつまでも自分の気持ちを宙ぶらりに保留にするわけにはいかなかった。白黒簡単に感情の色を決められるものではないけど、せめて心の着地点をどうするかぐらいは見つけるべきだった。

だからまだ家には帰らない。

行きたい場所がある。

世界から人類を消し去ったかのような静寂なキャンパスを横切ると、創始者の銅像が夜の闇から浮かび上がった。

そこで思い出したのは桜の花びらが散る季節。二か月前の智幸との出会いだった。

智幸は触れれば壊れてしまいそうなガラス細工みたいに儚げさと端正さを持ち合わせていた。乳白色の横顔は綺麗でいまでも鮮明に思い出せる。

この場所で智幸と出会って、一目惚れしそうになって、心が揺れた。この気持ちが偽物かと言われれば、それは違う。本当だ。

映画館であいつの小さな手が触れたときは、胸がうるさいぐらいに心臓が高鳴っていた。これも事実だ。

触れられる世界。見た目なんて世俗的と思われるだろうけど、それでも感じた心は嘘じゃない。

——俺は目に見える部分に惹かれたのだ。

次に俺が向かったのは五号館だった。

階段を一段一段上っていくと、ヤマトの制服姿で逃げるよう走っていたあのときの自分が克明に蘇ってくる。

屋上にたどりつくとも視界が開けた。空中庭園のような趣きがあるこの場所で、智幸はベンチに座りながら三ツ矢サイダーを飲んでいた。

あいつはベコベコに潰れた缶みたいな俺に声をかけてくれて、同じ世界に立っていることを知らせてくれた。

俺の内側にあるモノを見て、同じ目線で会話してくれた。

——私は君を、笑わないから。

そのセリフは、お守りみたいに俺の懐に入っていた。

そんなこと言われたのは生まれてきてはじめてのことだった。自分みたいな普通じゃないやつはこの世界で俺ひとりだと思っていた。

でも、土砂降りの雨にあいつも打たれていて、俺には傘を差してくれた。それが嬉しかった。どうしようもなく。

——目に見えない部分にだって惹かれたんだ。

それはしょせん同属意識なんじゃないかと言われれば、はじめりはそうだったんだと思う。自分と近い存在がいて、受け入れてくれて、安心したことは否定しない。

けど、撮影のあと、智幸が離れて行って、胸を抉られるほど痛かった。

これで受け入れてもらえなくなるとか、安心できる場所がなくなるとか、そんなことはちらりと脳裏にも浮かばなかった。張り裂けそうな痛みだけが支配していた。

——それでも、好きでいられるか。

目に見える部分に惹かれた自分、見に見えない部分に惹かれた自分。どっちも本当の俺だ。偽らざる気持ちだ。

「……ああ、そうだ。それでも、俺はあいつを——」

この痛みは、そういうことじゃないか。

「……遅えよ。気づくの、遅え」

いや、違うな。智幸の撮影に失敗したからこそ、離れてしまったからこそ、自分の気持ちに気づけたんだ。

それでも、もう遅い。

俺は智幸にフラれたのだ。

——君といると、私が嫌なんだ。

智幸とのあの別れ方はそういうことだろう。いくら疎い俺でもそれぐらいは想像がつく。

智幸の立場に立ってみれば、この屋上で俺の気持ちを知って、ずっと困っていたのだろう。距離を取ってしままで人と接してきたのに、俺が急に踏み越えてきてしまったのだから。

それでもゼミでは俺の相手をしてくれた。あいつが事情を打ち明けたあと俺との関係に悩んでくれた。目の下の黒い影が蘇って思う。たぶん俺が想像する以上にずっとずっと悩んでいてくれたのだ。

これはそれで出した結末なのだ。

だとしたら、仕方がないのだろう。

フラれたなら、溢れるほどの想いを抱いても追いかけるべきではないのだろう。

「終わりか……」

ここが俺の心の着地点。気持ちの落としどころなんだろう。

「ああ……」

それぞれの道を。

なんともあっけない幕切れだ。

けど、世の中こんなものなのだろう。終わりがすべてドラマチックとは限らない。

「なにかが、変わっただろうか」

目を見開いて、目に見える世界も、目に見えない世界も、どっちも真正面から見ようとしていれば、未来は変わっただろうか。

「あ……」

あれ、なんだよこれ……。

まぶたの裏が熱くて、視界が滲んで……。

「あれ、あれ……」

勘弁してくれ。マジでなんだよ。なんなんだよこれは……。

こんな、こんなことはじめてで、俺は……。

「……………っ」

のどの奥が震える。

上を向くという対処療法なんかじゃ間に合わない。

なにやってんだ。情けねえことしてんじゃねえよ。くそ、くそ……っ。

袖で目元を拭っているそのときだった。

一面夜に塗りつぶされた世界が光によって割れた。東の空から赤茶けた太陽が顔を出す。辺りには白んだ朝靄が立ちこめて幻想的な光景が眼前に広がる。

「ああ」

あらゆるものを照らす光。

腹立つぐらいに綺麗な夜明け。

鮮烈な朝焼けが、俺の進む道に光を当てているみたいだった。

ふわりと、押されるように一歩足が前に出た。まるでその光を浴びろと言わんばかりに。

背中を押された感触があまりに柔らかくて、それは風というより人の手みたいだった。

——普通になりたくて、なれる機会があるとしたら、ちゃんと手に入れてほしい。

目を閉じて思い出す。智幸がただ別離の言葉を残しただけでなく、俺の背中を押してくれたことを。

普通を手に入れてほしいと願われた。あいつは自分が普通とはズレた位置にあると思っていて、普通の尊さを知っていて、だからこそせめて俺だけはと想ってくれたのだろう。

まぶたの裏に光が射した。

目を開ける。夜を終わらせる燦然とした光源は世界に輝きをもたらし、やがて俺を照らした。

※

「ったく、仕事終わったのに呼び戻すなよ。相変わらず人をコキ使ってくれるな」

今日の俺のシフトは昼上がりだった。さっさと家に帰ってすぐさま大学に向かう予定だったのに、帰宅途中で職場から携帯に連絡がきた。メッセージ便の誤配があったから配達先に受け取りに行ってもらいたい。

一度は断った。どうしても外せない予定がすぐにあるからだ。けれど、ドライバーがみんな出払っていてほかに頼める人がいないからどうしても頼まれて、結局俺はしぶしぶ営業所に戻った。

タイムカード押した人間に残業させておまけにクレーム処理。フツーそこまでさせるかよ。携帯買ったこと隠してりゃよかったな。

今度こそ家に帰ろうとして時間を確認したら予定が迫っていた。帰宅して着替えていたら遅れる可能性があったから、会社から大学に直行した。

つまりいま、俺は作業着のままというわけだ。

「また会社の制服で登校じゃねえか……」

大学の校門前で大きくため息を吐いてから昼の学生たちに紛れてキャンパス内へと足を踏み入れた。

不幸中の幸い、周りの学生たちは俺のことを大学に荷物を配達していると勘違いしているのか怪訝な視線は向けられなかった。

見上げれば、空は清々しいほどの青に染まっていた。天気予報だとどうやら今日はずっと晴れているらしい。

太陽の日射しを受けた昼のキャンパスは夜と違う顔を見せていた。通路の横に設けられた花壇が鮮やかに萌える様子を、陽光が照らし出している。明るい談笑がいつも以上に聞こえる気がする。人の表情がくっきりと見えて笑顔が咲いている。吹きつける風は穏やかで、ぬるま湯に浸かっているような暖かさが全身を包んでいた。自分が会社の服装だという気すら忘れさせるほどひだまりの世界は心地よくてぽかぽかした。

六号館校舎に入っても窓ガラスから陽光が射しこんでいた。光を反射した通路を抜けた先にあったのは連絡事項が張られた掲示板。ピンで留められたいくつもの張り紙のなかで、俺が目を向けたのはただひとつ。

――社会学部転部転科説明会。

今日が説明会当日だった。

この説明会を受けたからといって必ずしも転部転科するわけではない。けれど説明会を受けていなければ来年度の転部転科は特別な事情がない限りとりあってもらえず、希望者は参加が絶対条件。

説明会開始まであと少し。掲示板の前に突っ立ったまま、自分が歩むかもしれない未来を想像

する。

一部の授業料を払えるぐらいの貯金は、まあ、ある。なるべく無駄遣いをおさえて、コツコツ貯めてきた。それでも一年分だけだ。その上、生活費だってかかる。だからバイトは土日フルで働いて、早朝の仕分けもやらせてもらおう。それでも足りない分は奨学金を借りればいい。

頭の中でシミュレートして、けれど、本当に昼の世界に足を踏みこむのかという疑問はついてまわった。

転部なんてぼんやりと頭の中にあったものの、いままで本気で考えたことはなかった。

だけど、今回の説明会は本気で考えてみるいい機会だと思えた。

きっかけをくれたのは智幸だ。

そう、あいつが背中を押してくれたんだ。

転部転科。その文字には奥の奥には、どこにでもある、けれど日射しが降りそそぐ明るい世界、『普通』があるような気がした。

そちらの世界に足を踏み入れれば、大学に通う時間が増えて仕事に行く時間は減る。曜日できちりと仕事と学業が分離されて、朝から仕事して夜に大学に向かうことなんてなくなるだろう。

。

社会人か、大学生か、曖昧で中途半端な存在は終わる。二部の連中と顔を見合わせる機会は減るだろうが、同じ大学にいるのだ。別に会えなくなるというわけでもない。

この先の道を進めば、普通でいられる。

説明会会場に向かおうと足を出した矢先――携帯が振動した。

着信。相手は海だ。

説明会開開始前で一瞬出ようかどうか迷ったが、無視できず通話ボタンをタッチした。

『もしもし。九。よかった。やっと通じた。いまどこにいる？』

やけに真剣味が帯びた声だった。なにか切羽詰まったような喋り方だ。

「学校だけど」

『まだ昼なのに学校？ いや、むしろよかった。どのみちそっちのほうが都合いい』

「なんの用だよ」

『話したいことがあるんだ。電話じゃなくてできれば会って話したい。どこにいる？ いま休憩もらったから、そっち向かうよ』

「……すまん。あとにしてくれないか。俺はこれから用事が」

「――いた」

携帯を当ててない左耳に、直接海の声が聞こえた。

ストライプのネクタイに黒のスーツ。この時間にフォーマルな格好をしているのは教務課のバイト中だからだろう。気になるのは肩で息をしている点だ。呼吸が乱れている。走ってきたのだろうか。

「よかった、会えた……。九、きのうの夜電話してもつながらなかったから。だから、いま見つけられてよかった」

「寝るときは電源切ってるからな」

「ヤマトの服、やっぱり目立つね。九がどこにいるかすぐわかったよ。今日は大学に配達あるの？」

「ちげーよ。俺はこれから用事あるんだ。ゆっくり付き合ってる暇はないぞ」

「待って！ どうしてもこれだけ、これだけは伝えないと思って」

「なにをだよ」

「迷ったんだ。口止めされたけど、やっぱり九には言った方がいいんじゃないかって。それで考えて考えて、やっぱり知っておいたほうがいいと思った」

「だからなにをだよ。ノロケ話とかしょーもない話だったら俺は聞かんぞ」

「――君島さんが大学を辞める」

■クロスカッティング 青山海

六号館校舎の一階にある教務課学生部。学生が往来するコンコース脇に設置されたそこは、まるで会社のオフィスみたいな場所で、僕は自分のデスクでパソコンと向き合っていた。

教務課学生部の仕事は名前の通り学生に関することが主で、僕はいま夏の長期休み中に開かれる学生向け特講ポスターを作成していた。

「青山くん、作業中ごめんね」キーボードを打鍵していると先輩に呼ばれた。「新しく受付に来た学生の対応してくれるかな。ボク、いまこっちの子の話聞かなくちゃいけないから」

窓口で学生の相談や事務的手続きなども学生部の仕事だ。僕は先輩にまかされた学生の対応をしようと窓口に立って、びっくりした。

相手は君島さんだった。

「あ」

「あ」

驚きがシンクロする。向こうも目を皿にしている。まさか僕が対応するとは想定していなかったのだろう。

お互い顔を合わせるの、こないだの撮影の日以来だ。あの、ひび割れしたような撮影以来……。

「やあ、君島さん」

僕から声をかけた。気まずさをできる限り感じさせないように、にっこり微笑んだ。

「僕が教務課でバイトしてて驚いた？ というか、知らなかったっけ？」

「……そういえば前に笹野さんが言っていたような気がする。すっかり忘れてたよ」

「カフェの手伝いはボランティアみたいなものだからさ、こうしてバイトしないとネパールへの渡航費用貯まらないんだよね。今年の夏休みもあっち行ってコーヒー豆栽培手伝おうと思ってる

んだ。いやー、今年の豆はいいよ……って、いけないいけない。コーヒーの話になると僕ばっか話しちゃうね。君島さんの話を聞かないと。うちにどんな用かな？」

「えっと……」

君島さんは目を伏せ、手に持っていた一枚の書類を隠すように背中へと回した。一瞬の出来事だったが、僕はその一瞬を見逃さなかった。

「ううん。やっぱりなんでもないんだ」

なんでもない、ことはないはずだ。どんな書類かは知らないけど用事がないならわざわざ書類を窓口まで持ってくる必要はない。なのにこの場で急にごまかした原因は――僕か。

「そこまで大事なことはないから。また日を改めるよ」

「待って」窓口から立ち去ろうとする君島さん呼び止めた。「今月、僕はほとんど教務課で仕事してるんだ」

君島さんが足を止める。さらに追い打ちをかけた。

「僕がいない日でも学生の個人情報データ化されて職員たちで共有される。アルバイトの僕だって例外じゃない。僕がいるからって気が引けるなら意味のないことだよ。それにほら、また窓口に来るのも二度手間になって面倒だよ。それならその書類いま見せてもらったほうが効率的だと思うんだ」

書類、と聞いて君島さんは隠したほうの腕をびくんと震わせた。沈黙して、どうしようか逡巡している。

しばらく黙りこんでいた君島さんだけど、ずっと微笑んでいる僕を見て諦めたようにため息を吐いて書類を手渡ししてくれた。

僕は君島さんの前で微笑を絶やすつもりはなかった。けれど、その文字列を目にした瞬間、ふっと風に吹き消されたように表情が消えた。

「退学届……」

ショックだった。頭がかち割られそうになるぐらい。

「退学ってこんなペラペラな紙切れ一枚でできちゃうんだね。ちょっとびっくり」

面食らった僕とは対照的に、君島さんの口元は半笑いを浮かべていた。

「名前、学籍番号、それに学科と住所、一言理由を書いて判子押したら終わり。すっごいあっさりだ。入学するときは受験勉強とか膨大な時間かけたのに、出ていくときは五分もかからないうちに書き終わっちゃった」

退学までの流れも味気ないものだ。退学届けを受け取って指導教員と学部長に判子を押してもらったらそれで完了。一週間ほどで正式に退学と認められる。普段の僕ならそこで事務的に学生証を提出してくださいと手続きに移るけど、いまはうまく体が動かなかった。

――それほどなのか。

退学するほど君島さんは考えて、悩んで、思い詰めていたのか。

「本気なの？」

「本気だよ」

愚問だった。冗談で退学届を出す学生なんているわけがない。

これまで様々な事情で退学していく学生を見届けてきた。経済的な事情、他大学への編入、親の死別での帰郷など、なかには明るい理由で大学を去る学生もいたが、大半は聞いていて面白くない内容だった。

君島さんの場合は――『実家に帰るため』。そう簡潔に書かれていた。

どうして実家に帰るのか、大事な部分が伝わらない。

「聞いていいかな。君島さんが退学する理由」

「そこに書いてある通りだよ」

「教務課のスタッフは、もう少し踏み込んだ理由を聞くのも仕事のうちなんだ」

嘘をついた。本来ならすぐに手続きへと移る。それは仕事として余計な詮索は不要だし、退学の理由なんてたいていは暗い影が差しているのでほじくり返すべきではない配慮だ。

けど、仲間がいなくなるのに「はいそうですか」なんて簡単に頷けるか？

「退学の理由、聞かせてくれないかな」

「……私一人っ子でさ、家のこととか手伝ってほしいって、前からお父さんに帰ってこい帰ってこいって言われてたんだよ。もう、本当にバカ親でさ、参っちゃうよね。お母さんだって言葉にはしないけど私がそばにいるほうが安心できて、戻ってきてほしいと思っててさ」

「本当にそれだけの理由？」

「……………」

君島さんは少しだけ目線を落とす。

一呼吸置いて、答えてくれた。

「ここにいないほうがいいと思ったんだ」

重々しい空気が僕たちのあいだに流れた。

僕は、こんなときどんな言葉をかけるべきなのか必死に探っていると、君島さんが恐る恐る聞いてきた。

「私のこと、もう聞いた？」

私のこと――それだけでなにが言いたいかわかった。

「……九に教えてもらった。ごめん。本当なら君島さんの口から聞くべきだったんだろうけど、撮影の日いろいろあったから、僕と真季が九に聞いて……知った」

「そっか。別に謝らなくていいよ。三浦くんが話すのは当然のことだと思うから」

「僕は無意識のうちに君が嫌がることをしていたかもしれない。真季も、気にしてた」

「だから別にいいって。笹野さんに申し訳なさそうにされるとこっちまで調子狂っちゃうよ。私のほうこそ最初に言うべきだったかもしれない。ただ、こういうこといちいち言うの、すごくエネルギーがいるっていうか、なんていうか、ね」

君島さんが短くなった髪を指でいじりながら空笑いした。

君島さんの事情を知っても、僕はまだ断髪したこの人の気持ちすべてを理解しているわけではなかった。

切り落とされた髪の影響でやや偏って見えるけど、今日の君島さんの服装は爽やかな白のシャツにカーゴスキニーと中性的に見える。

服は時に口以上に物を言うという言葉がある。

短髪になった決意とは裏腹に、まだ、中性的な曖昧さがあって、どこかで揺らいでいる部分を残しているのではないだろうか。

どうすべきか。

いや、どうしようもないのだ。

僕はいま教務課の職員で、君島さんの退学届を受け取って処理するしかない。本人の決断にどうこう言うのは職員の仕事ではない。これまでと同じようにお疲れ様でしたと声をかけて退学者の背中を見届けるしかないのだ。

「……………」

——なんて割り切れないよね、やっば。

「ちょっと待ってて、君島さん」

きょとんとする君島さんを窓口で立たせたまま、僕は自分のデスクへと戻る。卓上に置かれた持参のコーヒーマーカー。その場で手動コーヒミルを取り出して焙煎して豆をゴリゴリ挽く。粉上にしたらコーヒーマーカーに入れて電源を押す。シュゴーと音を立ててドリップされていく。

ほかの職員に「なにやってるの？」と聞かれ、「どうしても、いまでも飲みたい人がいて」と説明すると、「青山くんのコーヒー好きにはホントに呆れる」なんて苦笑されたけど怒られはしなかった。

アルバイトをはじめたばかりの頃、コーヒーマーカーを丸ごと運んできたときは周りに驚かれた。わざわざ自前で淹れなくても、自販機の缶コーヒーを買えばいいじゃんって苦笑された。

でも、僕が淹れたコーヒーをみんなに配ると「おいしい」と喜んでくれて、豆の種類や淹れ方など聞きにくる職員もいた。コーヒーの深みにはまって行って、少しずつ周りの反応が変わっていく様が嬉しかった。最初は変だと思われていたコーヒーマーカーも、気づけばないほうがおかしくなっていた。

この場所に置いてあるのが、普通になった。

ホット用の使い捨て紙コップに深い黒がそそがれる。湯気が立ちこめ、広がる香ばしい匂い。二つ分持って行って、ひとつは僕の、もうひとつを窓口の君島さんに差し出した。

「はい、どうぞ」

「えっと……」

君島さんは困惑していた。まさか退学届出しにきてコーヒーが出てくるとは予想していなかったのだろう。

「君島さんにどうしてもネパールのみんなで作ったコーヒーを飲んでもらいたくて。せめて一度くらいは」

「でも、私苦いのは……」

「お願い。一口、とりあえず、一口でもいいから飲んでほしいんだ」

「……じゃあ、一口」

しゅしゅ、といった感じだが小さな両手で受け取ってくれた。猫舌なのか、ふーふーと息をかけて冷めるのを待っている。

僕は先に一口飲む。癖になるような苦味と熱が体中に巡る。慣れ親しんだ味はまるで故郷に戻ったような心地で自然と落ち着いた。

「君島さんってひとりで思い詰めるタイプ？」

「.....どうしてそう思うのかな？」

「なんとなく、かな。僕が前はそうだったんだよ。だれに相談してもどうせわかりっこない。自分の問題を解決できるのは自分だけだ。そう、追い込むように思い詰めていた。真季と付き合う前までは」

カップの中にぐるぐる渦巻くコーヒーを眺めていると、黒の水面に過去のいろんな思い出が映っていた。

「去年の話なんだけど.....いや、正確に言うならノロケ話。そうだね、ノロケ話なんだけど聞いてくれるかな」

「.....ノロケって、フツー正々堂々とそういうこと言うかな」

「あはは。九はなかなか聞いてくれなくてさ」

ひとまず君島さんは嫌な顔をしなかったので僕は続けた。

「真季との出会いは、去年同じゼミになったからなんだ。そこに九もいて、去年のゼミもそれはもう楽しかったよ。ゼミが始まる前にさ、真季の話すことやることくだらなくて、くだらなすぎて逆に僕には笑えちゃって、いと一緒。君島さんならわかるでしょ」

「.....バカみたいなことで賑やかな笹野さんはイメージしやすいよ」

「ははっ、そうそう。賑やかなんだよ、とにかく。真季っていつもカラカラ笑ってた。ホント、四六時中笑ってたんだ。小さな太陽みたいに明るくて、陽気で、彼女のそばにいるとなんだか照らされたみたいに温かくなって.....うん、僕は真季が好きになった。そのうち真季のほうも僕に好意を持ってくれていることを知った。でも.....あのときは一步踏み出せなかったんだよなあ」

冷たくなりそうな心を温めようとホットコーヒーをずずっとすすった。

思い出すのは、お互いに気持ちが向きあっているのに、これ以上は近寄ってははいけないと真季に対して距離を置いて後ろを向いていた過去。

「前にも言ったよね、大学を卒業したら僕はネパールに滞在するって。ネパールのコーヒー豆栽培が定着して、流通も整って、現地の人々の生活が安定するまでは向こうで過ごすつもりなんだ。それって何年、ひょっとしたら何十年かかるかもしれない。ときには日本に戻ることもあるだろうけど、それはほんの数日程度。つまりさ、日本からいなくなるってことは、真季と別れが約束されてるんだよね。だから、だからね.....好きだって言えなかった」

「.....ノロケじゃないじゃん」

君島さんはまなじりを下げてうつむいた。まるで自分の痛みのように下唇をきゅっと噛み締めた。

「好きだって言って付き合ったら、一緒に時間を過ごして、二人でたくさん思い出作るよね。そのときは楽しいよ。絶対に楽しい。でも、別れるときにその思い出が今度は痛くなる。お互い、思い出があればあるほど辛くなるなんて簡単に想像がつく。膨らんだ風船が破裂するみたいに傷つくんだって想像したら、僕は気持ちを伝えられなかった。伝えることが相手を傷つけることに

もつながると思った。自分の気持ちを殺して、僕じゃないほかの人を選んだほうが真季にとって最良だと思ったんだ」

いま思い返せばやっぱり僕は思い詰めていたのだろう。真季にとっての最良は真季自身が決めることなのに、僕が勝手に定義していた。

真季にはラジオ局で働く夢があった。もし、ありえないことではあるが、その夢を捨ててまでネパールに行く強い想いを抱えてくれたとしても、僕はやはり首を横に振る。夢は尊重されるべきだし、ずっと日本で育った女の子にはネパールの治安の悪さは過酷だ。最貧国。ちらつくのは殺された僕の先輩。邦人なんて歩く金品みたいなものだろう。

「その年もやっぱり長期休暇のときネパールに行ったんだけど、こう、なんていうんだろ、胸が重苦しくて、作業していてもぼんやりしちゃって……ある日ホテルに戻ったらふっと力が入らなくて倒れちゃったんだ。もうひどい状態でさ、嘔吐するし、熱は出るし、目眩がひどくてまともに立っていられなくて、体が自由に動かないんだよ。さすがに焦るよね。朦朧とする意識のなかで連絡を取らなくちゃいけないとは思うけど、そこで『だれに？』って疑問が湧いたんだ。現地の知り合いがいるのは電話すらない田舎の貧乏な村。両親は僕のことを放蕩息子だと愛想を尽かしている。答えが出ないまま何日も寝込んだんだよ。帰国予定日も過ぎてこれは本格的にやばいなーって思っていたら幻覚を見たんだよ」

「幻覚？」

「目の前にいるんだよ、九と真季が」

「……末期だよ、それ」

「だよね。僕もいよいよ末期だなあと思っててさ、そしたら『幻じゃねえよバカ』って九が僕の頬ペチペチ叩くの」

うそ、と君島さんが啞然とした。

「むちゃくちゃだ、そんなの……」

「だね、僕もさすがにびっくりしたよ。僕の帰国が遅いって理由でネパールまで来ちゃうんだから」

ネパールに出立前、九に一応寝泊りする場所教えとけと言われていた。必要ないと思ったけど、もしものときに動くのがゼミ長だと九がうるさくてホテルの電話番号と住所は伝えておいた。帰国予定日を過ぎててもなにも連絡がないから九が国際電話をかけたらしいけど、格安ホテルで満足に英語を話せるホテルマンはおらず、なにを言っているかサッパリだったらしい。

大使館に連絡したがどうも動きが遅い。不安は真季にも伝わった。もうそれならいっそネパールに行こうと九が提案して二人は大胆にも渡航した。二人とも修学旅行のときにパスポートは作っていたらしいが、かなり安直だ。トラベル英会話の本を片手によく僕が寝泊りするホテルにたどりつけたものだと思う。

「それでね、真季が僕を見て泣くんだよ。どうやらそのとき僕はミイラみたいにすり減ってたらしくて、か細くなった手を取ってわんわん泣くの。参ったよ。いつも笑ってる真季が滝のように涙を流すとは思ってなかったから」

時間が経ったいまでも鮮明に覚えている。真季の目から溢れた滴が頬を伝って、僕の手流れ

落ちたこと。

申し訳なさで胸が苦しくなったと同時に、すごく安心してしまったこと。

「それで九が言ったんだよ。まるで学校で会ったときの挨拶みたいに飾りげなく言ったんだ。『意外と近かったぞ』って」

なんかおかしくて、笑った。

その一言で、いままで自分の悩んでいたことがちっぽけに見えて、馬鹿馬鹿しくなっちゃって、すごく気持ちが軽くなった。

「日本に帰ってきて、僕は真っ先に真季に自分の気持ちを口にしたよ」

君島さんは境界線を踏み越えた僕の姿をうまく想像できないのか、眉根を寄せて険しい顔つきをしていた。

「.....わからないよ」

「わからない？」

「思い出ができるって辛くなるってわかってるんでしょ」

「そうだろうね。ネパールに行くときなんて僕わんわん泣いちゃうかも」

「それなのにどうして.....好きっていうと、相手を傷つけるって思ってたんでしょ」

「でも、傷ついただけじゃないとも思った」

悲痛な顔をする君島さんをそっと支えるように、言った。

「あるとき真季に言われたよ。『海ちゃんは付き合うことを重く捉え過ぎ、付き合うことが一大事件の少女漫画じゃあるまいし。おぬしはピュアなヒロインか』ってさ。確かになって思ったな。付き合うって考え方は人それぞれだけど、まだ二十歳なんだし、傷ついて辛くなるかどうか、付き合ってから判断するって考え方だって悪くないと思ったんだ。それに付き合わないといけないことだってあるしね」

君島さんはそれでも納得できないのかぶんぶんと首を振った。

「いまはまだ一緒にいるからそう思えるんだよ。二人に壁がないから平気でいられるんだよ」

「そうかもね。けど、高くて絶対に越えることができない壁って、案外それって自分の思いこみだったりするんじゃないかな。意外と、その気になればひょいって越えられる。だって真季がそうだった。ネパールまで来ちゃった。なんだ、あっさり越えてるんだ、自分が悩んでることってちっぽけだなーって思わされちゃったよ」

「でも離ればなれなんだよ」

「確かに」

「ずっと会えないんだよっ」

「うん」

「なんで気持ちが変わらないなんて言い切れるの!？」

「好きになっちゃったからね」

僕は苦笑した。

シンプルで、突き詰めればこれ以上の理由はほかに存在しない言葉だった。

「好きなんだから、もうこればかりは仕方ないや」

お手あげだと、僕はちょっとおどけたように両手を上げた。

「それに、意外と日本とネパールって近いみたいだし」

陽気に笑った。真季からもらったものを、少しでも君島さんに分け与えられたらと思って。

「難しいよ」それでも君島さんの表情は曇ったままだった。「……だれもが青山くんのように割り切れないよ」

うっすらと見えない膜が君島さんを覆っていて、僕の声が届いているかわからなかった。

君島さんはぬるくなったコーヒーを一口飲んだ。「三ツ矢サイダーばっか飲んでるからかな。子どもの私には……苦いな」そう言って飲み残したままの紙コップを置いて、窓口から離れようとした。

「退学すること、ゼミのみんなには言わないでほしい」

「君島さん、君は――」

「コーヒー、ありがとう。退学届、よろしくね」

※

「君島が退学……？」

はじめは、聞き間違いだと思った。

だけど海は眉を八の字に下げて冗談だという気配を見せない。

「きのう、君島さんが教務課に退学届を出しにきたんだ。僕がそれを、受け取った」

「受け取った……？ 受け取ったって、なんで!？」

動揺して喚いて、海の沈んだ両肩と背広姿を見てすぐに思い当たる。なんでもくそもない。それが仕事だからじゃないか。

目眩がした。

「そんなに……。いきなり大学辞めるって、そんなことが……」

海の言葉がまだ信じられなかった。

いや、信じたくなかった。

事態の急転にありえないと否定しようとしたが、いつの日か聞いた智幸の声が耳元に残っていた。

――時々、大学辞めて帰ろうかなって気持ちが揺らぐんだけどね。

「どうして……」俺の言葉は弱々しかった。「どうして、ここにきて君島が大学を辞めるなんて……」

「実家に戻るって言ってた」

「実家？」

実家って、香川か。馬鹿な。だってあいつ、自分の生まれ育った場所から、家庭から出たいと言って上京してきたんだろ。

どういふことだ。退学に踏み切ったのは親との関係に変化があったから？ 親の身になにかあった？ いや、それとも前に話していた経済的な事情？ やはりバイト生活で疲弊したから？ 夜の授業についていけなくなった？ 最近授業を休みがちだったのは退学の準備をしていたため？

数々の疑問が泡のように弾けていくなかで、海がそれを口にした。

「君島さんはこうも言っていた。ここにいないほうがいいと思った、って」

——俺の振る舞いが、智幸を追い込んでいた？

そう考えると寒気がした。

そうなのか。そうなのだろうか。

わからない。わからないが、俺はなにかとんでもない間違いを犯したんじゃないのか。

俺が原因であっても、そうでなかったとしても、智幸のことを想うならもっとあいつの立場に立って考えてやるべきだったんじゃないのか。

どこを間違えた。なにがいけなかった。

智幸の撮影に失敗してしまったことか。それとも展望台で事情を知ってなにも言えず帰ってしまったことか。もしくは迫っておきながら智幸の真実を聞いて固まってしまったことか。

池袋で見返り以上の時間を求めたこと？ 映画館で終わらせとけばいいのに展望台まで誘ったから？

家に押しかけなければよかったのか？ あいつと二人だけの時間を過ごさなければこうはならなかった？

大学の屋上で共振しなければ。銅像で待っている智幸を迎えに行かなければ。

好きにならなければ。

「————っ」

心を殴打された鈍い痛みで苦悶した。

大学を辞めて香川に戻るといふのは、俺が転部して会う機会が減るといふレベルの話ではない。もう会えないも同然だ。すれ違いさえ起こらず、互いの視界からいっさいがっさい消える。

焦った。すぐさまポケットにしまった携帯を手にして——だが瞬間、強烈な疑問が突き刺さった。

——なんで焦るんだ？

携帯を持つ手が凍りついた。

会えなくなるからって思ふのは、俺の自分本意な考え方じゃないか。

智幸はなにも捨て鉢な態度で退学するわけではないはずだ。撮影の別れ際、自分の未来について考えたと明かしてくれた。あのワンルームで夜を過ごしながらひとり熟慮していたのだ。

退学こそが、智幸が選んだ道。

俺の視線の先には転部転科説明会会場がある。そこは晴れていて、うとうと眠ってしまいそうなほどひだまりが心地よくて、ドラマなんかでよく描かれる大学生像が広がっている。俺には俺

の道をと、智幸が優しく背中を押してくれた世界。

お互いに自分の道を。そう、智幸は望んだんじゃないか。

四肢がもがれそうな痛みを抱えながらも、ポケットに携帯をしまった。俺は胸の奥で瞬く光を牢に閉ざす。

「……海、伝えたかったことはそれだけか？」

素っ気ない反応に海は目を細めた。

「そう、だけど……」

「だったら俺はもう行くぞ」

言って、心が急速に渴いていった。真冬みたいに冷たくなっていった。

「待ってよ九。君島さんいなくなるんだよ。辞めちゃうんだよ」

「……んなこと、いちいち言われなくたってわかってんだよ。俺はこんなところでぼやぼやしてられないんだ。用事があるから」

「そんな。用事って、君島さん退学するのに、それ以上に大事な用事って……」

ふいに海が俺の視線の先にあった転部転科の張り紙を見て、目を大きく見開いた。俺の表情をうかがうように一瞥して、それから再び張り紙を凝視する。

「まさか、九……、これ……」

察したように、海は困惑していた。こいつは鋭い。付き合いだって短くはない。きっとこの張り紙を見た瞬間、俺の行き先とか、心情とか、将来のこととか、多少なりともわかったはずだ。

「……じゃあな」

いまこの瞬間、俺の将来に関係する場面で、海はこの説明会の価値だってわかっているはず。それなのに呼び止めていいのか、動揺しているはずだ。

自分の未来だけをずっと真っ直ぐ見据えてきた海ならわかるはずだ。他人の未来を左右する上で、踏み越えていけないラインがあると。干渉してはいけない部分があると。

海は自重するはずだ。呼び止めないはずだ。

だから俺は、踵を返して説明会会場に体を向けた。

「――待ってよ」

だが、海はそのライン踏み越えてきた。

「本当にそれで納得できるの？」

それでもと、こいつはお節介を平然とかましてきやがる。

迂闊だった。

いまの海が見ているものはネパールだけではない。

いまの海は、真季と付き合うまでの海とは違うじゃないか。

「九はこのままでいいの？ 納得しちゃっていいの？」

「いいもなにも、君島の決断したことに口を出すべきじゃねえだろ」

「それで後悔しないって言える？」

「くどいぞ」

口調がささくれ立つ。

「お節介がすぎるんだよお前は。ほっといてくれよ。納得する。納得するしかねえんだ。後悔しねえよ。いいんだよ。もう、俺たちはこれでいいんだ」

「いって言うなら、どうしてそんな辛そうな顔をしているんだ」

「―――っ！」

すべてを見抜かれそうで、咄嗟に俺は顔を隠すようにうつむいた。

「九、僕は君に感謝してるんだ。以前ネパールに来てくれたとき言ってくれたよね、『意外と近かったぞ』って。なんて無茶をやるんだと思ったよ。だけど、ありがたかった。大切なのは距離的な問題じゃなくて、距離なんてどうってことないと思える気持ちのほうだって教えてもらった。その気持ちに気づけなかったら、僕はいまも悩んで、大人になったらすごい後悔してたと思う。だから、九には後悔してほしくないんだ。たとえどういう結末でも、いまから時間が経って過去を振り返ったとき、後悔しない選択をしてよかったと、そう思っほしい」

「……………」

説明会開始までもう時間がなかった。このまま立ち往生していたら余計な感情に縛りつけられて足が動くなりそうだった。

「もう、仕方ねえことなんだよ」

床から靴底をひっぺがす。

光りに導かれるように会場を正視する。

過去を振り切るように足を前に出す。

だが、一步は踏み出せなかった。ぐいっと、後ろに引っ張られる力を感じたからだ。

「待って九ちゃん！」

何事かと思って振り返れば、真季がいた。驚いた。さっきまでいなかったはずなのに、彼女の童顔がすぐそこにある。全力で走ってきたのか肩で呼吸している。額に大粒の汗を浮かばせながらも俺の手首をがっちり掴んでいた。

「なんで、真季が大学に……？」

「おべ、ん、とう……っ！」

「は？ 弁当？」

真季はぜえぜえと乱れた呼吸を落ち着かせ、証明するように右手にはランチボックスが入った手提げを掲げた。

「あたしが時間あるとき、バイト中の海ちゃんにお弁当届けてあげるんだ。それで休み時間に一緒に食べる。今日なんてそぼろでハートマークとか作っちゃったよ！ どんだけ気合い入れてんの、いまどきハートってねえよっ、って作りながらセルフツッコミかまして笑ったもん！」

「……お前、なに言って……」

あまりの突拍子のなさに俺は呆けた顔をしていたと思う。それでもお構いなしと真季は汗で額に張りついた前髪を剥がして続けた。

「あと海ちゃん大学生のくせにまだタコさんウインナー好きと言うから、たくさんタコさん作ってあげた。あとあと、海ちゃんあたしが作るとなんでもおいしいって言うんだけど、卵焼き甘めにするとすんげー顔ニマニマすんの。だから今日も甘め。甘々だ。どーだ、すんごい愛情の

詰まったお弁当だ！ どこにも売ってないぞ！ 世界でひとつだけのもんだ！ すんげーだろ！
一緒に食べるんだ！ ラブリーだ！ ラブラブだ！ バッカみたいだ！ でも幸せだ！ とび
っきり幸せないまを謳歌してる！」

「なにが言いたいんだよお前！」

「諦めなくてよかったよ！」

小さな体を震わせて、ありったけの音量をぶつけてくる。心のだ真ん中に飛び込んでくるよう
な強い言葉だった。

「諦めなかったからいまがあるんだ。九ちゃんと一緒にネパールついてきてくれたから、いまが
あるんだ。付き合ったから、海ちゃんのこともっと知れて、感じて、それで、それで、たくさん
見えた」

ぎゅっと、真季の手首を掴む力が強くなる。石みたいに白くなった俺に、自分のあたたかな温
度を分け与えるように。

「あのね、あの撮影の日に見たこと、あたし黙ってた。それを口にしていいいのか、しちやいけな
いのか、わからなかったから。なにがトモチんにとっていいことなのか、わからなかったから」

撮影の日に見たこと？ なんだよそれ？

「けど、きのう海ちゃんから電話かかってきて、トモチんが退学するって聞いて、やっぱ言わな
いのはまずいなって、九ちゃんは知っておいたほうがいいと思った」

真季の意味深な言い回しに、自分の足元がぐらぐらと揺れている感覚があった。嫌な予感が
した。試験終了前にうっかりマークシートのズレに気づくようなぞわぞわとした不安感。ズレな
んかないと精神を正常に保とうとするバイアスと、俺はなにか重大なことを見落としていたんじ
ゃないかというおぞましさ。相反する二つの思いに引っ張られながらも、俺は恐る恐る聞いた。

「言うって、なにを……？」

「泣いてたよ」

真季は涙目だった。

俺は目を剥いた。棒立ちだった。

「撮影が失敗してトモチん帰ろうとしたでしょ。すごく嫌な予感してさ、トモチん止めようと掴
まえたとき、一瞬、本当にちらっとだけ横顔見えて、泣いてて、あたしびっくりして、つい手
放しちゃった……」

耳を、疑いそうになった。

智幸の泣き顔なんてうまく想像できない。記憶の引き出しからあいつのいろんなカットを持っ
てくるが、あいつが俺の前で涙を流したカットなんて持ち合わせていなかった。

だってあいつ、最後に見せたのは微笑で、水を汚さず立つ鳥のような潔さで去っていったじゃ
ないか。あいつはもう俺と視線を重ねることなく、ひとり別の方向を――

違う。

バチッと頭の中で燃焼して回路が繋がった。

――後腐れがなく、俺の背中を押すためなのか。

「泣いてるトモチん見て、あたしわかった。わかったんだ。諦めたんだって。髪切っちゃった

のだって、きっと諦めた結果なんだ」

「諦めた？」

真季は潤んだ瞳をごしごしと乱暴に拭って、俺を見据えた。貫くようなまっすぐな眼差しは、まるで瞳で答えているようだった。

ひどく動揺した。

信じられなかった。

素直に受け止めるなんてできなかった。

ないだろ、それは、ありえないだろ……。

「適当なこと言うなよ、言わないでくれよ……。なんだよ諦めるって。そんな、そんなことって……。ねえよ。あるわけない。みっともなく、不器用で、愚直で、こんな、こんなどうしようもないのに……」

「卑屈になるな！」

真季が涙目で怒鳴った。横っ面を引っぱたくようなインパクトに体の芯が揺さぶられた。

「どうして……」

手が小刻みに震える。

「どうしてだよ。真季になんでそんなこと、わかるんだよ……」

「だって、女の子同士だもん」

真季は、真季の視点で俺には見えない智幸の領域を見ていた。きっとそれは海だって同じで、海の視点で智幸を見たからこそこうして俺に伝えてきてくれた。だとしたら俺が、俺だけが見える智幸の領域があるはずだ。

見えている世界と見えない世界の境界線上に立つあいつ。

俺が、俺だけ見える世界。

俺がカメラに映すのは――

「智幸」

もういない彼女の名を口にする。

胸が焼けるように熱かった。

いつしか手の震えはおさまっていた。

足元がしっかり地に着いている感覚があった。

視界の明瞭度が上がって世界が澄みきって見えた。

そのとき、転部転科説明会の張り紙が視界の端に入ってきた。

朝起きて、太陽の光が溢れた教室で授業受けて、友達と笑いながら飯食って、夜は寝そべりながらみんな見てるバラエティ番組とかリアルタイムで見れて、明日になったら番組の話で盛り上がり、だれもが享受できるどこにでもありがちな、けれど暖かな光があった。五年浴びられなかった光。このまま社会に出たらきっと味わうのは難しい。社会から与えられた猶予期間は平等で、それを消費してしまえばもうきっと戻れない。羨んで、羨んで、妬んで、手に入れられなかったもの。

説明会会場に続く世界は晴れているように見えた。

そんな世界を、俺は振り切った。

気づけば反転して走っていた。

迷いは、時間にしたら一瞬。

説明会会場とは正反対の校舎の出入口へ、胸を打つような激動にまかせて疾走していた。

すでに背後にいる真季が「いいぞお——っ！ 九ちゃ——んっ！」なんてキャンパス中に響き渡るほどバカでかい声をぶつけてきた。

いい？

いいわけがねえ。

遅れちまった。ラストカットに失敗して幕は下りたとひとり気落ちして、あいつが退学届出すまで大事なことに気づけなかった。

いまさら手を伸ばしても間に合わないかもしれない。

だけど許されるなら。

すべてが手遅れになる前にもう一度だけ——

晴れの世界を背後にしていく。俺が向かうべき場所は降りやまない雨、その中心。彼女がいるアパートへと一直線に駆ける。

走りながら携帯を手にして智幸に電話をかける。だがつながらない。機械的な音声が電波の届かない場所か電源が切れているためと酷薄に告げている。

「くそっ！ 携帯持ってたってすれ違うじゃねえか！」

体内のギアを一段上げて加速する。少しでも早く会って声を届けようと身を粉にする。

競走馬が地面を踏みしめる勢いで校舎から飛び出す。屋外に出ると雨が降る前の生ぬるい気配を肌を感じた。心がざわついた。これ以上先に進めば晴れの世界には戻れない。いずれスコールのように豪雨が降り始めるだろう。

いまさらだった。

勾配を駆け下り、校門を抜けて通りに入る。

「タクシー、タクシーは……っ！？」

教授などが利用して時々通るのを見かけるが、タイミング悪くいまは見つからない。一秒でも早く向かうなら車がいいが、このまま待ちぼうけをくらう可能性がある。智幸の家は大学からそう離れていない。なら——

だん、と地面を強く蹴り上げた。

あらゆるものを取っ払って。陽光射す日常とか、だれもが享受している普通とか、そういったもの全部投げ捨てて。

がむしゃらに、ひたすらに。

顔を向けるのは上でも下でもない、前だ。ただ前だけを。

体が軽い。足に翼がはえたみたいだ。

智幸、一秒でも早く智幸のもとへ。

両足で風を切る力は、肉体を前進させる衝動は、あいつへの同類意識でも、依存でも、ましてや罪悪感なんてものじゃない。

それは圧倒されるような感覚。

強い一念でコンクリの歩道を疾駆していく。

大幅なストライド。余力を残す必要はないトップスピード。両腕を振って六月の風を切っていくながら思い出したのは哀しげに微笑む智幸だった。

香川。実家。あいつの育った世界。どれほど智幸の理解者がいるかわからないけど、そこには父親がいる。病気になってもそれは本人の精神が軟弱だと言い張る時代錯誤のような人物。理解されず、変わることが許さないような象徴として存在。そんな言い回しだった。

ガレキで覆われたような窮屈な世界。智幸はどれほどの苦痛があったのか。どれほどみんなとのズレに胸を痛めたのか。

俺は昼間から作業服着て、大学生なのに勉強するより仕事してる時間のほうが長くて、まるで社会人のかぶりもの着ている違和感があった。時々思わされた。「どうしていつも自分ばかりこうなんだって」って。でもそれを口にしたら本当に負け犬みたいになりそうで軽々しく言いたくなかった。

でも、智幸と出会って薄々感づいていた。

――普通じゃないと思ってんのは、俺ひとりだけじゃない。

智幸も人とは違うものを抱えていた。同じなんだと共振した。

いや、ひょっとしたらそれは智幸だけじゃないかもしれない。真季も、海も、二部の連中も、一部の連中も、歩道を歩いている見知らぬ他人だって、だれもが程度の違いこそあれどなにかしら抱えながら生きてるのだろう。

でも、それでも、やっぱり普通からつまはじきにされたと感じる気持ちだって嘘ではなくて、智幸がいまもそう思っているなら、自分の気持ちをなにも伝えずこのまま香川へと帰したくなかった。

泥にまみれて見えなくなった俺の気持ちを手で搔き分けるように探って、泥を払って、ようやく見つけた自分自身の在り方。

ほかの連中が智幸をどう見ても、智幸の父親がどれほど否定してきたとしても、あらゆる常識や普通なるものも関係ない。

世界を構成するのは二人いればいいと智幸は言った。智幸と、そして俺がそこにいれば世界が完成する。

俺の視点さえあれば、智幸は智幸でいられる。あいつが本当にありたいと思う自分でいられるように、俺は俺のやれることをしてやりたい。

だからこそ、ちゃんとあいつを見なくちゃいけないんだ。

目に見える部分だって。

目に見えない部分だって。

これでもかってぐらい目を見開いて見る。全部、全部――

「はぁッ、はぁッ……！」

息切れをおこす。呼吸が乱れる。太ももの筋肉が悲鳴を叫びはじめる。ひっきりなしの全力疾走は俺の両足を消耗させた。フォームが徐々に崩れ、もはや爽快な走りではなくなる。

足がふらついてつまずきそうになる。

足の裏の感覚がなくなってくる。

つんのめってこけそうになりながらも手で地面を押し返し、速度をつける。

重力に負けないように。

世界に押し潰されないように。

空っぽになりかけの体力。それでも全身の力を振り絞るように前に前にとつま先を出していく

額からこぼれる汗を袖で拭くと、やっと見えた。

「着い、た……っ！」

二階建てのアパート。智幸の住んでいる部屋は、二〇一号室。

せえせえと肺に穴が空きそうな過呼吸。だが休む間もなく体力の残滓をかき集めて俺は階段を駆け上がり、二〇一号室のチャイムを押した。しかしなぜか鳴らない。ドアをドンドンと叩いた。だが反応がない。

この先に智幸がいるはずなのにまだ届かない。分厚いドアが壁みたいに遮断している。

さっきまで熱で発汗していたはずの汗は冷たいものになっていった。焦燥感にかられて無意識にドアノブを回していて――あいた。鍵がかかっていなかった。

気が急いでいた。コンマ数秒も待てなかった。だからぶしつけにもドアを開けて、なだれ込むように玄関へと足を踏み入れた。

「智幸！」

部屋に残響するほどの声量で彼女の名前を呼んで、俺は視界に映った光景に愕然とした。

空っぽだった。

まったくと言っていいほどなにもない。可愛らしいキッチン道具も、映画がぎっしりと詰まったDVDラックも、彼女の匂いまでも全部が全部ごっそり消えている。

なんだよ、これ……。どうしたことだよ……。

引っ越したあとのような空虚さだけが広がっていたが、部屋に人がひとりいた。背広姿の小太りな男性で、なにやらチェックしているように押し入れを開け閉めしていた。その仕草がどことなく不動産屋っぽく、俺の姿を見ると向こうも驚き固まっていた。

「えっと、あの……」

困惑気味の声を出したのは俺だ。

がらんどうの部屋に、見ず知らずの人間。最悪なケースが頭のなかを過ぎた。不安で胸がいっぱいになりながら恐る恐る口にした。

「すみません、あの、君島智幸、ここに住んでいた君島さんはどこに……？」

小太りの男性はいきなり質問を受けて戸惑っていたが、俺の深刻そうな表情を見て答えてくれた。

「先日出て行かれましたけど……どちら様でしょうか？　これから清掃員が来てクリーニングを行うところなんですが――」

途端、目の前が真っ暗になった。背広の男性の言葉が途中から耳に入ってこなくなった。

突きつけられた冷たい現実は、ただひとつ。

――間に合わなかった。

■クロスカッティング 君島智幸

羽田空港ターミナルから眺める空は灰色の雲に覆われていた。西から流れてくる低気圧のせいで関東の天気はこのまま下り坂らしい。

ついてないな。本当だったらきのう実家に帰る予定だったのに、天候不順で飛行機が欠航してしまった。爆弾低気圧っていうんだっけ？ とにかく香川は大荒れの天候のせいで、私は羽田空港そばのホテルに一泊した。

不運は重なった。実家に送った荷物の中に携帯の充電器も入れてしまった。そのせいで携帯はすぐにバッテリーが切れていまではただの重りになっている。

コンビニで充電器を買おうかどうか迷ったけど、ホテルの電話からお母さんに連絡を入れられたからとりあえず問題はなかった。向こうは天候のせいで旅館のキャンセルが相次いで電話対応に忙しそうだった。

携帯が使えないのは不便だけど、まあ、うん……いまは携帯見れないほうがいいのかかなと思う。画面を真っ暗にすれば、後ろ髪を引かれることもない。

今日の便はどうやら高松空港まで飛べるみたいだ。搭乗手続きはすでに終わって、あとはセキュリティーチェックして搭乗するだけ。

ターミナルを歩いているとガラス窓にうっすらと自分の姿が映った。髪、自衛隊に入隊する女性みたいに短くなっちゃったな……。

結局、香川に戻るのか……。あーあ、お父さんますます威張り散らしそう。ほら、オレの言うことが正しかっただろうって。

帰って来るなら髪切れって言ったのもお父さんだった。正直、悩んだ。髪を切るのは屈辱的だった。食事を忘れるほど悩んで悩んで、結果、従った。

お父さんだって断髪は本心じゃないんだろうけど、ケジメ的な意味合いで父親の威厳を保ちたいんだろうな。怒りを乗り越すと呆れるってよく言うけど、ホントだった。

ゼミのみんなには悪いことしたな。短髪になって驚かせて、撮影の雰囲気壊してしまった……。

でも、申し訳ないと思いながら撮影に向かったのは……期待していたんだろうな、私。もしかしたら彼なら、こんな短髪の私でもって。

「……ごめん」

ばか、だよ。いまさら謝ってもどうにかなるわけじゃないのに。どうしようもないばかだ、

私は。

三ツ矢サイダーを飲んで気分を紛らわす。空っぽの胃に水分だけが溜まる。食事がうまくのどを通らないけど、三ツ矢サイダーはなんとか入る。

「――と、うわっと」

カロリー不足のせいか、握力が一瞬なくなってペットボトルを落としそうになる。危うくキャッチして事なきを得た。

「あ」

そういえば、前にもこんなことがあった。

あのときはまだたくさん残っていた三ツ矢サイダーこぼしちゃって、彼が落ちたペットボトルを拾ってくれた。

あれ。

あのとき、彼、なにか言ってくれたはずだ。なんだっけ。体調が崩れかけていたときだから記憶が曖昧だ。落とすなよ？ 違う、いやそれも言ってくれたけど、もっとすんと胸に落ちるような言葉。あれは、あれは――

――全部なくなったわけじゃない。残るやつもあるんだ。

「ああ」

三浦九、九……。

胸の中で彼の名前を呼ぶ。後ろ髪を引かれるように振り向いた。ターミナルを行き来する雑踏。こんな場所に彼がいるわけではないのに、それでもどこかにいるような錯覚を起こさせた。

いつも私がひとりでいると彼は現れた。

二部に転部した最初のゼミ。私はここでうまくやっていけるのか不安で大学の屋上でひとりひざを抱えながら小さくなっていると彼が姿を見せた。病気で寝込んでいるときだって荷物運んできて、映画を観終わってひとり彼を見送っていると戻ってきてくれた。

「……ダメ、だよ」

自分に言い聞かせる。

ジュースが売っている売店、人が列を作って並ぶ受付、新聞を読んでいる人が座っているシート。あちこち探ろうとする視線を、強引にまぶたを閉じてシャットアウトする。

溢れてくる気持ちを深淵に押しやる。頑丈に鍵をかけて、もう振り向いてはダメだと私は搭乗口へと急いだ。

――君島。

慌てて振り向いた。

強固だったはずの決意は簡単に揺らいでしまった。

声がしたろうほうを見て――けれど視界に彼が映らない。

あれ、あれ……。

彼は長身で目立つ。なのに、交差する人群れに彼を探ると視線を向けても、いない。どこにも

いない。

中耳には私の名前を呼ぶ声が残っていて、あれ、それってつまり……。

「うわ、うわあー……まいっちゃうな、もう」

くしゃりと自分の髪を掴んでうつむく。ドン引きだよ。自分で自分に引いちゃうよ。幻聴だなんさ。

「私、どれだけ彼を……」

眼球の裏がぐしゃぐしゃに熱くなった。視界が滲んで、うっかりすると余計なものがこぼれそうだったから上を向いた。

やけに重く感じるカバンを抱える。セキュリティチェックを終えて、もう搭乗するだけ。このゲートをくぐれば後戻りはできない。

「……さようなら」

どんなときでも現れた彼は、最後はこなかった。

胸の中が焼き焦げそうになりながら、私は飛行機へと搭乗した。

そして東京を発った。

また、錯覚だと思った。幻聴の次は幻覚かと。

もしくは、夢を見ているのか。

高松空港ターミナルをとぼとぼと歩いていた私は思わず足を止めた。

多くの人間が交錯する空間で、それは紛れることなく目立った。

行き交う人々も、それを見て不思議そうに首を傾げていた。

掲げられた文章の意味を理解できるのは、世界中でただひとり。

私だけに伝わる光景がそこにあった。

○君島智幸さま 社会学部二部メディア学科はこちらです

人波から頭ひとつ分飛び抜けた長身。薄いカーキ色に白のストライプが入った作業着。右手に高らかと掲げられた画用紙はプラカードに見立てられて、マジックでデカデカと私に向けた案内が書かれていた。

「見つけた」

確かに、聞こえた。

ターミナルの賑やかな空間のなかで、その声だけがやけにはっきり、耳から全身に波紋のように広がった。

あまりに信じられなくて歯がかちかち鳴った。

のどが焼けるように熱かった。

心が震えた。

「これじゃあマジで格安旅行のツアーコンダクターだよな」

彼はおかしように微笑んだ。作業服姿で案内を掲げていても恥ずかしそうな素振りはなく、堂々と立っていた。上でも下でもなく、いまはただ前を向いていた。

一歩、一歩とおぼつかない足取りで近づいて、彼の顔を間近で見てびっくりした。試合後のボクサーみたいに左頬が膨れ上がって青いあざができていた。手当したあとが余計に痛々しかった。けれど彼は別段気にしてないように不格好な顔で笑っていた。

仕事の服装で、高松空港で待っていて、顔が殴れたみたいに腫れていて……なに、これ。なんなの。もうなにから切り込んでいいのかわからない。

「なん、で……」

戸惑って、わけわかんなくて、でも想いだけはどんどん溢れてきて、のどが震えて声がうまく出だせない。

「なんでって？ ああ、このプラカードのこと？ いやさ、智幸携帯つながらねえから、空港で見つけるんだったらこれが手っ取り早いかなーって。ははっ、おかしいよな。メディア学科のくせして思いつたやり方がこれってのは。でも、最初のときも見つけられたし、今回も見つけられ

るかなって思ったんだ」

「ち、違う……。私が言いたいのは、そうじゃなくて、その怪我は……」

「これは、えっと……。まあなんつーか、アクシデントみたいなもんだ。大したことねえよ。智幸のお母さんに手当してもらったしな」

ごまかすように苦笑した。

わからない。なにが起きているかわからないことだらけでパニックを起こしそうだ。

「どうして香川に……。高松空港に、君がいるの……」

動悸がひどい。彼を見れば見るほど胸が締め付けられて、息が苦しくなって、声がしゃがれてしまう。

「香川にはきのうの時点で着いてただけだな」

着いていた？ きνού？ ますます意味が分からない。

だって、きのうは高松行きの便はどれも欠航していたはずだ。私はそれでホテルに一泊して足止めをくらっていたのに……。

「きのうさ、智幸のアパートに行ったんだけどお前いなかったから、実家に行けば会えるだろうと思ってすぐ新幹線に乗ったんだ。香川なら飛行機で移動したほうが早いんだろうけど、海から動いてないって教えてもらってな。それで新幹線で岡山駅まで行ったんだけど、乗り換えの電車が悪天候で止まっちゃってて運転再開まで立ち往生。さすがに参ったよ。でもしばらくしたら動き出して、香川入ってからタクシーで智幸の実家、旅館まで行ったわけ。すげえ旅館だったな。立派でびっくりした」

びっくりしたのは私のほうだ。なんて無鉄砲な行動をするんだ。

私は聞いた。

「どうして、旅館の場所を知ってるの……？」

「あー、えっと」彼はばつが悪そうに頭を掻いた。「教務課って学生の個人情報にアクセスできるから、まあ、知り合いにちょっとな」

青山くんのことだ。

「で、智幸のお母さんに会ってさ、話聞いたら空港で足止めくらってまだ帰って来てないよって聞いたんだ。つまり俺の勇み足。笑っちゃった。智幸のお母さんが今日はもう遅いから泊まっていきなさいって面倒見てくれて、最初は漫喫で過ごす予定だけど、せっかくだから厚意に甘えた。そこで智幸の親父さんも現れて……。いい機会だと思って、俺のことをちゃんと説明して、智幸には、娘さんには大学戻ってきてほしいって伝えた。まあ結果は……。どれくらい気持ちが届いたかはちょっとわかんなかったけど、効果はゼロじゃねえと思う」

彼は口を横に広げて苦笑をぶらさげる。腫れた頬がひくついて痛々しい。

厳格で、堅物で、私の事情もちゃんと見ようとしなないお父さん。そんなお父さんの前で彼は言ったというの。私のことを「娘、だと。」

「その顔、ひよっとしてお父さんに……」

「あー、えっと、これは、そういうわけじゃ……」彼は目をそらした。私に心配させまいとごまかしているのが見え見えだった。

「ごまかさないでっ」

私はいたたまれなくて声を荒げた。

「君は、お父さん説得して反感を買ったんでしょ。それで、その傷を……」

一度、彼は後頭部をさすって黙った。私の悲痛な眼差しから逃げられないと思ったのか、ちゃんと話してくれた。

「暴力沙汰とか、そんな大げさなもんじゃねえんだ。ホントだ。ただ、親父さんに智幸と向き合っ、て、智幸の気持ちちゃんと聞いてほしいって、あんまり俺が口うるさかったからかな、まあ、怒っちまって、ぶたれただけ。いやー、星一徹よりキャラ濃かったぞお前の父親さん。でも旅館から追い出されなかったし、怒りながらも俺の話は最後まで聞いてくれたから悪い人じゃないのはわかったよ」

彼の平然とした口ぶりに私は動揺していた。

どうしてそこまで躍起になれるの。

なんでそんな無茶をしているの。

私に会いにこようとわざわざ東京から新幹線に乗って、悪天候のなか旅館までフツーやってくる？ 大学とか、仕事とか、ほかの用事とか、そういうもの全部放りだして、お父さんまで説得しようとして痛い目に遭って、それでもくじけないで私を空港で待つなんて、そんなこと――

「……むちゃくちゃだ。君、むちゃくちゃだよっ！」

「え、むちゃくちゃって、お前がそれ言うのかよ？」

「言うよ！ 東京から香川まで来ちゃうんだもん！ いきなり私の前に現れるんだもん！ そんなの、そんなのびっくりするよ！」

「ネパールにくらべれば近いぞ」

「そういうことじゃないよ！ ここまで来るのだって、その、お金とかいっぱいかかるし、仕事とかほかに大事な用事だってあったはずだ！」

「なめるなよ智幸。契約社員でも有給はあるんだ。これを機に溜まりに溜まった有給使いまくることにした」

「なにそれ。ほかに、まだほかにもっ……」

言いたいことがたくさんあるのに、熱い感情がのどもとまでこみ上げてきて声が詰まってしまふ。

なんて不器用で、愚直で、勝手なんだ。勝手すぎるよ。他人が聞けば彼のやり方に呆れ果てるはずだ。私だって呆れている。

だけど、だからこそ、彼らしかった。

ぜんぶ、ぜんぶ、投げ捨ててきたのに、それでも彼だけは残っていた。夢でも幻でもない。真正銘、私の目の前に彼がいる。

過去しか残っていない香川に、いまと未来を運んできてくれるように彼がいてくれる。

「どうして、そこまでの……」

「そりゃ、一秒でも早く智幸の顔を見てやろうと思ったからだ」

鼻の奥がじんとして、目頭が熱くなった。

「智幸だってむちゃくちゃだろ。いきなり大学辞めて、勝手にいなくなって……こっちだって智幸にいろいろ言いたいことはあるけど、まあいいや。いまそれは後回しだ」

彼は画用紙を脇に抱えてポケットから携帯電話を取り出す。そして、携帯のカメラレンズをこちらに向けた。

「ラストカットだ、智幸」

last cut. 君島智幸

心は凧みたいに穏やかだった。目に映るすべては澄み切った空気のように明瞭で、ノイズはなにも聞こえない。

カメラ、というか携帯をしっかりと握る。ムービーを起動してフレームに智幸の表情をおさめる。

ふと、雨音が聞こえた。

彼女に降りしきる雨。びしょ濡れの彼女に近づいた俺も雨粒に濡れたけど、構わなかった。雨降りでも俺には彼女だけがぼわぼわと淡く光って見えて、ほかはなにも映らなくて、二人だけの世界にいた。

「映像なんてもう……。だって私、大学を……」

智幸の顔は痩せこけていた。まぶたは腫れ、目は充血して真っ赤。そんな不格好な自分は不要だと言わんばかりに、智幸はレンズから逃げるように顔を下げた。

「智幸の映像がないと完成しないんだ」

「こんなところで急にそんなこと言われても……」

「じゃあ、夜に戻ればいい」

家に帰ろう、みたいな調子で俺は言った。

「カメラだって携帯じゃなくてプロ仕様の高性能。二部に戻れば真季と海がいて撮影を手伝ってくれる。そっちのほうがいいよな。それに俺も、今度は俺もちゃんと撮るから。二部に戻ってきて撮影を再開する。決まりな、智幸」

「そんな……そんなこと、勝手に決めないでよ。もう、退学届出しちゃったんだから……」

「お前、知らないんだな。正式に退学が認められるのは指導教員と学部長にサインもらってからだから一週間はかかる。いまならまだ取り下げてもらえるって海が教えてくれたぞ。だから戻ってこいよ。ほら」

カメラを下ろして、智幸に手を伸ばす。

しかし掴もうとしない。息苦しそうに胸元のシャツをくしゃりと掴む。なにか怯えているようだった。

降りしきる雨が智幸の頬をつたってぽたぽた落ちていった。

「私、私……諦めたんだ。私と一緒にいたら、君の想いとか、望むこととか、応えてあげられない。普通にできることが難しいんだって。君だって周りに変な目で見られて、結果として傷つ

くかもしれない。ひとりでぐるぐる考えたらすごく不安になってきて……もう、ここにいないほうがいいんだって思った。だから諦めた。髪も切った。ちゃんと君を諦めた……。なのに、それなのに、どうして香川まできちゃったの！」

悲壮に訴える智幸。

「短い髪を見てわかったでしょ！ 私のいまが！ カラダが！ どうして私なんか追いかけちゃったの!？」

糾弾され、問いを突きつけられ、俺は――

「ちゃんと、見ようって思ったから」

あるがままの気持ちを伝えた。

「俺、智幸のこと、智幸のそばでちゃんと見たいんだ。智幸が髪を切っても、どう変わったとしても、真正面で見ると。見えるものだって、見えないものだって、全部見ていきたい」

胸の内から出た感情を口にしていこう。

「だから俺がお前を見るのを手伝ってほしいんだ。俺も、智幸のためにできること手伝うから。智幸が望むこととか、してほしいこととか、ひとりじゃキツそうなことも協力する。だから、だからさ」

屋上でも、展望台でも、ちゃんと言えなかった続きを。

カットの続きを。

「こんなところでだけど、俺と付き合ってくれないか？」

俺は智幸に手を伸ばしたまま、告げた。

「わかってない。君、わかってないからそんなカッコいいこと言えるんだ……。まだ私の一面しか、私のぜんぶを見てないから！」

「じゃあ、これから見せてくれよ」

智幸の目の淵にたまっていた透明な滴がこぼれた。

「見ていきたいんだ」

押さえつけていたものが、堰が壊れたように一気に溢れ返って落涙した。

「……私、髪切っちゃってるんだよ。こんな私なんだよ？」

「わかってる」

「……君のお母さん、びっくりしちゃうよ。私なんか、紹介したら」

「うちの母親が気にするのは更年期障害と預金残高だけだ。だから心配すんな」

「遊ぶのだって……これから夏になって、たとえば海に遊びに行くことになっても、私はほかの女の子とは違うよ。君と一緒にしてみたいって思うよ。思うけど、ほかの人がいる前じゃ……」

「だったらだれもいない貸し切りできるビーチに行こうぜ。山さん旅行代理店で働いてるからそこらへん詳しいだろ。ああ、金の心配はいらない。使いどころをなくしたやつがあるんだ」

「アパート、解約しちゃったよ……」

「教務課で学生向けマンション斡旋してるから、海にいい部屋空いてないか聞いてみようぜ」

「君はいいけど、二部のみんなはびっくりするよ。引いちゃうよ……」

「うちの学部に引くやつなんていねえよ。思い出せよ智幸、一緒に撮ってきた連中のこと。定時退社上等の企業戦士に、SNSの運営をやっている高性能ばあさん。野村の卒論のテーマなんてムダ毛だぞ、ムダ毛。普通いねえよそんなテーマ設定するやつ。田中の自主制作映画のタイトルなんて『俺が靴だと思っていたものは本当は鍋だった』ってどんなバカ映画だよ。ほかにもまだ胃もたれしそうなやつばかりいて、こんな濃いやつらがそれぐらいで引くかよ。だから、なにも問題ねえよ」

安心しろと、彼女の不安をひとつひとつ潰していってくと、智幸は震えた手をゆっくり伸ばす。智幸の指先が、肌が、一度触れて、けど俺の手を掴むかまだ迷っていた。

「ダメだ……やっぱり私なんか、ダメだよ」

半歩、智幸後ずさる。

「ダメじゃねえよ」

俺は動じなかった。

「ダメなことなんてあるものか。俺なら、ダメじゃねえはずだ」

自分の胸を、会社の制服を、ぽんと叩いた。

「いいの……本当にいいの？」

智幸は肩を震わせ、嗚咽しながら聞いてくる。

「君のこと、好きになっちゃうよ。いっぱいいっぱい好きになっちゃうよ！ でも私は、今の私じゃっ、君が求めることや望むこと全部きちんと叶えてあげられるかわからないよ！ それでも好きになっちゃうよ！ すごく恋するよ！ スカートだってはいっちゃうよ！」

俺は頷いた。

「智幸。協力してほしいこと、なんかあるか？」

「……じゃあ、それじゃあ、一緒にお父さんを説得するための作戦会議、してほしい。そばにいてほしいんだ」

そっと俺は智幸の手を掴んだ。彼女は抵抗せず、ぎゅっと握り返してくれた。

「行こうぜ」

「うん……うんっ！ うっ、ううっ……うわあああああん！」

空港のど真ん中で、智幸は人目も気にせず泣いた。子どもみたいにわんわん泣いた。しゃくりをあげながら途切れ途切れの言葉を続けていく。

「お父さん、お父さんね、う、ううっ……、すぐ怒って灰皿とか投げるけど、投げるコース決まってる、ひぐっ、私、避け方知ってるから、君に教えてあげる、あげるねっ」

「ははっ、なんだよそれ。泣きながら言うことそれかよ」

涙でくしゃくしゃになった顔で、智幸は笑った。泣きながら笑う顔はアンバランスで、言ってることもなんかおかしくて、俺も笑った。笑ってるのに、智幸の表情見るとうっかりもらい泣きしてしまいそうで、これは雨のせいだとかごまかそうと思ったが、無理だった。

俺たちはひとつの傘の中にいた。

雨はもう俺たちを濡らさない。

二人で握った傘なら、これからどれだけ雨が降り続けても平気だと思えた。

そして、季節が始まる前のような予感があった。

いつかアメは上がり、青く晴れた春の日のような世界を俺たちは見ることができると。



青春アメとミエナイ彼女

<http://p.booklog.jp/book/97491>

著者 : you

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/seidan1231/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97491>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97491>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ